
OLFEED ~ギルド職員の仕事~

藤原無稔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OLFEED ～ギルド職員の仕事～

【Nコード】

N7196W

【作者名】

藤原無稔

【あらすじ】

オルフィード大陸に広く存在する仕事幹旋機関ギルドに就職した1年目の新人、リキット。忙しい仕事の日々・・・なんて全然無かった。暇だ暇だと呪文のように唱える毎日。トラブルが起こる中、浮浪児を育てます。ギルド等の設定をオリジナルでお送りしています

第一日 ヒマな仕事

海に囲まれた広大な大地、オルフィード大陸。地図で見ればひし形を少し歪めたような大陸。東西南北にそれぞれ大国があり、大陸の中心にエクセリアという大国があった。エクセリアの東端に位置する街、リザリア。ここにもオルフィード大陸全土に張り巡らされた仕事斡旋機関、ギルドがあった。

ギルドはありとあらゆる仕事を対価とともに引き受け、これをギルドに登録している者に受けた対価の一部を報酬に斡旋する。言わば、何でも屋の仲介業者である。どんな仕事も仲介することから、傭兵の斡旋やアイテム探しに人探し、収穫の手伝いなどは当たり前、その組織ネットワークの大きさから情報の売買も行い、果てはならず者への宿の貸し出しもしていた。

ともすれば、犯罪者やならず者の巣窟のように誤解を受けそうだが、公共機関のような厳格さがそこにはあった。その一つとして、犯罪者に懸賞金を掛け公布するのもギルドの役割だった。もちろん懸賞金には国の公金や被害者遺族からの献金で賄われている。

ギルドは魔法通信システムという独自の技術を使っていて、斡旋業の補助や賞金首の照会に情報の販売も、この魔法通信の端末を使用させるほどの技術力をもっている。

ともかく、情報力という点において大国ですら並び立つ事が無いほどであった。

中央エクセリア国の東端、リザリア。

エクセリアと交易の最も多い、東の大国イーリアとの国境に程近い街。両国の交易業者が頻繁に立ち寄るために宿と厩舎を提供する者が多く、繁華街が大きく夜にもなれば騒々しいほど賑わうが、昼にはせせこましく商隊が大通りを行き交う。だがそれ以上に目立つ

のが町全体を覆い隠すように大きな防壁が囲んでいる事だ。また軍が駐留するための基地があり、防壁の効果も手伝ってか治安がよかった。

物流の中継点、商人たちが立ち寄り休息をする場所を求めるのだから、治安は良いに越した事はない。だが、日に入れ替わる人の数がかこれだけ多い街で、治安が良いというのは珍しい。

もっとも治安のためのというよりも、東のイーリアへ睨みを利かせているという背景が強いのもかもしれない。実際、軍備もそれなりに大きく、至る所でエクセリア軍人を見ることが出来る。

だからか、リザリアは商人のオアシスと呼ばれている。

リザリアのギルドには商人がよく訪れる。毎日違う商人が出入りする。

商隊の護衛を雇うことは、中継点であるリザリアでは滅多に無いし、この街で一番の顧客である商人が求めるようなサービスや道具は、専門店が立ち並んでいるから、ギルドで商人がする事といえば情報を売り買いしていくくらいだ。

魔法ネットワーク端末、台上の操作パネルの上部に位置する青い魔法立方体からキューブと呼んでいる。このキューブで商人が情報を閲覧する。情報を売っている商人もたまに見かけるが、キューブを使った魔法通信で行うので、実際に僕たち、リザリア在中のギルド職員がする事はほとんどない。今も何かの情報を売った商人風の男に銅貨を3枚渡したところだ。ハッキリ言って、暇だ。

お金といえば、キューブで情報を買う時にキューブに金貨・銀貨・銅貨を入れるんだけど、内部に簡単なセンサーがあるだけで、後は重さでそれぞれの硬貨と判断するらしい。サイズと重さが一緒なら同じ鉱物って事なんだろうけど・・・とにかく、暇だ。

「はぁーーーーー」

銅貨を渡した商人が出て行ったのを確認して長く大きなため息を吐く。今ギルドには職員しか居ない。

「仕事しろよ、リキット」

すぐさま、このギルドで唯一の相棒が皮肉った。

唯一の相棒と言っても、僕に友達が少ないわけじゃなく、ただ単にリザリア東ギルドには、僕と相棒のレーデしか職員が居ないだけだ。決して、友達が少ないわけじゃない。

「仕事って言っても、今みたいに情報代渡すか、キューブのお金を銀行に持つてくくらいしか、することないじゃん」

顔を膨らませながら両肘をカウンターにつく。

「ははは・・・まあ、確かにな」

苦笑いしながら、管理用キューブに先程の商人の情報代の受け渡しについて入力するレーデ。

管理用キューブというのは、仕事の登録や顧客・ギルドメンバーの照会、報酬の受け渡し状況なんかを閲覧入力するためのキューブで黄色い魔法立方体がついてるので、僕たちは単に黄色とか、黄キューブとか呼んでいる。僕たちのような末端の職員用のキューブだ。逆に、客用のキューブは青いので、青キューブと言う。

「ん・・・やつぱり、商人じゃなくてハンターだったか」

入力していたレーデが、黄色の管理キューブを見ながら言った。商人とかハンターというのは、ギルドメンバー、つまりギルドに登録した幹旋を受ける人の、系統の事で

、幹旋を受ける際に重要な要素の一つ。外では、自分はハンターだとか、商人ギルド所属だとか、言うみたいだけど、実際にはギルド組織は1つで、それぞれギルドが認定した系統の、許可されたランクまでの仕事しか幹旋されないだけで、系統ごとに商人ギルド、ハンターギルド、学者ギルド、クラフトマン技巧士ギルド・・・なんていう風にギルドの建物が立ち並んでいたりはしない。

「別に珍しくも面白くもないよ」

格別リザリアでは人目を引き付ける為の商人の格好の方が、修道

士や冒険者を装うより、よほど目立たないため、そうしている人も
いる。

仮にハンター系統のギルドメンバーだったとしても、情報の売買
のためだけに最低のハンターランクを得て、クエストを受けず商い
をしている人も多い。商人系統のライセンスには所在地が必要で、
旅商売をしている人はハンターのライセンスを得ているのだろう。

ちなみにクエストというのは、ギルドが受けて紹介する仕事の呼
称で、設立当初ギルドがエクセリア王国立地図製作委員会と呼ばれ
ていた頃。オルフィード大陸の地図製作のついでに未開地の開拓余
地を測つたり、魔窟への進入といった探索を主とする作業を一般か
ら募集していた事を起源としている。ハンターと言うのもこの頃の
名残だ。

当初、地図の製作は数世紀はかかると推測されていたらしいが、
今ほど発達していなかった魔法通信を使用した製作は、あまり正確
ではないにしろ、通常の使用に問題の無い程度の地図を、たったの
五年で完成させた。正確な測量による大陸図の製作は、ギルド設立
から半世紀経った今でも専門チームによって続けられている。

もともと、仕事の引き受けと紹介が十分な事業になるという商機
が大きかったことから、クエストの引き受けと紹介を事業として独
立させる結果となった。名を新たにギルドとした上、本懐であった
地図製作を国から引き継ぐ事で準公的機関という立場を確立した。
更にエクセリア王国とは別に、魔法通信の研究開発に非常に力を入
れ、独自の通信システムを瞬く間に作り上げた。半世紀前には、術
者同士の思念会話のようなものを魔法通信と呼んでいたが、今では
魔力を原動力としたデータ通信の事をいう。革命といって差し支え
ないほどの変化と言える。当然各国、ギルドの魔法通信システムを
導入している。

ギルドが準公的機関という立場とネットワークを柔軟に利用して、
他の追隨を許さないほど巨大な組織に急成長したのは事実だ。だが

「こそ僕は、ギルド職員になったことをステータスだと確信できる。

しばらく、沈黙が続いたので目を閉じていると。

「ああ・・・また止まった」

「そう、4日ほど前から黄キューブが止まって反応しなくなるのだ。といつても10分ほど置けば、また普通に動くようになるので、暇なギルドには大した影響は無かった。でも一応、メンテナンスを要請している。ギルドの特殊技術だから、開発部だか技術部から専門員がやってくるのに結構時間がかかる上、青キューブや魔法通信には異常が無いために、後回しにされてるのかも知れない。」

「また？暇なのに、更に・・・暇になつた」

「わざと最後ゆっくりと伸ばして言う。黄色キューブは暇な時、クエストやギルドメンバーの情報を閲覧するという、大事な暇つぶしに使えるのだった。まあ、良識ある使い方ではないよね。」

「リキット・・・お前、だらけ過ぎだぞ」

「怒気も無く、先輩風を吹かされる。まあ、確かに1つ年上で、10ヶ月先輩だけだ。」

「とは言つても仕事が無いし」

「それでもレーデに対して敬語を使わないのは、僕が礼節を重んじないからじゃなく、ギルド職員になる前からの知り合いだからだ。」

「エクセリアでは幼少時、少年時の教育を経て社会へ出るのが普通だけど、僕の家は割と裕福で、更に上の教育を受けられた。そうして入った学院、エクセリア王国立経済学院で知り合った。レーデは1年留年していて、最初はそうとは知らなかったから、そのままズルズルと敬語を使わず話していた。レーデも口調を気にしない気さくな性格で、年上と知った後で改めて敬語を使つたら、逆に皮肉の一つでも言われていただろう。」

「学院を卒業した後、僕は更に上の経済研究学院に入って、一生安泰と言われるギルド職員になったという訳。」

一方、レーデは学院卒業後、研究学院に入る金もないし商隊に入
って世界を見て回ると言つて、僕とは違う道を進んだ。

結果的に、同じギルドの2人しか常駐しない、僕の初めての職場
である、ここリザリア東ギルドで再会する事になったのだから、世
間は狭いと思えてしまう。

「そついえば、お前エリートコースだつて？」

妬みも羨ましさも感じない世間話のような口調で尋ねてくるレー
デ。

「・・・さあ？」

ギルド内を見回した後、両手を軽く上げ答える。

「はははっ、本当にわからなくなるな」

「他人事だと思つて」

愉快そつに笑うレーデを余所目に、両手を頬に付け目を閉じる。
今度は口をへの字に曲げて。

本当は、2年の間に複数のギルドに赴任した後、試験があつてそ
れに合格すれば晴れてエリートコース確定なんだけど、こういう仕
事の少ないギルドに配属されると、暗に試験勉強しろと言われてい
るようで、やる気が起きない。

それでも、嫌味な上司や性格の悪い同僚のいる配属先で仕事に忙
殺されることを考えれば、旧知の友人と仕事の少ない配属先とい
うのは、比べるべくも無く、良環境であるのは間違いない。むしろ、
かなりの優待遇なんじゃないかと思う。

そんなことを考えていると、来客を知らせるドアベルがカラカラ
と鳴った。

いつものように一瞥し、軽くお辞儀をしようとしたが、出来なか
った。明らかにこの街の雰囲気とそぐわないその少年の姿が、何気
ない一連の仕草を躊躇させてしまったのだ。

軍製品のような機能重視でどこか重苦しい印象を与える、黒を基

調とした制服のような服装は、袖口から先が千切れて無くなっており、泥の乾いた後もある。ほとんど黒一色なのにやたら汚れを感じさせるほどボロボロの状態だった。その服装とは対照的に顔立ちは幼さを残しながらも整っており、何より白い肌に、燃える様に天に向かつて伸びる赤い髪が印象的で何かの美術作品かと思わせた。年の頃は15くらいだろうか。

その綺麗な印象を与える汚らしい少年は、こなれたように青キューブを操作し始める。そのいつも通りの光景に自分が飲まれていた事に気が付く。と同時に、少年が地に着きそうなほど大きな剣を帯剣している事にも気付いた。完全に雰囲気飲まれていたらしい。

ここリザリアでは滅多にお目にかかれないだろうが、遺跡や魔窟に程近いギルドならばよくある光景なのではないかなどと、勝手なイメージをして現実に戻った僕は、レーデの方を見やる。

レーデもまた僕の方へ向きなおそうとしていた。お互いの視線がぶつかる。レーデの顔が呆けている様に感じた。

それがひどく滑稽思えて、思わず吹き出しそうになり、慌てて両手で口を押さえた。

レーデはレーデで僕の行動が可笑しかったのかクスクスと笑い始める。

にやけた顔をさせたままレーデが、いつの間にか直っていた黄キューブで閲覧者の情報をすぐさま表示させる。僕もそれを見ようと横から覗くと、表示された情報に、一際興味をそそられるものがあった。

ハンターランクCとあった。ランクは資格系統にもよって3〜6種類あるが、ハンター資格のランクは最高Aから最低Fまでの6種類あって、全系統の中でランク数が一番多い。というのも、ハンターの仕事というのが、他の系統に当てはまらない仕事・・・つまり、何でも屋のような仕事が多いから。単純に仕事の数も、登録者の数も最も多い。最低のFランクは正直、誰でもなれる。報酬こそ少ないが、主婦だろうが浮浪者だろうが、誰でもやれるような仕事だ。

従って、商人ライセンスを得られない人もハンターライセンスを得て情報売買したりする。それ故に一番多いのがFランクハンターだ。逆にEランクからが本当のハンターとも言える。

もつともEランクとDランクは同格というのがギルドの見解だ。Eランクは知識を、Dランクは体力を必要とする要素が大きい仕事と、性質の違いで仕事を分けているだけだったりするのだが。

とにかくハンターは、何でも屋な性質上、上位のランクを得るためには、知識量・戦闘力・判断力・順応力とあらゆる能力を要求され、どうしてもクエストをこなす上での総合力が必要とされる。

そして、この少年は既にCランクハンターだって事。Cランクともなると、要人とまでいかないまでも旅の護衛や、規模にもよるが賊退治なんていう、実力者向けの危険クエストも含まれるランクだ。

こんな子どもがとも邪推がよぎってしまうが、汚れきった服装もクエストの勲章かのように、見る目が変わってしまった。というのもCランクハンターなら選り好みさえしなければ、クエストの報酬だけで暮らしていけるレベル。プロのハンターって事だ。

ひとしきり青キューブを眺めていた少年は、さもつまらなさそうな顔を一瞬浮かべ、思案する素振りをみせる。どうやら気に入るクエストが無かった様だ。それはそうだろう、リザリアのCランクのハンタークエストはここ1週間で、急ぎの行商護衛クエストと国境付近イーリア国内の山賊討伐クエストの2件。どちらもクエスト進行中で、残ったクエストも数少なく、誰もやりたがらない様な内容か、怪しさが伺えるようなクエストだったと思う。

他ではどうか知らないけど、基本的に、リザリアは行商が休息に立ち寄る場所で、行商途中の商隊ばかり。リザリア発の商隊も計画的に護衛を雇うならば、定期間雇う相手をギルドを介さず決めている事だろう。ギルドに制約を受けないように、手数料を払わないようにするのは一理ある。

ギルドのクエストでは、登録メンバーの管理とランク分けもあり、ハンターが裏切ったり、能力を詐称されたから積荷を守れなかったのは、まずあり得ない。逆を言えば、ギルドへの手数料は、安心を買うと考えれば高くは無い。その代わり、手数料と報酬は必ず前金で全額だ。この制約が無いと依頼者は別の者を雇ってしまったり報酬を踏み倒すというトラブルが必ず起こる。従って、全額前金制度は絶対に必要だ。もちろん、クエストを受ける者、ソルバーが決まらなかった場合は、手数料の一部以外を返金する。ギルドでは問題を解決する者の意を込めて、クエストを受ける人をソルバーと呼んでいる。

そんな訳で、行商をする者でもギルドを利用しない人もいる。中には、護衛を全く雇わず賊に遭わない事に賭ける商魂逞しいツワモノも多いと聞く。それがあるから、賊もなかなか減らないのだと思う。奪われた事への報復に討伐依頼をするくらいなら、最初から奪われないように護衛を雇えばいいのにと、現在遂行中であるう討伐クエストの事をふと考える。

少年が面倒臭そうに立ち上がり僕たちの居る方へ近寄る。

「クエストを受ける」

ただそれだけをカウンター越しに言う。随分と無愛想な子供だと思いが、ソルバー無しにクエストは達成しないから、代金を払う依頼者と同等と考え、解決者^{ソルバー}と依頼者を巧く取り持つのが僕たちの仕事。ってことで、営業スマイルで応対する。

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

言って黄キューブを操作して、少年が登録したクエストを照会する。

「・・・こちらのクエストでよろしいですか？」

黄キューブの反対面にクエスト情報を表示させて、事務的な確認をするが、それとは別に本当にこのクエストでいいのかという疑問の意味を込めて語尾が強まる。

そのクエストには覚えがあつた。事件というほどの事はなく、そういう事もあるのだと、働き始めたばかりの僕が憶えるには十分のトラブルがあつたクエストだ。一見、ただのアイテム収拾クエストなのだけど、失敗報酬が0%のクエストなのだ。

失敗報酬とはその名の示すとおり、クエストを失敗した時のソルバーへの報酬で、クエストの内容で分類されるギルド規定以上であれば、何%にでも設定できる。アイテム収拾はその中でもクエストの成否がハッキリとした形で判断できるため、ギルド規定に則つて失敗報酬を0%を設定できる。

まあ、失敗報酬は誰でも規定の丁度で設定するのだから、そこは問題じゃない。問題になつたのは、ギルドで受け渡しを行う前に盗難にあつた事だ。その時のソルバーは、依頼人が盗んだ犯人だと主張したが、ギルドとしてはアイテムを持って来れなかつた以上は失敗とする他は無かつた。

その時、新人なりに精一杯対応したのだけど、怒鳴られながら詰め寄られた記憶は、今思い返してもイライラしてくる。しかし、それ一回きりではなく以前にも同じことがあつたと、今はギルド本部勤務の先輩に教えてもらった。どう考えても、依頼品を盗まれるのが悪いのだけど、問題の潜伏しているクエストであることには間違いない。

「ああ」

その生返事に、このクエストでなければ感じなかつただろう、不快感というか苛立ちを覚えつつ、忠告をする事にした。

「こちらの”薬素材収拾”クエストなんです、素材アイテムが盗難に遭つたり、狙われる事がありますので、お気をつけください」

「・・・」

無視。

「あ、あの。聞いてますか？このクエストの素材アイテムは」

「だから何だ？盗まれる奴が間抜けなだけだろう・・・」

つい、その通り！と口を滑らせそうになりつつ、少し気分がよく

なつた気がした。

「早くしてくれないか？」

「すみません、では、登録しましたので、アイテム收拾頑張ってください」

「・・・」

青キューブで、クエストの受諾と情報を確認すると、やはり無言で出て行ってしまふ。本当に無愛想だ。

レーデが少年を目で追いながら、呆けているように見えた。

「どうかしたの、レーデ？」

「いや、なんでもない・・・あんな子どもが儀式場跡地に行くんだから、世も末だと思つてな」

リザリアから南に程近い場所に、邪教集団が何かの儀式に使つていたらしい廃墟がある。そこは負のマナが漂っているらしく、普通ではお目にかかれないモンスターと植物の巣となつていた。その中に薬の素材となる植物が生息している。

「でもあの子もランクハンターなんだし、大丈夫でしょ」

「・・・そうだな、それでもモンスターが怖いつて思つんじゃないのか？つてな」

「そうかな？さっきの子供の場合、モンスター相手に眼を付けてもらうだけ」

「・・・だといいいんだが」

切れの悪い物言いに何だか心配になつてくる。

「レーデって子供好きだった？」

「ん？どうかな・・・嫌いではなかったが」

「子供が欲しいなら、まず彼女を作らないと！大雑把でがさつなレーデには、細かいところに気の利く娘がいいと思つよ」

「・・・お前こそどうなんだ、彼女作る気ないのか？」

「あ、あるよ」

自分で振つておいてなんだけど、この話題はダメだ。誰の得にも

ならない。

「お前は頼りなさそうなところがあるから、引っ張っていつてくれる姐御肌な人がいいと思うぞ」

「う、うん」

痛いところを突かれ、たじたじと返事をしながら、レーデに笑顔が戻っていくのが感じられたので、今日のところは良しとしよう。

第二日 ソトな仕事

今日は朝からクエスト品の配達をしている。依頼人の希望で運搬を委託することはあるけど、本来、品物の運搬はギルドの仕事じゃない。それでも、配達をするのは依頼人が、この街の、エクセリア東部地域の権力者で遠い親戚にあたるため。それも、直接配達を頼まれるものだから断れる訳がない。

クラフトマン
技巧士のソルバーによる銀製の壁掛け細工を渡し、ひとしきり細工について語った後、世間話に突入する。かれこれ、2時間は経過していた。まあ、話そのものもなかなか面白いもので、消閑の訪問といえ、それらしくもある。

「そういえば、今日の夕刻には嵐になるという事だ、十分気をつけたまえよ」

とある政治家の裏話も山場を終え、僕がお茶の3杯目を飲み干しかけた辺り、依頼人がすつと立ち上がり窓の外を眺めながら言う。

この人は話はメリハリも効いてて、切り上げるタイミングも心得ているようで、スツキリと話を聞ける。僕でなくても見習いたいと思わせるだろう。

「リキット君、次の配達もお願いするよ」

「はい、またお話を聞かせてください」

そうして別れると、空を見上げる。東の空には重く暗い雲が広がっており、天気荒れる事を予告しているようだった。離れてやや南の空には、白く薄い雲が架かっているものの、燦々と街を照らしている太陽が頭上に昇ろうとしていた。

もうお昼、ほどよくお腹の虫が鳴いたような気がした。レーデには悪いけど、先に昼食を済ませて戻ろう。

リザリアを南北に分断する、東門から西門まで真っ直ぐ伸びるを大通りまで出ると、段違いに騒がしくなる。人通りはもちろん馬車

の往来や、露店商が至る所に日除け天幕を垂らしていて、見た目にも喧騒を感じることが出来る。

東門へ近づくと喧騒も薄まり、いつの間にか反対側から歩いてくる赤髪のシルエットを見つめる。昨日の少年だとすぐにわかったが、先に東ギルドへと入っていった。それを追うような形で僕もギルドへ到着する。

木製であって重厚感を漂わせる扉を開けると、予想していた通り、少年がカウンター前で何か訴えているようだった。クエスト失敗かと思いきや、カウンター奥に見慣れない男女3名と二人掛けのソファほど場所を取る大きな器具や床にも小さな工具が所狭しと並べられたのを目にして、それとは違うことが伺えた。

「リキット！ちようどいい所に戻ってきた」

言うや否や駆け寄ってくるレーデの話によると、僕が配達に出ていった後、黄キューブのメンテナンスにカウンター奥の3人がやってきて、キューブの状態を検査していたけど、原因らしい原因が見つからないので、本格的な調査と代替え用のキューブを設置しようと、キューブとマナを切断したところに少年が来たので、マナの接続を待つか別のギルドに行くようにと説明していたとの事。

実にタイミングの悪い話だ。僕が知る限り青キューブの増設した時の事だけど、マナの接続はそれでも10分かそれくらいの短い間だったと記憶している。

「すぐ終わるなら、待ってもらえばいいじゃない？」

「それが、何かが良くないらしくて、かれこれ1時間切断したままなんだ……」

どういうわけか接続出来ないでいて、黄キューブが使えないって事は、青キューブで情報の閲覧する以外の事は全然何もやれないって事。つまり、少年はいつ終わるとも知れない接続を待つか、別のギルドへ行くかの話をされていた訳で、僕が丁度良く来たということは。

「・・・なるほどね、じゃあ、案内してくるよ」
「頼む！」

東ギルドと同じように、西門近く大通りに面したりザリア西ギルドなら案内する必要もないんだけど、近い方の中央ギルドは入り組んだ場所にあった。別に、わざと分かりにくい所に建設したんじゃない、都市機能や要所が変わる毎に、奥まっけていっただけだろう。その証拠に、中央ギルドはいい感じに古臭さを漂わせる酒場のような内装に、石造りの建物自体も結構ボロかった。

そんなどうでもいい話を差し込みながら、少年を案内する。・・・はずが、少年の足が異様に速く、僕はかろうじて歩いていけると言える様な早足を強いられ、少年の後ろを付いていくという、なんとも情けない状況で、普段運動することの少ない僕に、話をしながらなんて余裕などあるはずも無く。

「は・・・はあ・・・ちよ、ちよと待って・・・」

無言で振り返る少年。

「君、足速いねえ・・・」

「ああ、追ってくる奴がいるんで、つい。な」

目を細めて、面倒臭そうに答える。

「えっと、僕は案内をしようとしてるだけなんだけど・・・」

「お前じゃなくて、後ろのフードのガキだ」

言われて、くるりと振り返る。人ごみでハッキリとは見えなかったが、確かに離れた所で小さなフード姿が露店の影に入っていくようにみえた。赤髪の少年より小さかった気がする。

「この植物を盗もうとしてるんだろ」

どうして？と質問する前にあっさりとした回答が返ってくる。確かに僕はクエストアイテムの薬素材が盗難に遭う恐れがあると言ったけど、あまりに安直な思考というか、自意識過剰というか。だってそうでしょ、たまたまフードを被った子供が後ろを歩いていただけかもしれない。むしろ、それ以外を考える要素が全く無いのだから。

「気のせいだよ」

「・・・さつさと案内しろ」

無愛想なだけじゃなく、態度も言葉遣いも悪い。それ以上に、年上を敬うことを教えられなかったのかと疑問に思う。早く案内し終えて戻ろう。イライラする。

「じゃあ、このまま真っ直ぐ行つて3つ目の角を右へ、その後にある三叉路を左へ・・・」

言いつつ、歩き出した僕の後ろをゆっくりと付いてくる少年。なんだ、意外と素直なところがあるじゃないか。

僕が歩くペースが遅いと感じるのか、この街が珍しいのか、時折り立ち止まっては、首を回して色々なところをキョロキョロと見回す赤髪の少年の姿を目にすると、鶏が鶏冠トサカを振っているようで、少し愛らしくさえある。

そんな感じで進んでいるので、息切れのため中止していたどうでもいい説明を語っていた。少年は全く聞いている様子は無かったけど、この調子で無言のまま進むのは逆に息が詰まりそうだったからだ。

話も終わって、入り組んだ路地を奥へ奥へと進んでいくと人気が感じられなくなっていた。随分と寂しくなってきた。中央ギルドももう近いし、これといって話す事もないだろうと、静かに案内を続ける。

この道が一番近かったんだけど、この街に初めて訪れたらろう少年には、大通りをなるべく使う道を通るべきだったかなと、今更ながらに後悔していたりする。まあ、少年の態度の悪さが招いたことだと勝手な理屈をこねつつ、案内した後には大通りへの出かただけ教えればいいのかなどと算段をつける。

「もうすぐ中央ギルドに着うわ!!」

「ヒイイイイーン!!」

真横に突然、馬が出現した。

正確には小さな十字路、建物が死角になっていて、脇に止められていた馬が、急に現れたように感じたのだけど、そんな事は僕の驚き加減には関係ない。

僕は馬の反対側後方へそのまま後ずさる、というか、コケる。そのままお約束のように少年にぶつかっ……たりはせず、そのまま地面に尻餅をつく結果となる。

恥ずかしい。正直、恥ずかしい。が、ここは敢て笑顔で

「は〜ビツクリした〜！」

「……」

無視。

やっぱり、そうきますか、恥ずかしさ倍増です。

少年は特に笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、ただ僕に手を差し伸べていた。といつても、少年は馬の方を見ていて、暴れないよう片手で押さえていて、ついで程度に僕の方に手が伸ばされていただけなのだけど。

恥ずかしさは消えないものの、このまま尻で歩いていくわけにもいかないのです、差し伸べられた手を握ろうと手を出した、瞬間。

フードを被った子供が少年の後ろを走り抜ける。ちょうど目線の高さが腰辺りだったせい、少年の腰に軽く巻かれた布袋を、フードの子供が引き抜いて持って行ってしまったのが見えた。布袋を盗まれたのだ。

「……泥棒！」

「……ふう」

赤髪の少年はため息をつくや否や、脱兎の如く駆け出していた。小さなフード姿は追いつかれまいと、速度もそのままに角を曲がっていつてしまった。少年も逃すまいと凄いスピードで角を曲がる。僕も慌てて立ち上がり、二人を追う。

少年たちを見失った十字路に差し掛かると途中、ガシャーンと何かぶつかる音が聞こえ、二つ目の曲がり角に出ると曲がった先に、

フードを被ったままの掴み上げられた子供と、左手を子供の胸元に突き出した少年、そして窓から顔を出す野次馬を見つけた。そのまま駆け寄り少年に声を掛ける。

「はぁ・・・はぁ・・・取り返したの？」

「布袋ならそこに転がっている」

「ふう・・・中にクエストアイテムが・・・？」

「いや」

布袋は膨らみを持たず、紙切れのように地面に落ちていた。今度は、子供の方に向いて。

「えっと、君。盗った物はどこへやったのかな？」

「・・・それが全部」

「全部って、薬素材が入ってないじゃない」

「・・・知らない」

「君ね、嘘はよくないよ」

「こいつは嘘は吐いていない。最初から布袋には何も入っていない」

「つまり、何も入っていない布袋を盗まれて、それを盗り返すためにここまで走ったって事？」

「少し違うが、まあ、そうだ」

「どうして何も入ってないの？空だったとしても追うより中央ギルドに急げば良かったんじゃない？それに、狙われてるってどうして知ったのさ？」

「質問の多い奴・・・黙れ、説明する」

「第一に俺は、夜明け南の廃墟を出てすぐコイツがつけて来ていたのに気付いていた。次に、そんな事をするコイツに聞きたい事があった。だから、布袋を空にしてそのまま腰につけていた。わかったか？」

で、布袋を囮に子供を捕まえた・・・そういう事はもっと早くに教えてくれてもいいんじゃないかと思うんだ、お兄さんは・・・と精神的にだんだん圧倒されてきた気がする。

窓から顔を出していた野次馬以外にも人が集まり出し、周りが騒がしくなってきた。

「誰に盗むように頼まれた？」

そんなことお構い無しに詰問が始まった。ギルド職員が子供に暴行しているように見えるこの状況は、僕にとっては大問題だ。

「ここじゃ何だし、とりあえず、中央ギルドに場所を移そう」

周りを見渡すよう顎を出して促す。

「答える」

続けられる尋問。相当まずいかもしれない。もしかしたら、放つて置いて戻った方がいいかもしれない。

「ほ、ほら、エクセリア軍が来るかもしれないし」

「・・・」

流石に思案に至ったようで、一度ゆっくりと瞳を閉じ、開けて、子供の腕を掴み引つ張り歩き出す。

「行くぞ」

助かったと思いつつ見ると、相当な力を込めて掴んでいるのだろう、子供は痛そうな顔をしながらそれでも声を出さないよう我慢しながら、引きずられるようにして歩いていった。可哀想としか思えないが、状況が状況だけに、何も言えずに先頭に立つ。本当にすぐそこだからと、早足で案内する。

中央ギルドに着くと、自分が東ギルドの職員であることと、キユーブ故障によりソルバーを案内している最中に盗難に遭って、犯人を捕まえた事だけを伝えて、とりあえず、奥の部屋を借りることに成功した。

通報しようかと尋ねられたが、子供があまりに可哀想だったからか、どうしてかわからないが、とにかく申し出を断った。

それでもかなり異様な状況であることに変わりはない。尋問が再び始まるうとしていたが、僕はこの子供の言葉を二言しか聞いてい

ないのを思い出し、もしかしたら何も言わないんじゃないかと、少年に耳打ちをしたのだけど。少年は、だろうな。と、さも当たり前に戻るので、再び幼児虐待が始まらないように、僕から別の角度からアプローチすることにした。幸い、話は出来るようだから。しかしなんで僕がこんな目にと思わずにはいられない。

子供は椅子に座っている。その対面の椅子に僕も腰を落として、質問を始める。

「君、名前はなんていうのかな？」

「・・・カラス」

「えーつとカラス君？偽名かな？」

「・・・違う」

まあ、いいけど。呼ぶ名があれば、とりあえずはそれでいいと思っただ。

今まで案内したらそれきりと考え、少年の名前を未だに聞いていなかったため、後ろに立っている少年にも尋ねる。

「そういえば、君の名前聞いてなかったね？」

「デュライだ」

「OK。カラス君、彼はデュライ。僕はリキットって言うんだよろしくね」

「・・・」

この部屋の空気は、外の10倍は重いと思った。

「ん〜、カラス君の顔が良く見えないし、この部屋ちょっと暑いから、そのフード取ってもらえないかな？」

フードというよりは、ボロ切れを被っただけのようだが、そのボロ切れは大きく子供の全身をスッポリ覆い隠していた。それを頭の部分で両手で掴み引っ張り上げる様にして、脱ぎ去ると、これまたボロ切れで出来たような元の色がよく分からない半ズボンと半袖のような物をまとうていた。髪型はボサボサの何箇所か変な束が出来てはいるが、一応切ってはいる様で、短く、薄い茶色をしていた。顔は痩せこけていて骸骨の様とまでは感じないが、子供とは思えない

い衰退感だ。

ちなみに、僕の服装はギルドの制服で白を基調としたローブの上に、黄色のケープ型飾りをつけたもので、青のラインが入っている。所属や地域なんかで色や作りには差があるが、基本的にギルド職員の制服はローブだ。髪型は前髪が短めに左右中の三方向へ流し分け、後ろはミディアムの長さで癖によって軽く波打ってる感じで、明るいとも暗いとも言えない中間的な茶色。顔は悪くないと思ってる。

デュライは昨日と全く同じで汚れた黒い服装、天に向かって伸びる赤髪と、整った顔に白い肌。夜明けに廃墟を出たという言葉からも、昨日そのまま儀式場跡地へ向かって、昼頃に街に戻ったと推察できる。という事は寝てないのか、この人。

「いいね！そのケープ無いほうがカッコいいよ」
「……ん」

「カラスはどうしてデュライの布袋を取っていったのかな？」
「……売る」

「取った布袋はどこに持って行くつもりだったのかな？」

「……金くれる人」

「お金くれる人はどこにいるかな？」

「……」

「ん〜じゃあ、お金くれる人はデュライの事を知ってる？」

「……」

「じゃあ、布袋に何が入ってると思ってたの？」

「……知らない」

「カラスがデュライの持ち物を狙ったのはどうして？」

「……コイツが金になるもの持ってると教えてもらった」

どうも、答えてくれる質問とそうでない質問があるようで、まだはっきりとは言えないが、この子は嘘を吐かなさそうだということと、ある程度口封じをされているんじゃないかということが考えら

れそうだ。クエスト品を売る相手について聞くと答えないのでないか、などと考えているとデュライが割って入ってくる。

「お前がアイテム売る相手と、俺の事を教えた奴は同一人物か？」
確かに、カラスの返答に含まれる情報が少ないせいか、取引相手と狙わせた者を結びつけるような事は何も言っていない。僕も先入観から同一人物と思い込みそうになっていたところだ。

「・・・」
しかし、カラスはデュライを強く睨むだけで答えを返そうとはしなかった。

「随分嫌われたな」

それはそうだろう、カラスの右腕には掴まれた後が真っ赤になってまだ残っている。下手したら後が残るんじゃないだろうか。とは言え、その質問には一理あるので聞いておきたい所だろう。

「コイツには教えないから、僕にだけ同じ人だったかどうか教えて欲しいな」

「・・・違う、別の人」

椅子から降り、僕のそばまで来ると口に両手を添えて、小さな声ですそう応えた。

「そっか」

子供は僕に心を開いてくれてるのか、そうでなく単純に根が素直なだけなのか、今までのところ悪印象を受けなかった。

「このガキ、どうするんだ？」

デュライは答えが早く知りたいのであるうか、話をカラスの処遇のことへと移す。

正直、通報することを断ったもののカラスのこの後については、何も考えてはいなかった。例えば、無罪放免としたとして、カラスにとって何が変わるだろう、そのまま戻れば、いずれ蛾死しそうだ。だからといって、軍に引き渡す事が正しいとも思えない。軍が嫌いな訳でも、信用してない訳でもない。むしろ、好印象すら持っている。それでも、子供を組織に委ねてそれでお終いというのは、間違

っている気がする。

じゃあ、僕に何が出来るのか。考えても何も浮かばない。

「よし、乗りかかった船だ。僕の家に来るかい？カラス」

僕がこんなにお節介焼きな人だったとは知らなかった。

「・・・ん？」

「三食昼寝付きの家事手伝いのクエストかな。もつとも、ご飯以外に報酬は出せないんだけどね」

「・・・ご飯食べれる？」

「もちろん。ただし、これはクエストだから、ちゃんと働いてもらうけどね」

「・・・クエスト？それ、する」

我ながら、なんて面倒なことかと思っただが、クエストを知らないというカラスの発言に、もしかしたら想像以上に、面倒を見なくても済むかも知れないと、淡い期待を抱くのがあった。

カラスが僕にくつついて離れないので、体面的にデュライは耳打ちされた答えをハッキリと聞けずじまいでいたけれど、僕も猛烈な視線を受け続ける気はないので、中央ギルドの方々に説明を終えろと、すでに報酬を受け取っていたデュライと合流し、中央ギルドを出た後、デュライにだけ分かる様に切り出す。

「デュライ、今回のクエストは、あの商人が目的の情報を持っていないくて、大変だったでしょう？」

「・・・ああ」

これで間違いなく伝わったはず。

それ以降は特に話す事も無く、大通りへと差し掛かり左へ、東ギルドの方へ向かおうとする。するとカラスにローブの裾を引っ張られる。カラスの方を見ると右を振り向き、それに促されるように、カラスの視線の先を見やると、デュライがツカツカと歩いていつてるではないか。

まあ、親しくも無ければ、今後何かしらのお付き合いがあるわけ

でも無いけど、カラスに教えられなければ、誘拐かと心配する要素もあるでしょうよ。いや、無いにしても、じゃあこれで位の挨拶はあつて然るべきだと思っんです。

「デュライさようなら！」

苛立ちと諦めとちよつとした安堵とが、ない交ぜになった声で別れを告げた。少年が振り返ることは無かったが、ただ一度、腰に吊るした剣の柄に手を当てた。

デュライと別れ、東ギルドへ向かう間にカラスの生い立ちというか、過去について聞いてみたのだけど、物心ついた時にはもう、浮浪生活をしていたという事だった。唯一、名前を付けた人物がストリートチルドレングループのリーダー的存在だった子に名付けられたらしい。そのグループは数名で、生死を別にして全員居なくなつてしまつたという。

リザリアは発達した街で、普通に暮らしている分にはストリートチルドレンは見かけたりしない、そのように浮浪児というのが少ないとは言つても、繁華街の大きさから望まれない子供が産まれるという事があるのだろう。娼婦がその子供を捨ててしまえば、カラスのような子が必然に生まれる。

今まで見ようともしてこなかった世界の話だ。いまさらに心が痛む。

空は、そんな僕の心を表すように重く暗い雲が広がり始めていた。

休業中、他のギルドへお回り下さい。と手書きの紙切れの貼つてある東ギルドの扉を開けると、いつもの声が僕を迎えてくれる。

「遅いぞリキット、何やってたんだ？」

「ごめん、色々あつて」

カラスを連れて入ると、当然の質問が飛んでくるので、謝るのもそこそこにざっくりと事情を説明する。

「それでこの子を引き取るって言うのか、お前が？」

「うん、軍に引き渡すのは何か違うと思うんだ。それに、フランクハンタークエストである程度稼げるようになるまでの間だけだから」

「本気・・・なんだな？」

「うん」

「・・・わかった、俺に出来ることなら協力する」

レーデのそういう所、好きだよ。と言ったら、気持ち悪いこと言
うな。と一笑されてしまったが、本当にそう思し、助かる。

「協力するにはするんだが・・・」

口を濁らせながら悲報を告げ出すレーデ。

「扉の張り紙見ただろう？・・・持ってきた代替キューブが故障して
てるのか、マナに接続されても全く反応しないんだ。・・・ってこ
とで、完全に修理が終わるまでの間、この東ギルドは休業にして、
リキッドは西ギルドへ、俺は中央ギルドへ一時的な異動になった」
「ええー！」

カウンター奥を見れば、修理をしている職員の一人と目が合い、
すまなさそうに頭を下げられた。レーデの言葉を疑うわけではない
が、本当らしい。正直、西ギルドとか遠っ！！としか思わなかった。
実際、東西のギルドが東西の門の近くに建てられていて、東ギルド
近くに住まいを借りている僕は、ほぼ街を横断する事になる。遅い
僕の足で大体1時間かかるかどうか位の距離だ。よし、馬を借りよ
う。

決まってしまった事は仕方が無い。馬を借りることを含めて明日
は休もう。と心に誓うのであった。

「一応言っておくが、明日は休んでいいからな・・・修理は原因究
明を含めて1週間以上かかるらしいから、西側で部屋を借りるのも
有りだ。今日はもう帰っていいぞ、後の段取りとかは俺がやってお
くから」

僕の考えが見透かされたようで、ついで、欲しい情報ももたらされる。

「了解であります！」

しんどい時のハイテンションで応え。今日はすでに疲れ果てていたので、その言葉に甘えることにする。とはいえ、子連れで部屋を探すことや仕事中にカラスをどうするかを考えなければいけない。その辺の事は明日に回すとしても、とにかく今日はもう帰ろう。

カラスは大人しく黙ったまま修理作業を見ている。といっても、今のところ大人しく寡黙な様子しか見たことが無い。真剣に見ているそれは、修理作業というよりも、解体作業だった。やたら分解しているので、面白く映るのだろう。僕も興味は有るが、それ以上にもう寝たいという気持ちの方が圧倒的に大きい。

「カラス、行くよ」

日も落ちかけ、色味を帯びてきた美しい西の空と対照に、上空には黒い雲がどんと居座り、いつ降り始めてもおかしくない。家に向かう僕の後ろを、ちょこちょこ着いてくるその姿に優しい気持ちになりながらも、どこか不安を抱えていた。

と、空が一瞬輝き、激しい落雷の音の後、途端に激しい雨が降り出した。

「降り出した。こっちだカラス、急ぐよ」

家についた頃にはビシヨ濡れで、カラスに至っては外でシャワーを浴びている様に、もう打たれ放題だった。家といっても、今朝会った遠い親戚から借りている一軒家で、一人暮らしで使うにはかなり広く、使っていない部屋の方が多い。

雨に打たれビシヨ濡れでする事など、決まっている。どうせ、カラスの髪も体も洗ってやろうとも思っていたし、ちょうどいい、ま

ずは風呂。

この家には、ガスが供給される仕組みがある。設置されたガスのボンベを交換するという供給方法で、風呂と調理場で火を簡単に

起こす事が出来る。ちよつとした魔法給湯を導入すれば、シャワーも備え付けられるが、僕は風呂に浸かるのが好きなので、特に必要を感じない。ということで、お風呂を沸かしている間、外のシャワーを浴びていても風邪を引きそうなので、一度、身体を拭いて着替える事にする。

風呂が沸くまでなので、簡単な服装でいい。と思えど、子供服など持っておらず、タオルを巻くだけでいいかとカラスを呼ぶ。カラスは大人しく素直に言う事を聞くので、とても楽だ。

そうして、ボロ雑巾のように汚れた服を脱がし、身体を拭き出すと、色々わかつてくる。

細く骨と皮だけでできてるような細い腕には、デュライに掴まれた跡が赤黒くなり始めていた。全身細身で骨と皮だけのようだが、お腹は少し膨らみを帯びていて、餓鬼を連想させる。

餓鬼とは、子供のような背丈で、全身が細く肉付きが感じられな
いが、お腹だけぽっこりと丸くなった怪物の事だ。飢餓状態が長く
続き、不衛生な物しか食べれずいると、餓鬼の姿に似ていくという
もつとも、お腹がちよつと出ているというか、丸みがあるという
だけで、子供にすれば当然の姿だろう。

それに、はと胸と言うのか、胸も僅かに膨らんでおり、胴体と四肢とのアンバランスさに少し衝撃を受ける。

そして、股間に男の大事な物が・・・無いと。まあ、薄々とは気付いていたんですがね。確認が出来たついでで良しとしよう。

大まかに身体を拭いた後、タオルを巻きつけピンで留める。僕も同じように褌をポタポタと落とすローブを脱ぎ捨て、身体を拭いて軽く着込む。まだ、風呂が沸くまで時間もあるので、今の時期には全く必要ないが、暖炉に薪をくべ、火をつける。その後、濡れたカラスの服を洗濯する。そんなことをしていると風呂のお湯がいい湯加減になっていた。

レーデにも言われたことだけど、この先、この子の名前がカラスというのは、些か問題がある。女の子だとも分かったことだし、余

計カラスというのはいない。本人の意思もあるが、早めに決めた方がいいだろう。綺麗に身体を洗ってやった後、風呂に浸かりながらぼんやりそんなことを考えていた。この子の髪を洗うと蜂蜜のような綺麗な金髪で、それで連想したのか、幼い時分に初恋の金髪の綺麗な女の子の事を思い出していた。

「ミシエル・・・」

ついその名を声に出していた。

「ねえ、カラスって言う今の名前だと、これから、色々問題があるんだ。・・・君は人間なんだし、違う名前がいいと思うんだ。・・・ミシエルって呼んじゃダメかな？」

「・・・ん」

「ミシエルって名前でもいいって事かな？」

「・・・パンサーが付けてくれた名前じゃなきゃヤダー！」

パンサーというのは、リーダーだった子の事。きっと他の子も動物の名前だったに違いない。

「じゃあ、クロウかな。・・・カラスってのはクロウと言われる動物なんだ」

「クロウ？」

「そう、君はクロウ」

「・・・クロウ！」

どうやら気に入ったらしい。カラスと呼ぶのだけは避けられそうだが、問題はここから。女の子に自分の名前を鳥クロウと名乗らせるのは居た堪れない。

「そうだなあ、パンサーが付けてくれた名前ってことは、家族の名前でしょう？ だったらファミリーネームって言って、普通に名乗る名前とは別の、家族名なんだ。・・・例えば、僕の名前はリキッド＝インデルミッツって言って、リキッドは僕個人の名前、インデルミッツが家族の名前っていう風に二つあるんだ。」

「・・・それで、君の事をミシエル＝クロウと呼びたいんだけど、ダメかな？ ってこと」

「・・・クロウ？」

「そう、ミシエル「クロウ」

「クロウ！クロウ！」

当分の間は慣れないだろうから、フルネームで呼び続けることにしよう。ミシエルと呼んでも無視されそうだし。

風呂の温度も下がってた様で、子供のミシエルでも入浴する事が苦ではなかったようだ。しかし騙してしまった後ろめたさと、ファーストネームの方を全く気にしていない悲しさと、一応の体裁を取り繕うことに成功した安堵感、さらには、どうしようもない疲れと眠気が入り混じって、風呂から上がらずに居られなかった。

ミシエル「クロウ」の身体を拭くと、風呂に入る前と同じように、軽くタオルを巻きつけピンで留める。僕は寝巻きに着替える。

暖炉前に干したローブとポロ布は全く乾いていないが、折角なので、この部屋で、寝ることに決めた。というか、もう寝室まで行けそうに無い。

ミシエルにソファをあてがい寝るように促した後、肘掛け椅子に座りミシエルを眺めて、服も買わないなどと考えてるうちに、いつの間にか眠りについていた。

第三日 トロな休日〜午前

ドサッ！

その日の朝は衝撃と痛みから始まった。床に身体を椅子ごと叩きつけられ、その浮遊感の次に来る衝撃で目を覚ます。衝撃に驚くのもそこそこに、椅子の肘掛けの部分と床との間に右手を挟まれ、僕の体重が更に重みを加える。

「ツタアー……！！」

肘掛け椅子に座ったままだったのをすぐ思い出すと、すぐさま横倒れの姿勢を、四つん這いの体勢へと文字通り這うように身体を起こし数歩歩く。右の甲の辺りが痛み、ジンジンと響く。どうやら、強く打ち付けた以外に、間接を捻ったらしい。

「大丈夫？」

僕の叫び声で起きたのか、タオルを巻いた子供が側まで駆け寄ってきて、腰を落としてそう尋ねてくる。カラス・・・じゃなくて、ミシエルだ。彼女を見て、やっと名前の事や服を買おうと考えていたことを思い出す。

大丈夫かと尋ねられれば、椅子で寝たせいか身体全身が痛い。変な姿勢で寝るとなる痛みが全身を包んでいるようだ。筋肉痛のよう。と思いたいが、少なくとも下半身は筋肉痛なんだろう。

そんな事を頭の中で整理していた僕が返事を返さないのっているとミシエルは正面に回って顔を覗き込むように四つん這いになる。どうやら、心配してくれているらしい。

「ちょっと右手を捻っちゃったみたいだ。でも、大丈夫・・・心配してくれてありがとう、ミシエル＝クロウ」

「うん」

フルネームで名前を呼ぶのはわざとらしいと思ったが、こうして何度も繰り返し呼ばないと、いつまで経っても慣れないもの・・・多少強引でも、フルネームを呼ぶように意識しているうちに言わな

いとね。

ややして立ち上がり、薬箱を常備していないことに気付く。風邪ぐらいの病気になっても、怪我はしないのが僕の普通だ。でも今回は、自分の手の事もあるが、子供は生傷絶えないってどこかのおばちゃんが言っていたっけ？・・・ものはついでと言うが、買い物に行く先が一つ増えたようだ。

グウルルルウ

起きたてでお腹の虫が鳴り出すなんて珍しいと思ったが、考えてみれば昨日は夕飯も食べずに倒れるように眠ったのだから仕方が無いのかも。

この家にだって保存食くらいはあるが、朝食にそれを食べて、また保存食を買ってくるなんて邪道、僕はしない。僕は朝食は毎朝焼きたてパンを買い食いする派だ。ということ、まずは着替えだ。流石に、寝巻き姿で恥ずかしい思いをしながらパンを買いに行ける僕でも、タオルを巻いただけの子供を連れては行けない。ポロ布みたいなお服装の方が幾分かマシだ。・・・と思いたい。

当の本人はお腹に手を当てて、僕の方を見上げている。自分の腹の音と勘違いしているのかも。よくよく考えれば、ミシエルは僕以上に何も食べていない可能性がある。下手をすれば数日間。そう考えたら、焼き立てパンを早く食べさせてやりたくなる。

その彼女は何かを思い出したという顔つきをして

「リキット＝インデルミッツ！」

「はい！」

思わず名前を呼ばれ、応えてしまった。どうやら僕の名前を思い出したらしい。

「リキット＝インデルミッツ、クエスト。クエスト・・・したらご飯！」

これを訳すと、僕にクエストを出させて、それが終わったらご飯を食べるといふ事かな。仕事をせずに食事を与えられないと考えているのだろっ。律儀なことだ。

それにしても、僕がフルネームで呼んでいるとは言え、呼ばれる方となると堪ったものではないと思う。

「よし、わかった。その前に、僕の事を呼ぶときはリキットだけでいいから」

「リキット茸？」

「どんなキノコでしょうか・・・。」

「僕、リキット。君、ミシエル」

それぞれの顔を指差して言う、それを2回繰り返す。が、なぜだか顔を膨らませて不満そうな顔をする。

ミシエルは自分の方を指差して言う

「君、ミシエル＝クロー！」

「・・・自分のことは君とは言わないの」

「僕、ミシエル＝クロー？」

そういえば、ミシエルが自分のことを、私とか俺とかと言った事がないことを思い返す。今ここで安易に違うと言って矯正させる事ができるものなのか？ここは、自分のことを言えるようになっただけで随分な成長と考えるべきなんじゃないか。そうして、ミシエルが自分の事を僕と言うのを無理に正すのをやめた。

「そうそう、じゃあ・・・」

僕自身のほうを指差し、誘導する。

「君、リキット」

「そう正解！」

それがとても嬉しくて、くしゃくしゃと髪を撫でてしまう。ミシエルもどことなく嬉しそうな顔をしている。すると、短い蜂蜜色の髪から溢れ出した柑橘の香りが鼻をくすぐる。

その後、何度か自分と僕を指差しながら呪文を唱えるようにつぶやくミシエル。

ミシエルの身長から考えれば、年は12歳前後。もともと、この年頃の発育は急で、何より個人差が大きすぎる。なので、順当に考えれば12歳、発育が良かったとして10歳。それでも、言葉の覚

えは何歩分も遅れていて、偏りがあると感じる事が出来る。ミシエルの生い立ちを考えれば無理もない話だけだ。

「さーて、まずは着替えるぞ。ミシエル「クロウ」

「おう！」

ボロ布を纏ったミシエルにギルドの式典に使う冬用の長いケープを重ねて着させ、なんとか体裁を保つ。僕はといえば、いつものロブの制服を羽織っていた。そうした一番の理由はミシエルが僕のことを見つけやすくしたかったからだ。ミシエルが地理的感覚に優れていれば、落ち合う場所さえ決めておけばそれで済むかもしれないが、ミシエルの自立力とでもいうのか、それはまだ全くの未知数でわからない。

そうして今日は、手を繋いで出掛ける。まずは向かう先はパン屋だ。

表へ出ると昨日の大雨も嘘だったかのようになり、雲ひとつない快晴だった。朝早くと思っていただけ、太陽はすでに高く登っていて、懐中時計を見ると10時を過ぎた辺りだった。随分長い時間眠っていたようだ。

早速行き着けのパン屋さんにつくと、その女主人がまず口を開いた。

「あら今日はずいぶん遅いねえ、今日はお休みかい？」

「ええ、機械が故障しちゃったんで、今日はお休みで。明日から西ギルドに異動なんです」

まあ、焼きたて目当てに来るので、休みだからといってこんな時間に来た事は一度もないんだけど。

「本当かい？それじゃあ、今まで贖身してくれた分、今日はサービスしようかね」

「サービスしてくれるのはいいんですが、向こうに引っ越すとは言っていないですよ」

「馬でも借りるってのかい？豪勢だねえ」

「ははは。その辺りまだ決めてません」

「ところで、その子は、アレかい。隠し子かい？」

やはり気になるらしいが、予想してた質問の中では一番かわしや
すい。それは、僕の子供だとしたら10歳頃の子供ということにな
るからだ、そんなこと本気で言うまい。むしろ、全く質問されずに
変な噂になる事の方がよっぽど厄介だった。従って余裕の笑みを付
けて返せる。

「違いますよ。事情があつて預かつていただけですつて」

「そうかい。しかもうちよつと良い服着せてやんなよ？」

それが言いたかつたのか。けどそれは僕も重々承知している。見
ればケープの端から破れたズボンの裾が飛び出ている。

「すみません、このあと買いにいくつもりなんですけど。とにかく
お腹が減つてて、まずはオバサンのパンを食べさせてやりたかつた
んです」

女主人は聞くと、膝をおつてミシエルに話しかける。

「お嬢ちゃん、試作品がもうすぐ焼きあがるところなんだけど、食
べてみるかい？」

・・・ミシエルを女の子だとすぐに言い当てる。やはり判る人に
はわかるものなのだ、自分の見る目のなさを痛感する。

それにしても、試作品とはいえ焼きたてがあるのはラッキーだ。

「・・・う？」

「言葉がまだ不自由なんです。せつかくなんで頂きます！」
ミシエルに向き直つて、

「試作なんて滅多に食べられないんだぞ？ やつたな！」

「うん、やつた」

ややあつて

「ところでお嬢ちゃん、お名前はなんていうんだい？」

「・・・んゝ・・・ミシエル」クロウ！」

その微笑ましいやりとりを、僕がどれほど肝を冷やして見ていた
かを誰が予想できただろう。すこし汗をかいた気がする。

「ミシエルちゃんかい。もう焼けた頃だからちよつと待つてな」

いうと、数分もかからず、ぼつてりと膨らんだ茶色の紙袋を持って戻ってくる。その膨らみたるや、到底朝食としては、食べ切れない量であることが開ける前からわかってしまう。

「いやあ、気合いが入って作り過ぎちゃったよ。まだ半分以上あるから遠慮せずに持って行ってくんない」

「どんだけ試作してるんだこの人は。むしろ、遠慮したい。・・・が、明日から会えなくなるかもと思うとそうもできない。焼いたパンは生モノと違って腐るより、カビが生える事が懸念される。できるだけ今日中に食べなければと思いつつ、受け取る。

「はい、試作のキャロットパイ。できたら感想聞かせておくれよ」
「今なんと仰いました？・・・キャロットパイって、・・・キャロットって貴方。僕苦手なんですけど。焼きたて貰ってラッキーどころか、アンラッキーじゃないですか。食べられない事はないけど、ハッキリ言って嫌いだ。」

パン屋には食べるスペースがなく、そのまま紙袋ごとパンを持って行くことになる。

「ありがとうございます！」

「ミシエルちゃん、またね」

手をふって見送ってくれるパン屋の主人に、言葉を発さずにミシエルは拳を高く突き上げて応えていた。

パン屋を出て大通りへ向かう途中の喫茶店へ入れば、うらぶれたというより、骨董のような良さを感じさせる落ち着いた内装に、リザリアにあっては珍しく魔光灯を使っておらず、蝋燭に火を灯した照明が幾つも置かれており、とても大人びた感じの店に仕上がっている。しかし、客の入りはなぜか少ないそんな店。

魔光灯というのは、文字通り魔法で光を発する灯りのことで、一般に売られている物は北の大国から流通している物ばかりで、ある程度の強度がある透明か半透明な容器に、薬品と特定のマナが入った物のこと。魔科学の産物である。

魔光灯の多くは、ガラスに付いた摘みを捻る事で、薬品がガラスの中に入り、それがマナと反応して輝く。ガラスが割れたりするとマナが霧散してしまうし、薬品が切れればそれで使えなくなるので、消耗品のように扱われている。キューブの表示にもこの技術が応用されているが、半永久的に画面の表示が出来るキューブはまた特別な技術が用いられてると思われる。

この落ち着いた店の店主であろう、いい意味でくたびれた姿の初老の男性が、ゆっくりと低いが柔らかさを内包する声を出す。

「いらっしやい」

「薄めの紅茶と何かお勧めのジュースを」

ほかほかの紙袋を見せながら申し訳なさそうにそれだけを注文する。

この店の紅茶は、一種しか茶葉を用意してはいないけど、美味しいブレンドティーを出してくれる。淹り加減を注文しないといつも濃い。もっとも、この店の主流はコーヒーらしく、豆なら陳列棚に数多く揃っている。

空いている丸テーブルに座る、もちろん対面にミシエルを座らせて。

「ミシエル、クロウ、先に食べ始めよう」

「・・・クエストしないの？」

「今日は、いっぱい買うものがあるから、買い物しかしないかな」とすると途端に、悲しい顔をして俯いてしまうミシエル。そんなにクエストが楽しみなのと思うと、微笑ましく思える。

「大丈夫、明日からはがんがんクエストして貰うから、今日のところはお休みだよ。ミシエル、クロウ」

ミシエルはお腹を押さえて、今にも泣きそうな顔をして僕を真っ直に見据える。

「・・・クエストない。だから、ご飯ない」

僕の考えとは違った。

まだ一日も一緒にいるわけでもないのに、僕は何を分かった風に

接していたんだろうか。クエストがしたかった訳じゃない、食べ物を得るためにそうしろと僕が言ったからだ。その僕が今日はクエストは無いと言え、すなわちそれは、食べ物を得られないと言う事を意味しているんだ。

考えてみれば、路上生活をしていたミシエルが、僕のような見て見ぬふりをする人間に何かを分け与えて貰っていたとするには到底至らない。ミシエルにしてみれば、誰かから何かを無償で与えられる事、それ自体が奇抜なこと、不自然なことなんだ。思考の至らない異常事態なんだ。

とすれば、僕の今の言葉は、今日のご飯を食べるなど言ったのと同じ事。

「ごめんミシエル、僕今、嘘ついた。・・・今日のクエストは買い物に付き合う事！・・・で、このパンは先払いだからな、わかった？」

そう言ってテーブルの上に置いたパンを指差す。すぐにミシエルの顔もパアッと明るくなる。

「うん、わかった！」

そう言って紙袋を抱きしめる。・・・つまり、今日の買い物でミシエルはこのパン全部を手に入れたということになる。

「ミ、ミシエルさん・・・ミシエル！ク로우さん・・・僕に一個だけいいんでパンを分けてください」

ミシエルは渋々といった風にキャロットパイを一つ渡してくれる。「ありがとう」

すると、マスターが紅茶と黄みがかった白い液体を黙って置いて行く。ほんのりと豊かでサッパリとした甘い林檎の香りがする。マスターは話す時には優しい口調なのだが、いつも無口だ。

「これはパンのお返し、飲んでみて」

「・・・あまーい！うまーい！」

口に合ったようだ。さて、問題はこのキャロットパイ・・・。「いただきます」

「・・・？」

「食事を取る時には、食材や食材を育ててくれた人、料理を作ってくれた人たちに感謝の気持ちを込めて、いただきますって言うんだよ」

「ん、いただきますー」

「いただきます」

キャロットパイを口に運ぶ、にんじんの香りがやたら強く、そして異様な甘ったるさが口を包む。僕はそれを、苦虫を噛み潰したような顔で食べ切るしかなかった。

ミシエルはというと、よほどお腹が空いていたのか、それとも甘いのが良かったのか美味しそうに、2口3口と頬張っていく。結局朝食ながらパン4個という大食漢顔負けの食いつぶりを披露してみた。

流し込むようにキャロットパイを食べ、口直しに頼んだサラダが無くなる頃には、ミシエルは目を瞑って幸せそうにパンの入った紙袋を抱いていた。

第三日 トロな休日〜昼間〜

喫茶店を後にして、そのまま衣料品店を目指す。といつても僕には子供服を取り扱ってる店の心当たりが無いので、大通りをぶらつきながら探すことにした。

すでに陽は昇りきっていて、昨晚の雨跡もほとんど残っておらず、それすら掻き消さんとするように陽気を放っている。冬用のケーブだから、暑いのだろう険しい顔をしているミシエルだが、やはり紙袋を大事そうに抱えてついでくる。昼食は必要無さそうだけど、早く服を一新したいところである。

大通りに面しているからか、ガラス張りの衣料品店をすぐに見つけることが出来た。全面ガラス張りやガラス戸の様な厚手のガラスの製錬は、製錬所が限られてくる上、需要も少ないのでかなり高価なのだが、それを差し引くほど集客力があるのだろ。例えば、今の僕のような客に対して。

ちよつがい
蝶番の具合が良いのか、想像より軽い動きでガラス戸を開け店内へと押し入る。

「いらつしゃあいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く、見回せば、流行のファツションなのか店の制服なのか判別の付かない、給仕の格好を模したような派手で明るい暖色を織り交ぜた服装をした、僕と同年代くらいの若い女性店員と、その格好に負けなくらい明るくカラフルな壁紙が印象深く映りこむ。

僕がこの店に入ったのはもちろん、外から子供服が見えたからだ。店員に軽くお辞儀をしてみせて、そそくさと子供服の見えた辺りにミシエルを引っ張っていく。

「これから、クエストに必要なミシエル「クロウの服を買っぞ、もちろん、ちゃんと着こなしてもらおうかな？」

「おー、わかった！」

思っていたより種類が多く、無地のポロシャツから装飾や刺繍の凝った革ジャケットまである。ふと横を見れば、上流階級の晩餐会について来る子供が来ていてもおかしくない豪華なドレスが掛けてあった。僕とミシエルだけで、これと決めるには難がありそうだ。

「お子様の服をお探しですかあ〜？」

途方にくれそうだった僕に、救いの手が差し伸べられる。

「ええ、普段着というかを、何着か。まず先に、何でもいいので一着」

「ええ〜つとお〜、」

「女の子です」

必要以上に間延びしたそれに答えを返すと、あつという間に上下揃えて持つてくる。ミシエルの顔立ちが男の子っぽいからじゃなく、多分服装のせいなんだろうと思う。実際、パン屋のオバサンは当てられたわけだし。

「よし、着替えてくるんだ、ミシエル！クロウ！」

女性店員に案内されて試着室へ向かう。とりあえず、着替え終わったら出ておいで。とだけ言って一人で着替えさせる。

しばらくすると試着室のカーテンを下から持ち上げて這い出てくるミシエル。出かける前に言った、ケープを着ておけという僕の指示を忠実に守っているのだろう、ケープを纏ったままの姿だった。そのケープを剥ぎ取った僕はすっこけそうになった。というのも、タータン柄の青いスカートと白いレースのシャツを着ているのだけど、シャツの向きが前後逆で、どうやって履いたのかスカートは裏地が思いっきり外側だった。

「ユ、ユニークな妹さんですね・・・」

間延びした口調だったはずの店員がボソツとこぼす。マジ勘弁、と聞こえた気がするのは、忘れてしまおう。

「い、今直すんで！」

なかなか離そうとしないパン入りの紙袋を預かっていたので、これを左で抱え上げ、右手でミシエルを引っこ抜いて持ち上げ、試着

室へ入る。捻っているので痛みが走るが、そんなことは後回しだ。

「スカートが裏つ返し、シャツはこつちが前。こうして着るんだぞ」
我ながらよく着せ直させるものと感心する余裕も無く、手早くミシエルの服装を整えると、今の服の分だけお金を支払って、もう少し見ていきますと告げて、元の場所に戻る。面倒くさい客とでも思われたのだろう、それ以降女性店員が話しかけて来ることは無かったが、結局は普段着4着、下着、軽めのコート、寝巻き、レインコートのお買い上げとなった。締めて672orenオレンの支払い、一人の客としては上々の支払いだろう。

オレンorenというのはオルフィードにおける通貨単位の事で、金銀銅の3種の硬貨を使って取引を行うのが主流だ。地域や流通なんかによっても差はあるが、リザリアでは手のひらを広げた位のただの麦粉パン1個が1oren相当する。

金銀銅の順に価値が高い。厳密に言えば、サイズや形状の違いで価値が違い、それぞれ金貨3種、銀貨4種、銅貨4種あつて基本的に円形硬貨で、価値と重量が比例する。そのため、大きい物は直径もそうだが厚みも増す。

円形の銅貨は真鍮製だが、銅貨の一番小さなベル型の物があつて、それだけ銅にアルミニウムを混ぜたもので、特別にピースオブレソと呼ばれる。基本的には、採算が合わない為と考えられるが、このピースオブレソは滅多に市場には出回らない。従つて、1オレン単位で取引するのが売買における暗黙のルールといえる。

硬貨の価値と物価とを参考にして貰えれば感じ取れるだろうが、銅貨と銀貨が主に流通しており、金貨は価値が高く、特に大きいサイズの物を持ち歩く者はそうそういない。現存する金鉱がダンジョン化しているというのが大きな理由の一つだろう。

「ありがとうございますあ〜」

女性店員の口調も戻っていたが、それを現金なものと思うのは余

りに早計だろうし、世話にもなっているのだからと、僕も礼を言う
と一際可愛らしい笑顔を見せてくれた。

想像以上の出費に、僕の財布は一瞬でくたびれ果ててしまう。先
の事もあって、ミシエルの金銭感覚が僕らと違い、それがミシエル
を悲しませる事にならないかとちよつと心配していたが、支払い台
の客側の縁が台上より5cmほど高く作られており、その構造を利
用して見えないようにお金を払った。無論、子供に支払いを見せな
いようにそうなっている訳ではなく、仕立ての作業台として使っ
ているのだろう、その証拠に生地が傷まないよう出っ張った縁は丸く
削られていて、先端には樹脂が固まっている。もつとも、その縁に
痛みが引いてきた右手をぶつけて、激痛に顔を歪めることになった
わけだけだ。

店を出る際には、女性店員が間延びした口調で同じ事を言った。
挨拶自体は特別な事ではないのだけど、驚いたのはそれに対して、
ミシエルが、ありがとー。と返したことだった。僕の真似だろうか、
それでもいい傾向にあるのは確かだろう。

綺麗に畳まれ収納されているといっても流石に両手が塞がるもの
で、僕は子供服一式入りの大きい紙袋を、ミシエルはパンの紙袋を
抱えて家に戻ってきた。

何度もぶつけている右手はそろそろ限界が来そうだ。普通、薬局
の隣には病院がある、併設されている事もしばしば。もはや、それ
らはセットと考えて間違いが無いほどだ。小さな診療所にも行け
ば、診察してくれた医師が顔を出すような感覚だ。医療費よりも薬
の値段の方が圧倒的に安いいため、薬局の方が繁盛するのだろう。も
つとも、医者も薬もピンきりなのでそれがどうのこうのとは全く言
えない。

何はともあれ、まず医者に行こうと思ったのだけど、財布がすっ
からかんのまま行くわけにもいかない。銀行に行くのもありだけど、
今は家の金庫で補充すれば十分だろう。

ミシエルの部屋も決まっていなかったので、子供服の入った紙袋は居間に置きっ放しにしたまま、お金も補充し外へ出ようとするも、ミシエルがパンの紙袋を持ったままだった。

「ミシエル「クロウ、パンは置いていこう」

「ヤダ」

「・・・誰も取ったりしないし、家の中なら持ち歩くよりも安全なんだ。何せ、パンが潰れないから、美味しいままでよ？」

僕はこれっぽっちも美味しいとは思っていないけど。すると、紙袋の中身を覗く

「ん・・・わかった、置いてく」

あれだけ大事そうに抱えてれば、どう考えても潰れるよね。そうして、ミシエルはパンを置いて行く決心したものの、名残惜しそうな顔をして、家が見えなくなるまで振り返ったりしていた。といっても、角をすぐ曲がったのでそれほど長い間じゃない。

風が吹く度に、スカートを気にするミシエルだが、初めて履いたかどうかはわからないが、パンツが見えることを気にしているのではなく、嫌な涼しさと重量感の変わった感覚、気持ち悪さがあるからだろう。僕も初めてスカートをはいった時にそう感じたから。言うておくが、学院時代のちよっとした馬鹿騒ぎの余興でやっただけで、女装趣味ではない。ともかく、服装には不安は無くなった。

ミシエルはおもちゃやら露店の品物に気を取られず、僕に懸命についてくるので、迷子になる心配だけは無さそうだけど、行動自体はまだ心配な所がある。あまり言葉も発しないが、どれくらいの教養があるかも不明なままだ。

どうせFランクハンタークエストなんてコミュニケーションが取れれば、ミシエルぐらいの子供にだって難なくこなせる筈だから、その辺りが結局重要になってくる。などと考えていると、東ギルドにも程近い診療所に到着する。

「今日はどうなさいましたか？」

診療所らしく5人位座れそうな待ち合い用の長椅子が一脚置いてあるだけで、小奇麗にされていて調度品と時計にどうしても目が行く作りで、受け付けには若い男性が真っ直ぐに立っており、白衣を羽織ったこれといった特徴も無い、清潔感を全身から放っているようだった。

「手を痛めてしまったので、診て貰えますか？」

「では、奥の診察室へどうぞ」

診察室へ入ると、誰もおらず受け付けの男が入ってきて

「では、座って。腕を見せて下さい」

言いながら丸椅子に座る。医者と受付が同一人物ときたか、世の中色んな人がいるものだ。右腕を差し出して、どうして痛めたかの説明を要求された。僕は早く治したいという想いが先行しているので、正直に椅子から落ちて挟んだと話す。医師にちらりと顔を見られ、それが今更に恥ずかしさを誘う。

しばらく、手を捻ったり押ししたりして、痛み状態を聞かれてとを続けていたが、終始ミシェルは僕のローブを掴み続けていた。医師が怖かったからか、僕を心配してくれての行動かは不明だけど。

大丈夫。と笑顔で言っても、そのままだった。

「捻挫です。湿布を貼って安静にしておいてください。明日、明後日になったら腫れるかもしれません、その時は温めるように心がけてください」

「はい、わかりました。湿布もお願いします」

やっぱり、診察してもらって良かったと思う。確かな診断もそうだが、アドバイスもありがたく思える。ほんの数分診て貰っただけでも5000円と高い出費ではあるが。

その場で診察料と湿布代を払う。処方薬というのはその場で調剤して貰うか、薬局で買うかだ。今回は湿布なので持って来て貰えばそれで済む。手間をわざわざ増やす必要はないし、薬局に入ったらこの医師が出てきたら、それこそ笑い転げてしまいかねない。いやむしろ、尊敬してしまうかも。

さて、次は何をするんだっけ？

「忘れてた！」

つい口を突いて出てくる言葉。それもそうだ、明日からどうするか決めてすらいらない。西の空はまだ明るく、太陽もしっかり見えるけど、影はしっかりと伸びており、ずんぶん長くなってきていた。ここから西ギルド周辺まで行って、部屋を探すのはほぼ不可能。なぜなら、ミシエルを連れた状態では片道1時間以上掛かるのが目に見えているから。日が落ちる頃から親身に部屋を紹介してくれる場所があるとは到底思えない。

消去法でいけば、馬を探すことになる。厩舎自体はリザリアには多いため、いくつか見たことはあるが貸し出せる馬がいるかどうかは別問題。けれども、こちらの方がよほど確率が高いと思われる。

食べ物を入れると鳴るお腹を制して、覚えのある厩舎へと急ぐのであった。

第三日 トロな休日〜昼間〜（後書き）

表・硬貨値段

<金貨>

大サイズの金貨 〓 5000 oren
中サイズの金貨 〓 2000 oren
小サイズの金貨 〓 1000 oren

<銀貨>

大サイズの銀貨 〓 200 oren
中サイズの銀貨 〓 100 oren
小サイズの銀貨 〓 50 oren
穴あきの一番小さい銀貨 〓 20 oren

<銅貨>

大サイズの銅貨 〓 100 oren
中サイズの銅貨 〓 50 oren
穴あきの小サイズの銅貨 〓 10 oren
ベル型の小さい銅貨 〓 0.1 oren

第三日 トロな休日夕夜

場所に覚えのある厩舎の一つに急ぐと向き直ると、十歩と離れたところにてレーデがこちらを目指して歩いてた。

「よお、制服のまんまで、何やってるんだ？」

「これはミシエルが迷子にならないよう、目印だよ」

「ミシエルって名前になったのか？って、女の子だったんだな、間違えたぞ」

それはそうだろう、僕の中にはもうカラスだった時のことの方が嘘に感じてしまう。それほどの変化が目の前にある。

「やあ、ミシエル、覚えてるか？昨日ギルドにいたお兄さんだ」

「んー？知らない」

覚えてないらしい。というか、ついにミシエルで反応し上に、クロウを主張しなかった事に僕の苦勞が少しでも報われた気がする。だけど、僕が呼んだことに対する反応じゃないって事が、なんだか納得いかないというか、悔しいというか。残念でならない。

「そっか、そいつは仕方ない。・・・お兄さんはレーデっていうんだ、よろしく」

言いながら腰を落として、笑顔でミシエルの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。撫でられるのが好きなのか、ミシエルも笑顔になって。

「おう、よろしく！」

おう、は無いだろう。・・・ってこんな事をしている場合じゃなかった。

「ごめんレーデ、今急いでるんだ。馬を借りないと！」

「馬で通うことにしたのか？」

「いやあ、まあ・・・うん、まあ・・・そう」

「お前、忘れてただろ・・・」

「ごめん」

「まあいいか、早く行ってこい・・・またな？ミシエル」

「またなー」

「ほら、急げ！」

僕の背中を叩くように押してそう言ったレーデは、僕達が見えなくなるまで見送ってくれていた。

そして厩舎に着いたものの、人の姿が見えない。

「ヒイヒイーン！」

脚を上げ、蹄で地面を叩き鳴らして完全な警戒モードの馬たち。といても、馬房から出ることは出来ないからこちらは安全なのだが、歓迎はされてない事だけは伝わってきた。ミシエルも怯えて僕の後ろにくっ付いている。

「誰かいませんかー！」

返事はかえってこない。

安全は安全なのだからと、僕は勇気を出して中へ入っていく。するとどうしたことだろうか、馬の腳踏み音はどこかへ消え去り、心なしか、近くにいた馬ほど馬房の奥へと距離を取ろうとしている気がした。馬は基本的に臆病な性格と聞いたことがある。もっとも、ここまで警戒されたりしたのは初めてだった。

「誰かいませんかー！」

同じ台詞で呼びかけると

「へいへい、御用ですかい？」

出っ歯が特徴的な小柄な中年男が、空の馬房から姿を現す。

「良かった、馬を一頭借りたいんですが」

「えーえー、よろしいですとも・・・で、馬を借りたことは？」

「借りたことはないんですが、飼ってはいました」

「ほーほー、どれくらい借りたいんですか？」

「予定は1週間で」

「はいはい、そしたらこっちへ・・・馬を選んでもらえますか？」

案内された先には、ずんぐりむっくりで脚も太い馬、背が高く脚の細長い馬、背が低く銅が長い馬と、大小様々な馬が並んでいる。馬

ばかりでなく、ラマ、ロバ、牛、羊までいる。

この中から選ぶとしても、街中を走るだけなので、特別スピードは要求しない。荷を大量に乗せるわけでもない。騎乗用動物ならどれでもいいくらいだ。とりあえず、一頭ずつ見るために厩舎内を巡る。すると先程まで僕にくっ付いていたミシエルがとある馬房の前で、跳んだりしゃがんだりして中を見ているではないか。戻って見ると、その馬房には早く走るために改良された馬種、サラブレッドがこちらを見つめている。その馬は白い毛並みに茶色の斑点模様をしている。

ミシエルはおもむろに近付くと、馬房に渡された木枠をバシバシと叩き始める。気に入ったのだろうか、それとも挑発してるのか。白い茶斑点のサラブレッドがそれに反応して、嘶きながら両前足を高く々と上げる。まるで二足歩行でもしようと立ち上がったみたいだった。危険を感じた僕は咄嗟に、両腕ですくう様にミシエルを抱え上げた。

サラブレッドが落下するように前脚を下げ元の姿勢に戻ると、ゆっくりと頭を下げこちらに近付ける。その頭をミシエルが両手で撫で回す。馬流のお辞儀の仕方だろうか。

「おやおや、お客さんこいつに好かれるとは珍しいですな」

「今のつて好かれたって事なんですか？」

「えーえー、いつも客を乗せるどころか、触らせようともしないんでね」

そんな馬貸し出そうとするなという突っ込みは、この際置いておこう。

ミシエルが撫で回している間、馬は動かずに撫で回されている。中年男の話が仮に嘘だとしても、気が合っているのは確かかなようだった。

「じゃあ、この馬を借ります」

「はいはい、それじゃあ保証金4000orenを含めて、こんなところですか」

どこから出したのか算盤を弾いて、見せてくる。算盤の見方は分かるがどうも疎い。やっとの思いでいくら提示してきたかを理解する。「高っ！」

中年男が提示してきた額は9820renだ、いくら保証金を含んでるとは言え、これなら一頭買った方が安い。どう考えても、足元を見るポツタクリ価格だった。

「おやおや、冗談ですよ旦那、本気にしないでください」

冗談には全く感じられないが、さも当たり前のように流して、算盤をしまう。

「ではでは、2000renぽつきりでお貸ししましょう・・・なんと、今なら貸し出し期間分の飼葉もお付けしますぞ！」

「あー、この街に住んでるんで、分かりますけど・・・500renで十分ですよね？」

男はジトツとした眼つきに早変わりすると

「へいへい、そんじゃあ500renで・・・」

そう中年男のやり口は典型的だった。まず保証金と法外な貸出し代金を合わせた額を提示して、次から保証金を抜いた額で話をする。

それも貸出し代金は半額以下で、飼葉も付ける。これで相手が話を飲めば万々歳。飼葉も譲渡はするが運ばないので、更に運び賃が必要になる。飼葉なんて実際、厩舎では必ず売られている、それもとても安価で、何日分もの飼葉ともなれば相当な量となるので、運搬費としていくらポツタくられるか知れない。

「あと、1000ren足すんで飼葉を定期的に家に送って下さい。

場所は・・・」

結構近いし、割高かも知れないが、手間賃と考えれば痛くは無い。

「はいはい、わかりましたとも、商売上手ですなあ旦那」

とはいえ、ミシエルを預かることになってからこちら、働いて貯めた給料の他、貯蓄を一気に散財している。当面、次の給料までは十分持つものの、銀行にはあまり預けておらず、何か入用になった時には危ないだろう。気は進まないけど、金銭面で両親を頼ることを

覚悟しておく必要があるそうだ。

馬をつれて帰路につく頃には、太陽はすっかり姿を隠しながらも、西空を赤く照らしその存在をしつかり主張していた。僕は手綱を引き、ミシエルは嬉しそうに馬の首筋にしがみついている。

「ミシエル、馬に乗るのは楽しい？」

「うん！楽しい・・・ミシエルはクローウ！」

直されてしまった。ミシエルと呼んでも、もう大丈夫そうだ。

「馬の名前も考えないとね」

「名前？」

「そうそう、こいつの名前」

「パカパカ！」

「そ、そう。いい音・・・いや、名前だね・・・よし、今日からお前はパカパカだ」

まあいいか、結局馬を借りることは出来たし、今日の買い物のお首尾は上々だろう。

明日からの事だけど、よくよく考えればミシエルを一人残して置くことは出来ない。ギルドに連れて行くしかないんだ。今更そんな事に気付くなんて考えの足らなさを痛感する。

ギルドに連れて行った後の事に、今から気を揉んでも仕方がない。西ギルドの職員がいい人たちであることを願うしかない。

ミシエルとパカパカを庭に残し、そそくさとキッチンに向かう。お腹を満たすために調理をする、調理といっても肉や野菜を適当に刻んで炒めただけの物と、固形調味料をお湯で溶かしたコンソメスープだ。料理を食卓に運び、ミシエルを呼んで来る。

「ミシエルのパン二つと、こっちの炒め物とスープを交換しないか？」

足の着かない椅子に大人しく座って、じっと肉野菜炒めとコンソメ

スープを見つめていたので、そう切り出した。

「うん、取引する」

「頂きます」

「いただきます」

最初からそのつもりだったのだけど、やはりキャロットパイを直接口に放り込む気になれなくて、潰れたキャロットパイをコンソメスープに浸す。スープにパンを浮かべる事が想像の外と言わんばかりにミシエルは不思議そうな顔をする。

「こうして食べるのも有りかなって思ってたね、より美味しく食べるために考えて、工夫したりするんだ。まあ、よく失敗するんだけど・・・うん、美味しくなった」

中身をよく混ぜて口にすれば、甘さはスープに溶け出し、さながらキャロットスープに大変身、パンのしつとり感が口に残るのも悪くは無い。具には煮立てたような甘さはあるが、僕の中ではパンとして食べるよりは遥かに高評価となった。

「ん、うまい！」

真似をするミシエルの評価も良かったようだ。炒め物の評価は無かったものの、残さず食べたので良しとしよう。結局、キャロットパイは当日中に食べ切ってしまった事になる。満腹のお腹を撫でるミシエルを残し、後片付けだけ済ませてしまふ。

ミシエルの部屋には、僕の部屋の向かいのゲストルームをそのまま使うことにした。寝具やクローゼットがあるからだけど、埃が結構積もっていたので、大掃除をする羽目になった。それでも二人で掃除したら予想よりも早く終わった。

埃を被った服を洗濯に、そして、額に流れる汗もそのままにぬるく温まった風呂に一緒に入る。昨日はペットを洗うみたいにミシエルを洗ったけど、今日は手本を見せながら、ミシエル自身の手で身体を洗わせて、それを手伝った。終わり掛けには素早く洗えるようになっていた。ついでに歯の磨き方を手を取って教えた。

買ったばかりのパジャマを着させて、居間でくつろぐ。ミシエルは居間にある小窓に乗り出してパカパカを眺めている。パカパカは脚を折り、身を伏せて眠っている。

思い返すと、ミシエルの事を考える暇が今まで無かったと、一先ず、現状を整理しておこうと思う。

ミシエルと出会ったのは一昨日、デュライという若いソルバーを中央ギルドへ案内する途中、デュライのクエストアイテムの入ったと思っていた空袋を盗んだ後、彼に取り押さえられた。因みにその時抑えられて出来た痕は殆ど治っている。

そして、中央ギルドで僕が質問をすることになった。その時の内容からすると、物品をお金に換えてくれる取引相手がいたこと。取引相手とミシエルの関係は直接関係が有るようだったけど、他の者も相互関係は不明なまま。ミシエルにとって、生きるための行動が盗むという行為だったのだろう。取引相手にお金を貰っていたと言うことはミシエルは何かを買っていたと考えられる。少なくともお金の使い方はわかるだろう。というか、今まで独りで生きてきたんだから、僕なんかよりミシエルの方がよっぽど詳しいんじゃないだろうか。

結局ミシエルの身柄は、軍に引き渡す事を拒んだ僕が依頼主となつて、ミシエルをソルバーとして雇うという構図で、僕がミシエルを預かることになった。もつとも僕が出任せに言っているだけで、ギルドを通した仕事ではないので、ソルバーではないけど。

これだけ考えると、僕が心配性なだけで、ミシエルをすぐフランクハンターにして放っておいてもいいのかも知れない。けれども、乗りかかった船という言葉もあるし、何より、このままミシエルの事を投げてしまうのはあまりに無責任というものだろう。

経緯としては、ギルド職員である僕が心配症とでもいうのか病気を起こし、浮浪少女を引き取ったって事かな。

推測ばかりだけど、ミシエルの生活面での現状は、まず物覚えは良さそうだという事。性格は控えめで大人しいと思う。言葉については浮浪児が持つような弊害があるのではなくて、無口なだけかも知れない。蜂蜜のような金髪に、^{やっ}竄れてはいるけど特徴の少ない顔立ち、特徴が少ないってことはその分整っているって事、だからきっと美人になるだろう。

そんな事を考えていると、窓の外に見えていた灯りは随分と減ってきており、床ではミシエルがゴロゴロと転がっていた。

「ぐろぐろ」

「あつこら！パジャマが汚れるじゃないか・・・もう寝ようか」

「お」

覇気は無く、眠気しか帯びていない返答を聞くと、手を引いてミシエルの部屋へと連れて行く。ベッドに寝かせ、毛布を掛ける。

「僕は向かいの部屋で寝るから、何かあつたら来るんだよ？」

「お」

もう夢の世界へ身体を半分以上突っ込んでいるようだ。何かあったらと言っても、トイレには一人で行けるし、もう眠りそうなので心配は要らない。そんな訳で、僕も自分の部屋へ戻ってベッドに潜り込むとそのまま意識を失った。

第四日 キイな仕事と事件

朝の日差しを浴びる前に起きたのはいつ振りだろう、窓の外では太陽が顔を出そうとしている所だった。それでも太陽との競争に勝った優越感には浸れず、ぼんやりとしていた。悪夢を見て目が覚めたのだったけど、どんな夢だったかは忘れてしまった。レーデとデユライが出てきた気がする。頭を振るうが、視覚だけは覚醒するものの、頭の中はずっともやもやしたまま、ついついぼうつとしてしまう。

寝癖もそのままに、ミシエルの部屋を覗けば、毛布がベッドの下に落ち、ミシエルは三日月を形取って横になっていた。毛布を拾いふんわり掛けて、そっと部屋を後にした。

パカパカはといえば、いつの間にか運び込まれていた飼葉を美味そうに食べていた。干草と果物だろうか。隣にはワイン貯蔵などに使う小さな木樽が置いてあり、開いた蓋からは水が入っているの見える。気を利かせたサービスだろうか。

いつもより早めに家を出る必要があるので、このままぼんやりとしていたら時間が無くなってしまう。身支度だけ整えると、そそくさとパン屋を目指す。これが僕の日常だ。

この時間は焼きたてパンの数が違う。食パン、硬パン、バターロールはもちろん、カレーパン、クロワッサン、ベーグル、デニッシュ、パイナップル。うん、食欲をそそるいい香りだ。

「おや、おはよう、ミシエルちゃんはどうしたんだい？」

「まだぐっすり眠ってますよ」

「そうかい。これから、西ギルドまで通いかい？」

「ええ、馬を借りたのでそれほど急がないですけど」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを取ってオバサンに渡す。

「大変だねえ、ま、頑張んな！」

「はい！」

「ところで、キャロットパイはどうだった？」

「僕はちよつと……。ミシエルは美味しそうに食べてたんですけど」

「こんな所でおべっかを使っても仕方が無い。

「甘すぎたし、そうだろうねえ。残して捨てるのも勿体無かったし、ミシエルちゃんが美味そうだったって言うんなら良かったさ」

「……。オイ。と心の中で突っ込みを入れて、紙袋を受け取る。

「今度はミシエルちゃんを連れてきなよ？」

「はい」

家の戸を開ければ、すぐさま僕を見つけたミシエルが走って、突っ込んでくる。

「ぐはっ」

腹部に大突撃である。

「どうしたんだ、ミシエル」

「どこ行ってた！」

「朝御飯を買ってきただけだよ」

ミシエルは、うゝゝと唸って頭を僕のお腹に押し付ける。結構痛い。

「心配してくれたんだね、ありがとうミシエル」

そう言って、頭を優しく撫でる。まだ唸って頭をめり込ませているが、弱くなった気がする。

「昨日のパン屋さんのパンだよ、キャロットパイじゃないけどね」

そう言って紙袋を見せる。ミシエルはそれを見上げる。紙袋越しにパンの香りが流れ出す。

「ん、許す」

今日はコーナム産とルーナタウン産のブローケンオレンジペコを

7：3でブレンドティーを作る。凝っていると言われるが、僕が気に入っている種類の物を4つ揃えて、等級も1、2種類しか置いていない。実家に置いてある茶葉はもつと産地、種類と等級が多い。もつともそれは、客人の好みの合わせられる様になってだけで、普段使う茶葉は大体同じだ。沸かしたお湯と茶葉を淹茶ポットに入れ、そのポットを鍋の湯につける。これが僕の紅茶の淹れ方なのだから、変だと言われようが仕方ない。

一つはそのまま。もう一つは砂糖を多く入れ溶かし、湯煎ならぬ水煎で少し冷やし、ぬるくして。

「さあ食べよう。この中から2つ選んで」

紙袋を開け、パンを並べる。

「ん~~~~~」

それぞれ見比べているが、決めかねているようだ。考えにくい事だけど、もしミシエルがパンを食べたことが無かつたとしたら、判断材料はキャロットパイしかないわけだ。選ぶっていうのは、過去の経験や体験から選んだ未来を連想し、予想することに他ならない。もちろん、例外もあるけど。そう考えたなら、判断材料の多さは選択を容易にし、判断材料の少なさは選択を困難にしてしまう。

「じゃあ、4個とも半分こにするか？」

「おー、半分こ〜。半分こする〜」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを包丁で半分にする。クロワッサンは断面が完全に潰れている、ベーグルとソーセージパンもそこそこに潰れた。ちょっと残念だけど、仕方ない。

「いただきます」

「頂きます」

ミシエルの評価によると、第一位はアップルパイ、第二位はソーセージパン、第三位はクロワッサン、第四位は砂糖蜜掛けのベーグル、第五位は紅茶だそう。パンは全部うまい！と言いなながら食べていたけど、紅茶に関しては、ジュースの方が美味しかったらしい

事、それだけを仰いました。味覚が違うのは当然だけど、このままだと僕は味覚に対する自信を失いそうですよ、ミシエル先生。

「リキット、今日のクエストは？」

「えー、今日のクエストは、なんと……！」

何も考えてません。

「西ギルドに行つて……」

「行つて？」

「……大人しくしている事！」

「？」

「じゃなくて、やっぱ、向こうに着いてから、掃除をするとか、色々決めよう」

「わかった！」

「さあ、着替えて」

「おー！」

ミシエルの着替えを手伝わず、自分で全部やらせる。時々、このボタンはこつちとか言うだけだ。それでも、順調に着替え終えた。ドレスや正装のような特別な着方のあるものでなければ、すぐに憶えてしまうだろう。今日の服装は、白のカッターシャツと、黒を基調としたゴシックパンツでひらひらの装飾が多い。ミシエルの一番のお気に入りだった。

ボサボサ髪では勿体無いと思ったので、今日からミシエルの髪を梳く事にした。ボサボサ髪と言つてもショートなので、手間はそれほど無かった。

「おっと、遅刻しちゃうかも。行こう！いつてきます」

「いつてきまーす」

ミシエルは相変わらずパカパカの首にしがみ付いているが、今はその方が助かる。とはいえ、遅刻するかもと言つても、サラブレッドに街中を全速力で走らせたりはしない。駆け足で程度で十分だ。それでもかなり早く、20分と掛からずに到着するかもと思うほど

だ。

「いいぞ、パカパカ！」

「パカパカはいいぞ〜！」

大通りを走るのは初めてで、これほど速度感があるものかと少し驚いている。実際、街中と野外では全く、感覚が違う。全速力で走ったらきつとスリルがあるだろうなんて考えていると、すぐに西ギルドに着いてしまう。

とりあえず、パカパカを近くの厩舎に預けてくる。

「おはようございます、東ギルドから来たリキットです」

「やあ、話は聞いてるよ。俺はネスト。あつちは・・・」

大工ですと言わんばかりの、肉付きと日焼けをした大柄の、若くも老いてもいない男はそう言って、奥を指差そうとする。

「おはようございます、私はマルガレットです！マルガって呼んでください！リキットさん！」

奥から指差される前に、眼鏡をかけた女の子があつという間に僕の目の前までやってくる。

「は、はい」

「ところで、こちらのお嬢ちゃんは何者さんですか！」

目をキラキラ輝かせながら聞いてくるマルガ。

「いえ、事情があって預かってる子で、ミシエルって言います」

「ミシエル＝クロウ！」

「そっか、ミシエルちゃんね〜よろしくね〜」

そう言って、ミシエルの手を握るマルガの表情は恍惚としており、今にも口の端から涎を出しそうな勢いだ。

「マルガはお喋りで、しかも色んな話に首を突っ込むのが好物なんだ。お前さんも運が悪かったと諦めてくれ」

そうネストが耳打ちしてきた。

「まあ、短い付き合いかもしれないが、よろしくな」

「はい。よろしくお願ひします」

「よろしくー」

「そんなあ、短いだなんて言わないで下さい。寂しいです。クスン・
……と〜ころ〜で……」

そうして、数時間に及ぶマルガの質問責めが始まった。その責め
苦は、ミシエルがお前めんどい！と言っまで続くのであった。

ミシエルはマルガを無視しながらも、懸命に掃除をした。その結
果、西ギルドの中は光り輝きそうなほど綺麗になった。逆に、昼食
のメニューにミートスパゲティを食べた時の汚れも手伝って、ミシ
エルの服は一日でずいぶん汚れてしまった。

良くやったと撫でて、ご褒美を考えてみたのだけど、これといっ
ていいアイデアも思い浮かばなかった。

別に浮かんだアイデアの中に一緒に料理を作るといいう生産的なも
のがあって、今日はそれを実行することを決めた。

帰り道、パカパカに乗って早足で進む。途中で、芋、人参、玉葱、
豚肉、カレー粉を買って。そう、今日はミシエルと一緒にカレーを
作るつもりだ。カレーは元々、サリツサ地方に伝わる伝統料理に使
う、何種もの香辛料の粉末を混ぜ合わせた、粉の事をいう。その粉
を使った料理は痺れるような辛さと、鼻と食欲を刺激する香りが特
徴的だ。しかし、サリツサ地方の人間でない僕たちの言うカレーと
は、サリツサカレーをベースにまるやかに仕上げ、旨みを増やした
カレー粉を大量の水で溶かし煮込んだソースの事をいう。サリツサ
カレーを使った赤いソースを本格派カレーというのに対し、今日作
ろうとしている黄色のソースは中央風カレーという。

もうすぐ家に着くという所で、レーデが東ギルドに入っていくの
が見えた。僕も東ギルドの様子が気になっていたので、馬を停め、
後を追うことにした。

「ミシエル、ギルドの様子を見てくるから、パカパカと一緒に待っ
てて」

「わかった、待ってる」

待っていると言いつつも、首に巻きついているわけだけど。

ドアベルが鳴ると、中にいた修理に来ていた男2人女1人そしてレーデは全員こちらを注視していたが、相手が僕だと分かるとレーデが僕に近付きながら言う。

「お前、どうしてここに？」

「レーデが入ってくるのが見えたから、僕もギルドの、キューブの調子がどうなってるのか気になって」

「・・・そうか。キューブはまだまだ、だそうだ。まあ一日目だしな・・・ギルドの方は、見ての通り、全てのキューブを切って開いてもないさ。職員も居ないしな」

ギルド内を見回すとその通り、キューブは全て明かりを失っていた。

「ところで、西ギルドはどうだった？」

「うん、仕事は暇なんだけど、職員の人達が個性的でね。そっちこそ、中央ギルドはどうだったのさ？」

「ああ、中央も暇さ」

「やっぱりそつか。中央の人達はどんな人だった？」

「まあ、良い人達だよ」

「・・・そうだ、ミシエルと一緒にカレーを作るつもりなんだけど、今日時間ある？」

「カレーか、いいね。もちろん。食べさせてもらえるんだろ？」

「うん！じゃあ、行こう」

「ああ・・・それじゃあ、後はお願いしますよ」

「修理、頑張ってください！」

修理職員の女性が代表して応えた。

「任せてください！美味しいカレー、楽しんできてください」

ギルドを出てパカパカとミシエルの待っている方へ、歩き出す。

すると、夕日を反射した何かがキラキラと光って、上から落ちてき

て、僕の首元で止まる。

「動くな」

本で読むようなお決まりな台詞を聞いても、僕の首の前で止まっているのが剣だと認識するのにはばらくかかった。

その声には聞き覚えがあり、すぐに赤い髪の少年を思い浮かべる。横目で確認すれば、赤い髪と黒い衣装をしている事だけがわかった。

「・・・デュライ?」

「隣のお前、逃げるなよ?」

「デュライ、一体何をしてるのさ?」

完全に理解不能だった僕は、質問を投げかけるしかなかった。デュライは剣を僕の首前に置いたまま、押して、剣の刃の付け根を僕に、刃の先をレーデの首元に流れるように付ける。すると、デュライがちょうど僕の目の前に立つ形になる。

「そっちのお前・・・」

「リキット!」

ミシエルの声だ。デュライの影越しにミシエルが全力疾走で駆けってくる。そして、そのままデュライ目掛けて飛び込む。

「・・・チツ」

舌打ちをしながら、僕の真隣へと半回転しながら、するりと剣を引き構えるデュライ。

飛び掛ったミシエルと、僕の間には白い3本の痕線が奔る。

着地したミシエルの右腕には見たことの無い、動物の爪の形をなした武器がはめられていた。それは爪クワと言われる武器だろう。黄と茶色の手袋の甲側から伸びた3本の白い凶器が、動物の爪のように内側に曲がっている。クローは相手の四肢を引き裂く武器だ。

睨み合うミシエルとデュライ。

「その武器・・・あの時のガキか?」

「リキットから離れる!」

「どんな魔法使って出してるか知らないが、それじゃ俺には勝てねえよ」

「・・・リキットから離れる！」

二度言つて、飛び掛るミシエル。だがデュライは、簡単に爪の間に剣を下向きに差し入れると、そのまま払うように剣を押し込む。地に足が着くや否やミシエルは後方に押しやられる。

「大人しくしてろガキ！」

剣を引き少し間を空けると、力任せに振り上げる。その軌道上にミシエルの武器と頭がある。剣先はまたしても爪の間を捉えて、ミシエルの爪は右手ごと宙に投げ出される。デュライは身体を左回転させて剣を一周させる。

「危ないミシエル！」

僕の叫びは届いたのか、弾き飛ばされた右手と爪を外向きに身体の左側へ置く、左手を爪の真っ直ぐに伸びた部分に添えて、間も無く、下から上へスライドしながら回転するデュライの剣が容赦なく飛んでくる。爪と剣が交差して、ミシエルは剣に掬い上げられるように拾われて、そのままギルドの壁へ叩きつけられる。

「ぐぁー！」

ドツツつと鈍い音を立てた後、壁に叩きつけられたミシエルが、壁に弾かれて落ちていく、ミシエルが、倒れる。

「ミシエル！」

すぐに駆け寄り膝を突いて抱き寄せる。

「ミシエル！大丈夫か！」

「う？・・・だい・・・じょーぶ」

僕はミシエルを覆い抱きしめる。

「さあ、待たせたな？」

レーデの方を向き直るデュライ。もう、何が何だか分からない。ミシエルを一刻も早く医者に見せたいが、レーデを見捨てていくような事はできない。

「・・・許してくれ」

僕には、そのレーデの言葉の意味が全く分からなかった。

「知っている事を吐いてもらおうか」

「ああ、わかった。……初めは偶然だったんだ。……ついつつかりソルバーの事を話してしまつて、それを聴いていた奴が俺に話を持ちかけてきた。ソルバーの情報を売れと。……どうしても金が必要だったんだ」

レーデの言っているのは多分、失敗報酬0%の薬素材クエストのソルバーの事だとすぐにわかった。ミシエルがデュライのクエストアイテムを狙った事、デュライを狙うように誰かからの情報を得てしていた事、レーデがデュライの情報をその誰かに流したとすれば、全ての流れが合致する。

それは失敗報酬の無いクエストがソルバー、依頼人も互いを知らずに進行するクエストで、その最たる例がアイテム収拾という事に尽きる。この場合においては、ソルバーの情報は一切外部に出される事がない。これはソルバー保護という要素が強い。今回においてはデュライがそのクエストを受けたことは、僕とレーデしか知らないことになる。

ちなみにその逆、失敗報酬の有るクエストは内容によって、顔合わせというものが出来る、クエストを引き受けるソルバー、依頼人が互いを雇われ、雇う事をクエスト前に確認できる制度だ。もっとも相当慎重な人間しかこの制度を使つたりしない。

「フン、お前の事情なんてどうでもいい……俺が知りたいのは、その情報を買つてる奴の事と、その居場所だ」

デュライが剣を向け、正直に話すレーデに詰め寄る。

「……奴は依頼人じゃないが、居場所なら知っている」

「じゃあ、案内してもらおうか？」

「ああ」

「……すまない、リキット……こんな事に巻き込んで」

「……レーデ」

「早くミシエルを医者の方まで運んでやってくれ……」

「……うん」

レーデはゆっくりと歩き出した。デュライは剣を鞘に収め、何事

も無かったかのようにレーデの後ろを追う。

「ミシエル！すぐに医者に診せてやるからな！」

「えー、医者ヤダ！」

言つと、すくつと立ち上がるミシエル。・・・えーと・・・全然・

・元氣に見える。

「大丈夫なのか、ミシエル？」

「うん！大丈夫」

壁に叩き付けられたのになんで？と困惑している僕の頭の中に声が響き始める。

(リキットとやら、ミシエルを心配してくれるのは有り難いのだが、この子は大丈夫だ。問題無い)

「えっ？」

その低い声ははつきりと響いて聞こえるのだけど、周りを見回しても、離れた所に一連の騒動により出来たと思われる人だけが残っているだけで、その声とは距離感が全く違った。

(僕はここだ、ミシエルの右手・・・この武器に宿る精霊だ)

「・・・せいれい、と言いますと、あの精霊ですか！」

精霊というのは魔法の基礎となる能力を持つ存在の事で、普通には見ることが出来ない。魔法は精霊との契約によって体内外のマナを使用することで発動する能力というのが魔法の通説で、精霊無しに魔法を使う事は出来ないとされている。

因みに、魔科学と魔法はマナを使う事以外は、全く別の分野で共通点が無い。なので、魔法や精霊ついて詳しい事は僕は全く知らない。

(喋らずとも良い。お主とは通じた故、お主が伝えたいと思ってる事であれば、僕には伝わる。それに精霊云々と口にする事は、お主にとっても良い結果には成り得ぬ)

(・・・えつと・・・こ、こうでいいのかな？)

(うむ、宜しい。・・・申し遅れたのだが、故あって本来の名は教

えられぬ。今は器の名を借りてパンサークローと名乗っておる)

「そ、そうだ！ミシエルは無事なんですか！」

つい喋ってしまったけど、これって、周りの人から見たら、デュライに襲われた恐怖のあまり精神が錯乱しているように見えるんだろうな。

(詳しく話すには時と場が適切で無い故言及せぬが、ミシエルは無事だ。)

デュライに連れて行かれたレーデも多分無事だ、と思いたい。レーデが危険になるとしたら、レーデに対し用の無くなるデュライよりもむしろ、情報を売っていたという相手が逆上した時だろう。

そういえば、さつき精霊はパンサークローと名乗ったっけ。ミシエルがカラスだった時のストリートチルドレンのリーダーと同じ、パンサー。

(・・・聞いておるか?)

「え？」

(場所を変えぬか、と申しおる。・・・それに、ミシエルもカレーとやらを、一緒に作るのを楽しみにしておるのだ)

「おお、カレー！カレー！」

色々あって少し混乱気味だけど、レーデをこのまま放って置いていいのだろうか？レーデは確かに自分の非を認めて、デュライを案内した。ミシエルの身を案じてくれた親友の窮地を見過ごす事が出来るだろうか。ミシエルは無事である以上、その答えは簡単だ、そんなこと出来ない。

「ごめん、ミシエル。レーデが心配なんだ。カレーは後にして、後を追わせて欲しい」

「うん、わかった」

(それは良いのだが・・・後を、追えるのか?)

レーデとデュライが向かった方向には、もう彼らの姿を確認することは出来なくなっていた。すぐ角で曲がったとも、デュライが急かしたとも考えられる。いずれにしろ向かった先は、東ギルドより

西・・・ほぼりザリア全域だ。心当たりでもなければ探しようが無い。

「そつだ！・・・ミシエル、デュライが金目の物を持ってるって、教えてくれた人が何処に居るか知ってる？」

「ん、知ってる！」

「ほんと！そこに案内できる？」

「うん！」

（では僕はしばらく消えるでしょう）

聞こえるや否や、ミシエルの右手の爪武器パンサークローは見えなくなる。ミシエルの右手の周辺を慎重に探るが、何かに触れることはなく、本当に消えてしまっていた。

パカパカに乗り、ミシエルにの先導で向かった先は、昨日立ち寄った診療所だった。

第四日 キイな仕事と解決

街全体が赤く染まり、診療所もオレンジの炎で燃えているようだったけど、火事になっていたりはずせずに、ただ夕日色に染まっていた。

診療所の外から見ると分には、レーデやデュライの姿も無く物静かで、日常の風景のようには見えなかったが、ここで無為に過ごしていても仕方が無いので中へ入る。

「すみません、もう休診の時間なんですけど・・・？」

昨日の医師兼受付の男性がそこにいた。何事も無いことはいい事なのだけど、何事も無さ過ぎて焦る。

「え、えっと。僕と同じギルド職員と、赤い髪の少年が来ませんでしたか？」

「さて？今日は特に来診が多かったが、昨日の君以来には見なかったと思うね」

「ミシエル・・・本当にここなのか？」

「うん、南の遺跡？から出て来た人なら稼ぎになる物持ってるって言うってた！」

「私が？そんな事言ったかな・・・まあ儀式跡地からは、確かに強力な麻酔薬や、興奮剤が作れる素材が手に入るから、医者なら重宝するかもね」

確か、ミシエルはデュライがお金になる物を持ってると教えられたんだっけ。ミシエルがデュライのクエストアイテムを狙っていたのは、ここでそういう話を聞いた事による行動だったのだとすると、レーデと謎の人物、謎の人物とミシエルという繋がりが消えてしまう。

「ところで、湿布が入用だったかな？急いでいるので診察は困るのだが・・・」

「あ、いえ。すみません。勘違いだったみたいです」

言って、そそくさと退散する。

（先程の話だが、何処かでその様な話を耳にしたので、薬剤の素材が高額で売れるやもと、儂がミシエルに進言したかと存じる）

パンサークローが姿を見せて、そう言う。

待てよ、つまりこれってもしかして、完全に見当違いだったんじゃないか？

レーデは一体何処に向かったんだろう？とりあえず、レーデとデュライの事を整理してみよう。

とはいっても、レーデがそんな不正をしていたなんて全く知らなかったし。レーデとはよく一緒に飲んだり、互いの家で遊んだりしてるけど、それ以外でしかも偶発的に知り合ったという相手に辿り着くなんて、はつきり言って不可能だ。

じゃあ、デュライの視点から考えてみよう。

まず、デュライが自分の情報を流してる人間がギルド職員だと至った理由は簡単だ。それ以外に無いから。じゃあ、僕とレーデがあの場に居合わせたのに、僕ではなくレーデだと確信した理由はなんだろう？レーデとデュライの間に、デュライの襲撃以前に、接点があったかどうかは僕には分からない。逆に、僕とデュライはキューブ修理の開始の日と一緒に行動したという接点がある。その時、ミシエルに質問したのは僕だったし、デュライに対して協力的だったから、僕を選択肢から除外したと考えるのが自然だろうか。

そういえば、ミシエルへの質問でデュライを狙っていたという回答を得た事で、デュライがその事に探りを入れた結果レーデが連れて行かれ危険に遭っているのだとしたら、完全に僕のせいじゃないか？

さっきの事で、ミシエルがデュライを狙っていた理由がほとんど偶然と判明した以上、レーデはミシエルの件では関与していないのだから、今レーデとデュライが向かってる先の相手は、デュライとは何も関係が無いかもしれないけど、デュライに襲われるかも知れ

ない。レーデもそれに巻き込まれるかも。何にせよ止めない！・・・でも一体何処へ行けば？

結局、思考は同じ所へ辿り着く。

こうなったら、とにかく探し回るしかない。ヒントはレーデの言った奴は依頼人じゃないという言葉。逆を言えば依頼人以外の全員が容疑者。はつきり言って果てしない作業になる事受けあいだ。もつとヒントを出してくれればと思う。でも、僕やミシエルが首を突っ込まないようにそうしたと取れなくも無い。歯痒さだけが残る。行き先を推測するのを止めて、物理的な考えで絞込む事にした。あの時、角を曲がって見えなくなつたという高い方の可能性に賭けて、リザリア東側の街をパカパカで己の字のように疾走する。何かがあれば人だかりが出来ると考えて、可能な限り広範囲を搜索する。

僕の借り家前を通る道で、見覚えのある人物がちょうど家の前に佇んでいる様が見えた。近寄って行けば、次第にはつきりとそれが探している人物である事がわかった。

「レーデ！」

「・・・リキット・・・ミシエルは？」

パカパカを降りる。ミシエルはずつと馬首に纏わり付いている

「うん、大丈夫みたい・・・レーデの方こそ」

「俺は大丈夫だ。ただ案内しただけだ」

「・・・その人は襲われなかったの？」

「ああ、彼の探していた人物ではなかったらしい」

「そっか、みんな無事で良かった」

「どこまで心配してるんだお前は」

「・・・巻き込んで、本当に悪かった」

「いいんだ・・・そんなことより、ミシエルがカレーを楽しみにしてるんだ。一緒に食べよう」

「・・・ああ、そうだな。ありがと」

僕の笑顔はレーデに少しでも安心を与えられただろうか。言葉は

不安を取り除けただろうか。わからない。

家灯りが道をぼうつと照らす中、ミシエルを呼べば、パカパカも彼女の後ろからついて来る。

お腹の空いた男2人であだこつだと、ミシエルにカレーの作り方を伝授する。具が僕とレーデの好みの違いでちくはぐな大きさになつたり、炒めるのか煮込むのかでミシエルを困惑させたり、カレー粉の量や隠し味なんかでも言い合つたけど、それが今日は特別楽しかった。

そうして出来上がったカレーは、間違いなく僕達の渾身の一品だったが、味見などしていなかった。だから、ミシエルがそれを口に運ぶ様を僕達は固唾を呑んで見守っていた。

「んー！カレーうまい」

その言葉を聞いた僕達は、笑みを交わし、拳を突き合わせた。

レーデは特に何も言わなかったし、僕も何も聞かなかった。いつでも会えるのだから、落ち着いた時にでも事情を話してくればそれでいいと思った。ただ、一つだけ約束をして欲しくて切り出した。

「レーデ、僕は頼り甲斐がないかもしれない。でも、頼ってきて欲しいんだ。・・・親友だと思ってるから」

「・・・ああ」

「一つ、一つだけ・・・私欲のために誰かを貶めるような事はしないって、約束して欲しい」

「・・・わかった、約束する。・・・お前と、ミシエルに誓おう」

レーデは真つ直ぐに僕を見ていた。そして、今後ソルバーの情報を売ったりしないと、ここに誓いを立てた。

朝早い家の灯りがぼつりぼつり消え始めた頃、レーデは大きく手を振って帰っていった。最後に見せた笑顔が、大丈夫だと伝えていたのだと僕は思った。このまま眠ってもいいくらいには夜が更けていけど、頭の中がもやもやしている。パンサーの話をお聴かない事に

は、納得がいかなかった。レーデを見送ってそんな風に考えていたのは、扉を閉めようとするまでだった。

家のドアを閉めようとしても、何かにぶつかって閉じ切らないのだ。

「よお？」

扉と玄関の間に足を挟んでいた人物が声を掛ける。

「・・・デュライ」

来た理由はおおよそ察していたが、このタイミングで現れるという事は、事前に僕の家を知っていたか、レーデが帰るのを待っていたかだ。事を荒立てるようなことをせずに、こうして底知れぬ恐怖を与えてくるけれど、ミシエルとデュライを会わせたくない僕にとってはここで誤解を解いて終わらせられるのは好都合だった。

「来た理由はわかってる。ミシエルが言ってた、君を狙ったって話でしょう？」

「俺は締め上げてやっても構わんが・・・ガキから直接聞くのは無理そうなんぞでな」

上位のハンターというのはこういう人種ばかりなのだろうか。だとしたら好きになれそうに無い。考えてみれば厄介事の種はみなデュライだった。それでも、これで終わりだと思えば、我慢も出来るというもの。

「あれは誤解だよ。・・・薬の素材が高値で取引出来ると聞いたミシエル・・・カラスが、儀式場跡から出て来た君を、君の持ち物を狙っただけ。・・・彼女はもう、盗みはしないし」

「・・・そうか」

少し残念そうに答える。

「ところでお前、浮浪児を愛玩する趣味でもあるのか？」

僕はデュライを強く睨み付けるが、彼は臆する事無く続ける。

「浮浪児ってのは、成り行きや不幸でそうなってるんじゃない・・・なるべくしてなってるんだ。浮浪者には浮浪者たる理由があるんだよ。・・・愛着なんて寄せてると足元掬われるぞ？」

「デュライ！！それ以上の侮辱は許さないぞ！」

「純然たる事実ってヤツだ・・・それに、侮辱とは何だ。お前も浮浪児だったのか、とてもそうは見えないが？」

そこへ異変に気付いたミシエルがやってくると、すぐにデュライを見つけて敵を見る目が変わり、右手にパンサークローが現れる。怒鳴ったのがまずかったか。

一方、デュライは玄関の外で壁を背にしたまま、ミシエルの様子を伺っているだけだった。

「よお、ガキ。また凝りずに負けてみるか？」

「何しに来た！」

「・・・言っておくが、お前の敗因は予測や戦術がどうのって事じゃない。もっと根本的な・・・力、速度、体格の差だ。・・・今のお前じゃ、俺の剣を防ぐことしか選択肢がない。・・・避ける事も、止めきる事も出来ない」

言って壁から距離を取る。剣を抜くのかと思いきやそのまま遠ざかっていくデュライ。

「せっかく面白い武器を持つてるんだ、余す事無く生かす事を考えるんだな・・・」

「どこへ行く！」

「・・・もう二度と会う事も無いだろ」

赤髪の少年は振り返ることも無くそう言った。僕たちは彼を見送るでなく、その姿が見えなくなるまで見ていた。彼の姿を照らしていた家の灯りが消えたのと、視界から彼の姿が消えたのは同じ瞬間だった。

(パンサークロー、話がある)

(宜しい)

(二人きりで話せない?)

(構わぬが、今日はミシエルの精神疲労も激しい。明日では叶わぬか?お主が魔力を供給すると言うならば別であるが)

精霊に魔力を供給するというのは分かる。ミシエルの精神疲労が関係しているというのはどういうことだろうか。そもそも、二人きりで話そうと思っただけで、ミシエルは関係ないと思っただけで、事情が違うのかもしれない。ともかく、話をしたかったので、魔力を供給すると承諾する。

しばらくするとミシエルがパンサークローを外して僕に渡してくれる。それを手にした途端、眩暈を覚え、吐き気を催す。余裕無くトイレへ駆け込む。

(なにこれ・・・気持ち悪い)

(僕に魔力を供給する事で、精神的な負荷が掛かっておる・・・魔力とは精神から捻出する物だ。魔力を供給する事は、即ち精神力を与えるも同じ)

(ミシエルはいつもこんな感じなの?)

(お主は精神力も薄弱であるが、他にも相性が悪いと存ずる・・・対話は出来ぬが僕の存在を消せば、精神力の消費を抑える事は可能)
(大丈夫、魔力ってマナの事ばかりだと思ってたけど、実際には違うんだね)

(マナとは魔気の総称、魔力とは人間や精霊の精神を媒介とした純度の高い魔気の事である。従って間違いでは無い)

(この会話をミシエルが話を聞くことは?)

(そうなの、お主からの念であれば伝わる事はない。僕の方からの問い掛けであれば、僕の念次第で一方だけ或いは、両方と話すことが出来る。無論、一定距離内である必要はあるが・・・一時、慎重)

(じゃあ、まず君の事を聞かせて欲しい)

(すまぬが、身の上は話せぬ、容赦願いたい。そうなの・・・)

身の上話以外、自分自身・・・パンサークローの特徴について話をしてくれた。仮名パンサークローは閻属性の精霊で、姿ではなく存在の有無を切り替える事が出来るのだと言う。存在を消している状態の方が安定でき魔力の供給をほとんど受けずに居られるらしい

が、念話などのあらゆる行為が出来なくなるとの事。

（ありがとう。・・・じゃあ、ミシエルとデュライが戦った時の詳しい話だけど）

（先程も言ったが、僕は存在の有無を自在に操れる。契約主の周囲であれば、瞬時の移動も可能。ただそれはミシエルの魔力消費が激しい故、それ以上に危険な時以外には行わない）

つまり、ミシエルが壁にぶつかる前に、ふさふさの手袋部分をクツションにしたということだろう。

（カラスと名付けたのは・・・？）

（僕の失敗である。ある時まるでカラスの様だと申した。それ以後カラスと名乗る様になってしまったのだ）

（じゃあ、パンサーもミシエルの本名は知らないってこと？）

（残念ながらその通りだ。従ってお主がミシエルという名を付けてくれた事には非常に感謝しておる）

気持ち悪さが先立ってあまり聞けなかったけど、ミシエルの精神力が強くなってきた事によって、具現化して戦闘や長い会話を出来るようになったのが割と最近らしいという事で、それ以前はここぞという時くらいしか具現化していなかったとの事を教えてくれた。つまり、ミシエルがコミュニケーションを取る姿勢が薄いのもおそらくその所為と考えられた。

（くっ・・・最後に、僕が君と通じたって事は仮契約をしたってとっていいのかな？）

（異なる。お主にも僕にも契約に至るほどの大した利点及び欠点は生まれぬ。ミシエルの事を通じてお主を信じ、会話を望んだという程度、通じたという言葉が合う。仮に、契約に至ったとしてお主は閻属性の精霊と相性が悪い故、僕は存分には使えぬよ）

（えっと、ミシエルの方が僕より子供なのに？・・・うつぶ）

（勘違いしないで貰いたい。心と精神力とは異なる。精神力は体力と似ておる、力の依存する部分が異なるが、心の持ち様で調子に差があるという共通点がある。・・・力の枯渇が死に至るというのも

共通点であろう)

(ぐうっ・・・もう限界だ)

(では戻るとしよう、この様な対話も偶には良いものだ)

手に持った爪型武器が消えていった。

それほど時間は経っていないはずなのに、僕は疲労困憊といって差し支えないほど、疲れてしまった。魔力を供給する事がこんなに大変なこととは思わなかった。

トイレで用を一つ済ませ扉を開けると、そこにはミシエルがいた。

「大丈夫か、リキット？」

「ちよつと疲れちゃったけど、大丈夫だよ」

「ん」

「僕はもう休むよ。・・・ミシエル、一人で着替えて寝られるね？」

「おう！」

弱っているのを隠すよう意識して、自分の部屋へと歩く。部屋に入ると足取りも覚束ず、そのままベッドに倒れこむ様に身を投げ出した。ベッドの柔らかい肌心地を感じ、意識が遠くなっていった。

第五日 紳士と淑女？

熱いものが胃を刺激して、まるで胃を自身が消化しようとしているように、息苦しい。そして極偶に、ズキズキと頭痛がする。パンサーに魔力を供給した影響か、体調が良いとは言えないけど、意識ははっきりしていて風邪のような病気とは違う。

眩しい太陽の光を見て、僕を心配してくれたのだろう、隣で眠っているミシエルの頬を一撫でする。

「・・・ん」

「・・・おはよう、ミシエル」

「ん~~~~、おはよー」

すつくと立ち上がった、ベッドの上から飛び降りる。ミシエルは今日も元気だ。ミシエルに負けるもんかと、勢い良く立ち上がった僕の腰がコキコキと軽やかな音を奏でる。少し年老いた気分になる。あつという間に着替えて来たミシエルに催促される様に見られながら、僕も着替え始める。今日のミシエルの服装は、茶と黒のスマートなワンピースと、白い丈の短いパンツを穿いている。きつとミシエルにとってスカートというのが感覚的に無いのだろう。僕としてもスカートを無理に着させようとは思わない。

「よし、行くぞ」

「パン！パン！」

嬉々として付いて来るミシエルを見ると、パンサークローの事を忘れてしまいそうだ。凶器に宿った精霊と、契約している子供。ただそういう言い方をしてしまうと、関わり合いに成りたくない思いが先立ってしまうのではないだろうか。少なくとも、今後ろから追って来る子供は放って置けないと思わせる、か弱い少女にしか見えない。

「ミシエルちゃん、いらっしやい」

「パン、うま、美味しかった!・・・です!」

そう言う様に先に教えておいたのだけど、想像以上の無理があったようだ。

「そうかい、今日は何にしようか?おばちゃん、サービスしちゃうよ」

「僕にはサービスしてくれないの?」

「そりゃ当たり前だろ?」

はははと笑い声が交じり合う。息をするほど焼き立てパンの香りが鼻をくすぐる。

「ミシエル、好きなもの4つ選んでいいぞ?」

「わかった!」

時間が掛かるかと思いきや直ぐに大きい物から順に4個選んだミシエルに、僕は一瞬言葉を失った。

「沢山食べたいのは分かるけど、今朝食べる分だけだぞ?・・・コレだったら、今日は1つだけになっちゃうぞ?」

「んつと、選び直す」

1つでも朝食だけではとても食べ切れないパンを指差して諭してやれば、ミシエルは残念そうに答えて、陳列されたパンの一つ一つを見比べている。それほど大きくも無いパン屋の客は多く、オバサンは忙しそうに對話をしながらお客さんを捌いていく。僕は手持ち無沙汰にミシエルに付き添っていた。

結局、朝食のメニューはメープルデニッシュ、たまごパン、パイパイ、アップルパイの4つだ。昨日買ったアップルパイがあるのは、僕にとつてのクロワッサンの位置付けなのだろうか、僕はどうしてもクロワッサンともう一点という買い方をしてしまうのだ。

パンを買うと何処から持ってきたのか、店主が飴玉をいくつかミシエルに分け与えた。店内にはまだパン屋のお客さん達が小さな列を作っていたので、紙袋を受け取った僕はそそくさと喫茶店へ向かう。

喫茶店の店内は相も変わらず、蝋燭の火がゆらゆらと揺れていて、特別ゆつくり時が進んでいる気にさせる。

「いらつしゃい」

「薄めの紅茶とお勧めのジュースを」

一昨日前と同じやり取りも、何故だか誇らしく感じる。

空いた席に座りながら、人も疎らな店内に、金色の鎧を申し訳程度に付けた、筋肉の塊の様にながしりした肉付きの大男と、白い軍服のような制服を着こなす、清潔で感じの良さそうな少年という、印象的な二人組みを見付けた。大男は短めの黒髪を後ろで縛って、こんがりと日に焼けた褐色の身体つきは筋骨隆々を体現しているが、顔は筋肉で固まっておらず柔らかい表情も出来そう。少年はさらさらと柔らかそうな巻き気味の短い金髪で、表情も柔らかい、筋肉の大男と一緒に居る為か華奢な体軀に見える。

間も無く、二人組みは席を立ち、店の出入り口へ向かう途中、僕と視線が合うと大男が徐にこちらへ向き直り、真っ直ぐ僕を指して歩いてくる。

「よおアンタ、この街のギルドの人か？」

ギルドの制服を着ているから声を掛けてきたらしい。

「はい、リザリア東ギルド職員です」

「ちょうど良かったぜ、さっき近くのギルドに休業の張り紙がしてあったんで、どうしようかと思ってた所なんだ」

「すみません、キューブの故障で他のギルドに回って頂くしか・・・」

「

「それだ、他のギルドの場所を知らないんだが？」

「そうですね・・・中央ギルドが近いんですが場所が複雑で、大通り沿いにある西ギルドへ向かうのをお勧めします」

「そうか、ありがとさん！」

明るく景気の良い野太い声で礼を言って出て行く大男に、こちらにぺこりとお辞儀をして、付いて行く少年。

「いまの誰？」

珍しく尋ねてくるミシエル。

「さあ？初対面だったからね。格好からして、多分ハンターじゃないかな」

「ふーん・・・」

自分から聞いてきた割に興味無さそうに伝えて、紙袋を広げ飲み物の到着を今か今かと待ちかねているミシエルに、マスターが口を開く事無くそれらを置いていく。今日のジュースは爽やかなオレンジの香るジュースだった。

「リキット、半分こして！」

パンを手で千切るもそうそう上手くはいかず、大小様々なパンの形態が出来上がる。大きい方をミシエルが更に千切って綺麗に半分にしよつとするが、当然包丁で切る様にはならない。形の残つてる方をミシエルに渡して、無残に散つたパンの欠片を頼張る。

「・・・いただきますは？」

少し尖つた口調には、母親のようだった。

「はい、頂きます」

「いただきます」

ミシエルと過ごしているとハツとさせられる事が時々ある。しつかりしなくちゃと思う裏で、僕が親になつたらこんな感じになるのだろうかと考えたりする。だとしたら、頼りない父親かな、なんてつて、10歳位しか違わないのだから兄妹が正しいのだけだ。

たまごパンを口にすると玉子の香りが広がり、ふんわりした食感がたまらない。噛めば噛むほど、しつこくない甘さと、しつかりとした焼きたてパンの風味が口一杯に広がる。ミシエルが居なければ買わなかっただろうたまごパンに、クロワッサンに変わる趣向の新発見をみた。しかし、ミシエルの評価は次の通りだった。

第一位アップルパイ、第二位メープルデニッシュ、第三位パイナップル、第四位たまごパン、第五位オレンジジュース。つくづく味覚は合いそうに無いけど、オレンジジュースより紅茶の方が良かったと言ってくれたのは嬉しかった。ただ、砂糖をもつと増やせば負け

ると直感した事は内緒にしようと思う。

パカパカの背に乗って出勤するのもまだ2度目なのに、随分前からそうしている気になるのは、昨日長い間、騎乗していたせいだろう。手慣れた仕草でパカパカを厩舎に置いてギルドへ向かう。

西ギルドの中にはネストとマルガが二人組みの冒険者風の男達と話をしていた。つい先程喫茶店で会った大男と少年だった。

「おはようございます!」

「おはよー」

ギルド職員の二人はこちらを一瞥して話を続けていたが、大男だけはこちらを振り返ると大きな声を立てた。

「アンタはさっきの!助かったぜ、兄ちゃん!」

「どうも」

一礼だけして奥のカウンターへと足を進めると、やはり目を輝かせてマルガが話の隙間を縫って話しかけてくる。

「お知り合いなんですか?」

「今朝、ギルドの場所を教えただけだよ」

「なんだ、詰まんないです」

そうだろうけど、ハッキリと口にするのはどうかと思うよ。

「それではこれで、ハンター登録は完了です。こちらがハンターライセンスです。使い方は先程言った通り。もし失くしてしまった場合、100orenで再発行出来ますが、失くさない様に願います」

「はい、ありがとうございます」

ネストは金髪の少年にハンターライセンスを渡す。見比べて初めて分かることだけど、大男と同じ、大柄で肌の焼けた筋肉質なネストも、大男と比較すると小さく感じる。と言っても僕と比較すれば十分大きい。

ギルドのライセンスは拳大の横に太く赤いラインが入った銀製カードだ。系統毎に塗装されたラインの色が違い、ハンター系統のライセンスは赤色。銀製であるのは、流通している金属の中で一番マ

ナを運び易いのが銀だから。マナを運びさせて置く理由は、当然キユーブに情報を読み込ませるため、もつとも登録者の番号くらいしか情報として含ませて置けないわけだけど。

「んっじゃ、引き続きよろしく頼むぜ。・・・俺は野暮用の方を済ませてくらあ」

「はい、いつてらっしやい」

少年を残し大男はその筋肉に似合った大型のハルバートを担いで、その場を後にした。

「それでは、Cランクハンター認定試験ですけど・・・まず筆記試験、キユーブによる面接を今日中に済ませ、その結果をもって推奨クラスモンスターの所へ明日以降に行く。って感じでいいですか？」

「ええ、はい。大丈夫です」

「ではでは、こちらへ」。さくつと筆記終わらせちゃってください。マルガの対応は非常に気さくで、人によっては反感を買いそうだったけど、少年は物腰が低く、笑顔で受け応えていたので接客については何も言わないことにした。それより、疑問に感じた事はそこではなくて。

「Cランクハンター試験って？」

「ああ、Bランクハンターの推薦があるから特別試験って事だな」。そう、Cランク以上のハンター試験は開催日時と場所が決まっています、本来それ以外で試験をする事が無い、Bランク以上のハンターの推薦無しには。恐らくさつき出て行った大男がネストの言う推薦したBランクハンターなのだろう、あの筋肉量であれば納得がいく。

「そーなんですよお、なのでリキットさん。不束者ですが、よろしくお願いしますね！」

いつの間にか戻ってきたマルガの言葉は意味不明だった。

「はい？」

「あー、試験官なんだが・・・リキット、お前さんとマルガでやつ

てもらおう事にした。っていう意味だ」

頭痛に悩まされている様に片手を額に当てるネスト。

「ええー!!!・・・僕、試験官なんてやったこと無いですよ!」

「誰でも最初は、初・体・験なんです」

もつともな事を厭らしく言う、口に人差し指を添えた、赤縁眼鏡のマルガ。この人と一緒というのが特に不安だ。

昨日はミシエルに付きっ切りで感じなかったけど、このマルガレットという妙齡の女性は、赤縁眼鏡とそばかすに隠れているが結構美人だ。ギルド制服のローブ越しには伝わり難いが、出ている所はしっかりと出ている、スタイルも良いと思う。髪を二つに分けて束ねているが、その水色の髪束は細く、彼女の感情の起伏で飛び跳ねそう。何よりその触覚の様に伸びた髪が踊る度、花の香りが鼻腔を擽るのだ。

「まあ、試験官は2人必要だ。転任してきたばかりのお前さんを一入残す事は出来んし。マルガはこう見えても、本場の試験官をしていた経験もある。・・・それに、俺とあの少年の名前が似てて面倒なんだよ」

「そうですねよお、だから二人手に手を取って、そのままゴールインなんです!」

完全にマルガに遊ばれているのは放って置いて、資料を見れば確かにその名前の欄には、ネステイと書かれていた。似てるっていうか、気を配っていなければ言い間違えと聞き間違えの多重事故しか起きない気がする。

「なるほど。・・・ところでマルガさんって試験官だったんですね?」

「です。・・・えっと、そうやって私の過去を調べ上げて、私の事を裸にしていくつもりなんです。・・・リキットさんのエッチ」
「違います!」

このくだりをどうして欲しいんだこの人は。僕では到底処理できない難件ですよ。ヘルプミー。困り果て周囲を見回すと、いつの間

にか掃除を始めていたミシエルが視界に入る。淡々と掃除をこなすミシエルを見てみると自分も仕事をしなくちゃという気になる。

「よし！やりましょう！」

「もうリキットさんったら大胆なんだから……」

両手を頬に当て照れるような仕草を見せるマルガ。ミシエルに気を取られていた間に、何かを言っていたようで、それを弁解するのにやたら時間を使うこととなった。

「あ、あの。これでいいでしょうか？」

少年がおずおずと、埋め尽くされた解答用紙を持ってくる。

「あ、じゃあ次はこつちを解いてください。……これは僕が採点します！」

ハンター試験の筆記問題はあらゆる部門の問題が出題されている。各ギルド系統の中級問題は勿論、計算問題、モンスター知識問題、地理学、歴史、宗教……とにかくあらゆる種類の問題が出される。現実的には有り得ないが、それが仮に0点だったとしても、失格となるわけでない。この後に行われる面接の方が重要で、ちょっとした交渉術が問われる。そして筆記、面接、実績を考慮して、退治するモンスタークラスが決まり、その等級のモンスターを倒せば、晴れてCランクハンターになる。という訳で、人手が色々必要とされる上、実績の無いFランクからもCランクになれるというのもあって、志願者も多い事から恒例開催型の試験となっている。

昼食を交代して取る様にしている、最後は僕とミシエルの番、外に出ても食べたい物もなくふらふらと街を歩く。

「そついえば精霊って何を食べるのかな？」

「パンサー？……ん、何も食べない」

「そつか、魔力って美味しいのかな？」

「わかんない」

右手を顔の前へ置き、目を瞑るミシエル。

「パンサーは出さなくっていいからね！」

「ん」

「ミシエルは・・・」

ミシエルは何を食べたいかと聞いたら、きつとパンと答えるだろうと思つて止めた。思えば、パン、肉野菜炒め、コンソメスープ、スパゲティ、カレーしか食べさせて無いんだよね。

「ミシエルが食べ物屋さん選んで。ただし、パン屋とカレー屋はダメ！」

「ん~~~~~?」

雑貨店の中を必死に覗こうとするミシエルに、飲食店の看板にはフォークやナイフ、スプーンの絵柄や造形があるとヒントを出すと、直ぐフォークとナイフの描かれた店を見つけ指差す。そこは肉屋に隣接したハンバーグ専門店だった。店内は子供連れの客が多く居たが、僕にもミシエルにも好評で値段も安く、いい店を見つけたと思わせるに十分だった。

ただ一つ、やたらぶらついた所為もあって、ギルドから大分離れた位置にあるという難点があった。

「まあ、リキットさん何やってたんですか？面接始まつちやいましたよ、早く採点手伝つて下さい！」

マルガの非難を浴びながら、すこすこ採点を手伝う。

この短時間で膨大な出題範囲を誇るハンター試験の解答用紙を埋め尽くすというのは、点数はまだわからないが、かなりの博学の持ち主なのだろう。当の本人ネスティ少年は今、魔法通信で面接官と話している。

一方、やる事の無くなったミシエルはネストに昼休憩中に買った絵本の読み聞かせをして貰っている。文字が読めなければ何屋かも分からない店も少なくない。今後、ハンターになつても文字が読めないとキューブの操作も危うい。文字の書きは出来なくとも、せめて読めるようになる必要があるのだ。

しばらくして、別室から出て来た少年は深い一礼とともに。

「面接終わりました。ありがとうございます」

「お疲れ様です！・・・筆記、面接、実績・・・産まれ立てホ力ハンターなんで無いんですけどお。が加味されて倒すべきモンスタークラスが決まりますのでえ・・・採点もまだ終わって無いので、また明日以降に来てくださいね」

「はい、ではまた明日お願いします」

礼儀正しくまた一礼するとゆっくりと出口に向かう。細身の剣を腰にしている、以前に会った同い年位の赤髪の少年をふと思わせるが、彼と違い、既に僕の中での金髪の少年の位置付けは紳士になっていた。僕も席を立て一礼して見送る。

「リキットさんがそんなんじゃ、これからの私達の夫婦生活が心配になっちゃいます」

仲裁してくれるネストさんや、一蹴するミシエルが絵本の読み聞かせに夢中になっている、今この場はマルガの独壇場と化すのであった。

「それにしても・・・凄い」

解答用紙を埋め尽くしていた時点で博学とは思ったけど、実際の正解数は6割に及び、正答と呼べないまでの回答にもある程度の考察が書かれていた。これがどれ程凄い事を正しく解説するには数時間掛かるのではないけど、受験者の平均正解率が2割強、合格者の平均正解率が5割弱なのだ。それは勿論、老若男女問わない場合、ですなえ〜・・・」

「採点報告上げたら、一緒に飲みに行かないか？」

感嘆の声を上げる僕達に、ネストが空気グラスに口を付け呑んで合図する。

「でも、ミシエルが・・・」

「ミシエルちゃんも満足な、美味しい料理のお店知ってます！」マジです。そう言う彼女の熱意と剣幕に押されて、行った店は本当に料理の美味しい酒場ではなく、各種アルコール飲料が置かれた

庶民的なレストランだった。

ネストさんは飲みに誘った張本人だったけど、それほど飲まず、食べてばかりいた。反面、顔も真っ赤にしながら声高らかに笑うマルガは既にワインを2本空けていたが、止まる気配を一向に感じなかった。ミシエルはネストの横に座り、色々な種類の料理を分け与えられていた。僕はと言えば、完全にマルガの話し相手にさせられ、細々と飲み食いした。それでも数時間も長居すれば相当な量飲める訳で、特にマルガの酒豪ぶりには驚かせられた。

帰る頃には酔いも回っていて、パカパカの背から何度か落ちそうになった。ミシエルも眠そうにパカパカの首を抱き枕にしている様にしたがみ付いていた。

酔って風呂に入っても良い事は何も無くて、風呂に浸かりながら眠って、死にそうになったのを憶えている。そんな僕は、ミシエルを伴ってさつとシャワーを済ませ、着替えてベッドに潜り込んだ。今日はマルガに振り回されたような、そんな一日だったと振り返る間も無く、意識は地へ落ちていく。

第六日 夢見る者と職務怠慢？

夢・・・寝て見る夢。

白い肌の女性に抱かれるレーデ、その女性は炎を纏い燃えている。焦げる様な匂いも、火の明かりも、帯びる熱気も感じない。ただ、白い肌の女性が炎に曝されてレーデを抱いている。そんな夢の一瞬、映像。

そして腹部を襲う強烈な打撃。声に成らない声で悲鳴を上げると、頭を浮かせてお腹を見る。子供の腕がアーチを描くように腹部に掛かっている。その腕の持ち主は足の裏をこちらに向けてぐつすりと眠り込んでいる。どうやら、ミシエルの寝返りで肘打ちを貰った様だ。

昨日は・・・あれ、昨日の夜はどうしたんだっけ。ミシエルは自分の部屋で寝かせなかったか。全然憶えてない。変な夢も見ってしまったし、打たれた腹部も痛む。腹癒せにミシエルを擦って起こせと悪魔の囁きが聞こえた気がした。僕は悦んで受け入れ、口元をにんまりと歪ませる。

「・・・やはあひやはういはは、あはやひはは！」

ミシエルは笑いながら、くねくねごろごろと転げ回る。しばらく擦り続けて、想像以上の威力を誇ったゴールドフィンガーに敬意を払って窓から射す陽光に向かって手を広げる。ナイス、僕の手。気分が一気に晴れていく。

「おっはよう！ミシエル」

「ん〜！」

ミシエルは当然ご機嫌斜めである。口を膨らませ、非難の視線を僕に浴びせていたかと思えば、軽い体当たりと共に小さな手の平を僕の脇にぴたりと付ける。その後の僕の顛末はもう、情けなくて語りたくも無い。ただ、そんなやり取りが面白かったのは確かだった。

いつもの様に朝食も済ませ、ミシエルを連れて西ギルドへ到着する。ミシエルの服装は一昨日前と同じ、お気に入りの白カッターシャツと黒のゴシックパンツだ。そんなに替えが何着もある訳じゃないからいいんだけどね。

扉を開いても、ドアベルに反応したのはネストだけだった。マルガはと言えば、奥にあるテーブルに突っ伏していた。瞳はこちらを捉えてはいるがどこか虚ろで、片手を枕に、もう片手で頭を押さえ、時折り胃から何かを吐き出そうとしている。二日酔い・・・それも重症だ。

「あの、彼女お酒強いんじゃない？」

「それ程じゃないみたいだな、俺がからつきしダメなもので、お前さんがいてつい酒が進んだんだらう・・・あそこまで飲んだのは初めて見たし・・・な」

そう言つて二人でマルガの方を見やると、マルガが何かを喋っているようだった。近付いてようやく微かに聞こえる声。

「・・・トさん・・・ずっと・・・看病・・・下さいね」

これに口の動きと想像を合わせて考えると、リキットさん今日はずっと私の事を看病していて下さいね。となる。と言うか、どうしてこの状態で出勤して来たのだからこの人は・・・。考えても仕方ない、とりあえず、グラス一杯の水を汲んで来る。

「・・・飲ませて」

「マルガ、甘えるんじゃない。二日酔いは病気や怪我じゃないんだから、リキットも放つて置け。それより、仕事だ・・・よく分からないのだが、お前さんが配達をするようにって荷物を中央ギルドから預かってるんだが？」

掌に収まるほど小さな箱をカウンターの引き出しから取り出すネスト。マルガは覇気なくぶう垂れていた。

箱を開けると、鳩や鷺など様々な鳥の形を模した立体的な装飾の付いたクリップが、やんわりとした寢床で寛いでいた。それに覚えのあった僕はすぐに届け先を理解した。技巧士クラフトマンクエストをよく依頼

する僕の遠い親戚の屋敷までの道程といつもの世間話の時間などを考えると、どうしても昼を余裕で過ぎてしまう。

ミシエルを連れて行くには、少し不安があるし、まず何と紹介すれば良いか分からない。借りている貴方の家に泊めている素性不明の子供です、なんて言える訳が無い。かといって、マルガが倒れ伏して、ネスト一人で切り盛りしている状態のギルドにミシエルを残していくのも、気が引ける。二人でやって暇だ暇だと言えるけど、一人だと大変になる瞬間が稀にある。しかも、東ギルドが使えない所為で西ギルドへの出入りは単純に倍増していた。マルガが働ければミシエルを置いて行けるのと思うが、彼女は足元も定まらずふらふらと奥の部屋へ入っていくではないか。どうやら限界を迎えたらしい。

元々、ミシエルを連れ回すには無理があつた。レーデも、ネストも、マルガも、みないい人だつたから、ミシエルを置いて来いなどとは言われず、受け入れられただけなのだ。ならばいつその事これは良い機会だと考えて、ミシエルに家の事を任せるというのも有りだろう。掃除に関しては随分成長した事だし。暇つぶしの道具も幾つかあるので、何とかなると思う。勿論、付き添って文字や計算の勉強なんかをした方が今後の為になるのは分かり切っている事だけだ。

「それでは、いってきます」

「いってきます」

「いってらっしゃい。しつかり機嫌取つてこいよ」

箱を受け取り、クエスト品を配達する経緯とそれに時間が掛かる事だけ話して、ミシエルを連れて一先ず我が家を目指す。

戻る途中に買った、牛一枚肉にパン粉を付けて油で焼き上げたコトレッタとロールパンを昼食用にと食卓に置いて、家の掃除をする様に言った。ミシエルは好奇心と呼ぶ物には恵まれていない様に感じるけど、その分、落ち着いた行動を取る。今では出会った当初か

ら持っていた不安感は小さくなっていった。

「じゃあ、行つて来るね。・・・お留守番クエストよろしくね」

「・・・いつてらっしゃい」

浮かない顔をするミシエルに、ふわりと優しく、それでいてハッキリした意思を込めて、大丈夫すぐに戻ってくるから。と言葉を掛けた。

見えなくなるまで手を振ってくれているミシエルに、馬乗り後ろ向きになりつつ手を振り返すのだった。

時刻も昼を迎えようとしていた。例の依頼人が会食などを予定してるならば、クエスト品を渡してそれまで、という事もあつたらう。しかし、僕は座つてその御仁と食卓を囲んでいた。

食後、全ての皿を下げたグラスだけが立つ食卓。それまで談笑を絶やさなかつた権柄を持つ依頼人は、少し間を置き、険しい顔をする。それはこの人物が血筋や口八丁だけで今いる階位に座しているのではないと思わせる威厳、凄味を感じさせた。

「・・・リキット君、最近ギルドで変わった事は無かつたかね？」

「え、ええ・・・キューブが故障しましたけど」

「そうかね」

暫く品定めをする様な強い視線を受け、渋い顔のままの依頼人が再び口を開く。

「内々の話なのだが・・・近くリザリアにギルド直属の聴問委員が訪れるそうだ」

「あの・・・聴問委員会が一体何をしに？」

聴問委員会とは、ギルド発足当初にクエスト成否に係わる制度が出来る以前、その裁決を担っていた内部の外的部門で、その後、不正を取り締まる査問委員会との統合後も外的機関の役割を一手に担う組織の事だ。

「理由までは明かさず、義を通すためだけの知らせだった・・・君に話すか今の今まで迷っていたのだがね」

「何故、僕にこの話を？」

「・・・恩を売られたと受け止めてくれたまえ。仮にこの話が何かの役に立ったのなら、リキット君が出世した時にでも何か返して貰おうとしているのだよ。私は欲深いのでね」

一度目を閉じ開ければ、いつもの人の良い依頼人の笑顔が戻っていた。

「ところで、今回のこの鳥模型クリップなのだが・・・」

そうして、装飾細部に至るこだわりを聞かされる恒例の儀式が始まる。

リザリアの中心から北寄りに位置する邸宅地を後にした僕は、程近くにある中央ギルドに寄る事にした。聴聞委員の来訪がソルバー情報の漏洩によるものと見当をつけたからだ。

「東ギルドから転属のレーデ？・・・病気だとかでここには一度も来て無いな」

中央ギルド、過日見知った顔の職員の意味で完全に面を食らい、その言葉の意味が理解の域に到達することを困難にしたようだ。驚きから困惑へ。理解に達すれば溢れ出る疑問と、実体験と話のそぐわない気持ち悪さが胸を押し潰し始める。

疑問符を多量に垂れ流し狼狽する僕を、首を傾げて覗き見る職員は更に続けた。

「とにかく、転属の前日だったかな。代理の男がそう伝えに来たきり、彼の事は何も知らないよ」

「・・・そうですか、ありがとうございます」

足が勝手に動き、向く先がレーデの家の方角を見据える。病気とというのは聞いていないし、異動の通達があった後日にもレーデには会っている。僕に対して仕事の話で隠し事をしているのは明らかだった。それでも一昨日にそれを言う機会は有った筈と、怒りに近い苛立ちと行き場の無い不快感を胸にパカパカに跨る。

結局、レーデの住む家まで行って不在を確認しただけだったが、近隣住民の話から以前と同じように夜にしか戻らないという事で、我が家で一人留守番しているミシエルを拾う。擦り寄ってくるミシエルに頭を撫でてやる事位しか出来ず、話もそこそこに西ギルドへと舞い戻ってきた。

「何かあつたんですか？」

朝見たほど不調では無いが、本調子には程遠いだろうマルガが、僕の苛立ちを察してかそう尋ねてきた。確かに口を閉ざす事が多かったため、不機嫌だと伝わってしまったのかも知れない。

「ううん、何でも無いよ」

「・・・機嫌取りに失敗でもしたか？」

「そっちは大丈夫です」

我ながら淡白な返答だけど、今の僕にはそれが精一杯だったし、話して良い内容かも判断がつかなかった。

「・・・そうか。・・・ところで、Ｃランク試験の事なんだが、また明日出直して貰う事になったからな、マルガが使い物にならなかった所為で」

「う・・・さつきから謝ってるじゃないですかあ！」

そして僕は取り立てて会話に参加せず、不快感を抱えたまま淡々と仕事をこなした。結果的にネステイ少年には悪い事をしてしまったかも知れないけど、マルガがあの状態では試験どころではなかっただろうし、僕一人だけでは役不足に違いなかっただろう。やむを得なかったと開き直れば、職務怠慢と罵倒されても仕方の無い話だ。

帰りの足を延ばし辿り着けば、レーデの部屋からは既に灯りが漏れていた。ミシエルとパカパカを表に残し、家屋へ入っていく。四戸ある部屋を外付きの廊下は、隣の家の陰になって暗かった。ある一室の戸を叩く、出て来た人物は当然の事ながらレーデ本人だった。4年振りに再会した時と同じ様に、髪の色に違和感を感じた。再会した当初は、黒に近い強い青色だった髪が全て白に染まり上がって

いた事に戸惑っていたものだけど、当人はイメージチェンジだと笑って答えていたっけ。それが、室内からの逆光で昔の紺色の髪に戻ったかのように錯覚したのだ。

「よお、リキットどうした？」

金なら貸さないぞと、いつもの様に笑う親友がそこには居た。

「聞いたよ、中央ギルドに行つて無いんだって？」

玄関口で詰め寄る僕に、ややあつて神妙な面持ちでレーデは答える。

「そのことか。・・・実は、ギルドを辞めようと思つてるんだ」

「辞めるつて・・・まさか、この前の事で？」

「それもある。・・・それに、また旅をしようかと計画してる所だ」

「どうしてそんな大事な事を話してくれなかったのさ」

「すまない、話そうとは思っていたんだが、色々とタイミングが合わなかつてな・・・」

「ギルドを辞めなくても済む様に」

手の平を突き出し、続く言葉を制するレーデ。

「気持ちは有り難いが、はじめだ。ギルドは辞める」

「でも」

「決めた事だ。・・・それに旅に出たら、どうしてもやり遂げたい事があつてな・・・」

どうしてか旅をするというレーデの言葉は、気持치가良かった。

きつと学徒として別れたその時の台詞と想い出がそうさせるのだろう。他の街、国の話を聞く度にどれ程レーデの事を連想したろう、僕の中では旅人レーデが自然な姿だった。

それに、したい事をすると言う友を応援しないなんて友達じゃない。

「わかったよ、もう言わない。旅に出るなら君の無事を祈る事にするよ」

「ああ、ありがとう」

「そつだ・・・聴聞委員がリザリアに来るらしいって」

「・・・俺の事だろうな」

「多分」

減俸や解雇に罰せられる事はあるだろうけど、自主的に辞職するのだから咎められる事は特に無いと思う。

すこし間を置いて、負の感情を吹き飛ばすように覇気のある声色が響く。

「・・・よし、明日には立つとするかな！」

「明日とか、急過ぎるし！」

悪戯小僧のように歯を見せて笑顔になるレーデに釣られて僕も顔が綻ぶ。

少し話して、またミシエルとレーデと三人で夕食にしようと話を持ち掛ければ、快く承諾してくれて、僕の家へ行く事になった。

あつという間に辺りは暗くなりつつあったけど、近所の魔光灯の部屋明かりが道を照らし出していた。

「お前の家こんなに綺麗だったっけ？」

部屋に入ったレーデの最初の台詞だ。綺麗にしている実感は無いけど、汚さず使う事を心掛けているのと時々掃除でなんとかやっていた筈だ。室内には埃の後も屑も残っておらず、家具も光っている様にすら見えた。それは間違い無くミシエルの功績で、西ギルドへ戻る時には気にもしていなかった事だった。

「ミシエル、ピッカピカじゃないか凄いぞ！」

「ん〜」

髪をくしゃくしゃにして撫で回す。ミシエルは口をへの字に曲げて、不平を唱えているのか誇り顔か、どちらとも取れない変な顔をしているので、思わず笑ってしまう。

「お前はミシエルを侍女にするつもりなのか？」

「まさか！」

「チジヨ？」

違う！と男二人でハーモニーを奏でる。

「侍女つていうのは、身の回りの世話を仕事にする女性の事だよ」
「これだけ綺麗にしてくれたんだから、ミシエルに特別なご褒美を上げないとな？」

「そうだね、ミシエル何か欲しい物無い？」
「カレー！」

僕とレーデの顔を見比べて答えるミシエルに、カレーを所望と聞いてどうしようか悩んでいたら。

「中央風カレーは旨いけどな。本場のカレーは辛いつていうより口の中が痛くなるんだぞ。知ってるか？そんなカレーを今から作るか！痛いほど強い辛味を経験した事があるのだから、ミシエルは眉を顰めてカレー要求を取り下げる。

「ははははっ・・・リキットにアクセサリーでも買って貰うといい・・・な？」

「そうだね、装飾品の一つも持ってておかしく無いもんね」
ミシエルは首を傾げていた。

結局、野菜と茸たっぷりのリゾット、コーンスープ、ザワークラウトという酸味あるキャベツの漬物に乗せたこんがり焼き目の付いた骨付きソーセージを三人でわいわい料理した。

楽しければ時間もあっという間に過ぎるもので、昔話に花を添え、ふとミシエルの武器。パンサークローの話になった。

「あの時の武器はどこから持って来たんだ？」
「ん〜、この辺？」

両手で前方の空間を何度も掴もうとして、ミシエルが何か搾っている様に見える。

「あれは精霊が宿った武器で・・・なんというか、出し入れが自由らしいんだ」

「精霊が宿ったつて・・・そんな能力があるのか」

「出すのにミシエルに凄く負担が掛かるみたいだから、あんまり出さないで居てくれればと思ってるよ」

「そうだな・・・そんな武器、悪用しようとする奴もいるかも知

れないし。見付からないに越した事は無いだろう」

「パンサー見える？」

唐突にミシエルがレーデに尋ねる。

「いや、武器にしないと見えないぞ・・・だから、他の人が居るところで無闇にパンサーを武器にしたら駄目だからな？」

「うん、わかった！」

今までデュライと対峙した3回しかパンサーを出してはいない筈なので、大丈夫だろうと思う。戦う必要が無ければ、パンサー側から話をしようとする場合以外には、パンサーを具現化させないんじゃないかな。

「リキット、お前がちゃんと見るんだぞ、わかってるのか？」

「わかってるよ」

「頼むぞ、本当に」

レーデも僕に負けないくらいの心配性なんじゃないかと時々思う。いや、僕が頼り無さそうだからかも知れないけど。

その後、酒も入って、話は西ギルドの仲間の事やCランク試験の事、まだ出発してもいない旅の話にまで及んだ。ミシエルはその間ずっと、レーデから貰ったスライド型のブロックパズルを難しい顔をしながらあちらへこちらへと動かし解いていた。

レーデが帰った後。ほろ酔い気分で風呂に浸かっていたら、ミシエルは一人で髪と身体をしっかりと洗っていた。あつと言う間に自立してしまった気がして、嬉しくも寂しくもある複雑な気分になる。風呂上り、二人並んで腰に手を当て牛乳を飲む。何度か読んでいる絵本を寝るまで読み聞かせる。良い夢が見れますように。穏やかに目蓋を閉じた。

第七日 合格と失格？（前編）

今朝はパンを買い込んで、ミシエルを家に置いてギルドへ向かった。ネステイのクラंकハンター認定試験の現地での戦闘試験に僕とマルガが付き添う事が決まっているため、ネストが西ギルドを今日も一人で切り盛りするしかないと分かっていたからだ。

ミシエルの学習能力が高いのか、僕がミシエルの事を見縊っていたのか、ミシエルはもう絵本もパズルの解き方も完全に憶えてしまっていて、暇つぶしの玩具としては使い物にならなくなっていた。なので、ミシエルには自分で考えて何でもしていいと言ってみた。勿論、火を使わない事を約束させてた。心配もあるが、ミシエルが一体何をするのかちょっと興味がある。

ともかく今日は、パカパカに一人で跨る。新たな玩具の獲得と、レーデが勝手にしたアクセサリーをプレゼントするという約束を守るため、金庫から銀行券を持ち出して家を出た。

このリザリアでは街近くの河流から水を引いて、浄水した後各所に配水している。もちろん排水路も用意されている。その排水路には雨水や生活排水、清潔を保つために削ぎ落とした物が流れてくる所為で、悪い魔気が自然と集まりやすい。地を通して自然な魔気に戻るのもあるが、そのまま溜まって魔物を呼び寄せたり、生み出す場合もある。リザリアではそうして生まれたモンスターを倒すのは軍の仕事の一部だけど、今回は認定試験という事で特別に許可を貰って地下排水路に進入している。

ところで、悪い魔気が魔物を呼び寄せたり、生み出すと言ったけど、悪いマナの集まる所には、知らず知らずの内にモンスターが沸いていて、その魔気が魔物を生み出すという説があるが、実際の所は定かではない。しかし、モンスターは魔気の強い所を棲家にする傾向が強いというのは確かなようだ。マナの薄い所や、聖なる魔気

とでも言うのだろうか、の強い場所ではモンスターは活動していないというのは、逆の意味で精霊にも当てはまる事らしい。もっとも、見る事の出来ない精霊と、普通に見える魔物とを比較する事に意味なんて無いし、パンサーに聞いた方がよっぽど真実に近い話が聞けると思う。

とにかく、僕達はこの臭い地下水路を慎重に進んでいる。人工的に掘られた水路の片脇には、石積みの簡易な歩道が出来上がっている。これが水位の変化に対応できるよう、腰辺りまで高さのある段差が何段かあって、今は水位より上の三段が歩ける状態になっている。そんな歩道と水路があるため、洞内の空間はそれなりに広く歩きやすいけど、臭いはなかなか強烈だ。

先頭をネステイ少年が歩調に気を使いながら進む、僕とマルガがそれに続く。それぞれ魔光灯を持っているので、日の当たらない地下水路もくつきり見えるほど明るい。

「何も居ませんねえ〜」

「ここじゃなかったのかも知れません・・・」

駐在軍が魔物の処理をしているとはいえ、本当に何も居ない。討伐モンスターリストの中でリザリアから一番近いモンスターが棲家としている筈の場所がここだ。と言っても、実務的にクエストを受ける要領でモンスターを選び、その場所を調べ、退治に行くネステイに、僕達は付き添っているだけ。一連の行動に何か問題が無い限り、出しゃばってまで注意や誘導は出来ない。今の所、少年の行動には何も問題は無く、対象のモンスターが見付からないという可能性を一番危惧している。

探しているモンスターはレッドリザードという、人と同じ位長さがある爬虫類型の青い肌地に数多くの大きな赤い斑点が特徴的なモンスター。見た目の毒々しさの通り毒を持つが、毒性は低く筋肉の麻痺を引き起こす程度、わざと摂取しない限り死に至る事はない。棲息場所は魔気の集まる水辺全域。毒攻撃への対処と躊躇無く攻撃出来る行動力さえあれば倒す事ができる下級のモンスターだ。と言

つても、もちろんキューブ情報の受け売りで、僕はそんなものに関わり合いになつた事はないので、強弱の基準などはわからない。

「モンスターが見付からない場合どうなるんでしょうか？」

ネステイの顔には心なしが焦りと汗が浮かんでいるようだった。

「そうですね。推薦での試験ですと、規定ではもう一度モンスターの選択から出来ます。それも失敗すると、同一推薦人による特別試験は受けられなくなります」

赤縁の眼鏡の腹を押さえて答えるマルガ。

「そうですね・・・頑張らないといけませんね」

「もしかすると、火唐草の所為かも知れないので・・・ネステイ君は先に進んで下さい。僕達は少し離れて付いて行きますね」

マルガに目配せをして止まると、彼女も大げさにも軍人張りのピシッと決まつた敬礼を見せた。

火唐草というのは、年中赤い色をした巻き蔓の特徴的な草で、水辺を好むモンスターが嫌う香り成分が出るらしくモンスター除けとして重宝されている。その草を僕とマルガは持っている。

距離を置いて同行するも、目立つた変化が訪れない。レッドリザードだけならともかく、モンスターが全く見当たらない。何度目かのネズミが魔光灯の明りに晒されては逃げていく。

「・・・出ました！」

待ちに待つたと言わんばかりのネステイからの報告だ。僕達は素早く、ある程度の距離を保つ所まで駆け寄つた。大型蜥蜴のように四足を地面にぴたりと付け、口先から尻尾まで大人一人が横たわつたほどの長さがあり、柄も毒々しい赤斑点をしているモンスターだった。

「間違いなくレッドリザードです！頑張ってください！」

いつの間にか審査用書類を取り出して、いつでも書き出せる態勢にいるマルガを流石だと思う。書類を戦闘中に書く必要性は全く無いんだけど。

「倒せばネステイ君もランクハンターだから、頑張つて！」

「はい！行きます！」

細身の剣を正面に構えるネステイ、その姿はまるで剣の型稽古をしているようだった。一方、レッドリザードも一步も動かない。毒々しい風貌と、目をぱちくりとさせているのを合わせて見るとかなり気色が悪い。

ゆっくりとネステイはレッドリザードに摺り足で近寄っていく。振るえば剣の切っ先が当たるかどうかの距離になると、先に動いたのはレッドリザードの方だった。レッドリザードは爬虫類と同じく、短足と思わせない素早さで、体で円を描く様に反転して駆け出す。ネステイは攻撃を警戒して一步下がっていたが、それが致命的だった。遅れて振るった剣の跡にはレッドリザードの尻尾の一部が転がっていた。

「っ！・・・追います！」

レッドリザードを先頭にして、離れた位置でネステイが少しづつ追い上げる。更に離れてマルガがレッドリザードとの距離を保ったままそれを追う。更にマルガに段々と引き離されつつ走る僕。マルガの走力に驚いている暇なんて無く、追いかけるだけで精一杯だ。

間も無く、息を切らせて片膝に手を置いて呼吸を整えながら、皆が走って行った方を見る。水路の先は曲がっていて、姿が小さくなり壁に遮られ見えなくなる。

背筋を伸ばして歩き出そうとすると、頭がくらくらとして足元が崩れたように前のめりに膝を突いてしまう。そのまま落ち着くまで呼吸を繰り返していると、目の端に青白っぽい何かを見つける。それに焦点を合わせても、僕には首を傾げるしか出来なかった。

視線の先には、足先から踵までの、足裏の長さ程の小さな蛇がぴくぴくと細かく動いていた。よく見ると青白い蛇はちよるちよると漏れ出す汚水に打たれているではないか。蛇自体をあまり見た事は無いのだけど、汚水とは言え、水に打たれて弱る蛇っていうのは有り得るのだろうか。小さく可愛らしい蛇の姿に思わず笑い出しそ

うになつたけど、あまりに可哀想なのでその場から摘んで救い出す。この大きさだと蛇でもまん丸の目が可愛いと感じる、大きいと不気味でしかないのに不思議だ。青白い蛇は礼のつもりか準備運動か、自分の尾を追つて何週か回つた後スルスルとどこかへ消えていった。水路の先では魔光灯の明りがぼんやりと見えていた。どうやらそこで止まっている様だ。

僕が二人に追いついたら、ネステイはレッドリザードとその残骸の群れに囲まれていて、マルガは書類を完全に仕舞つて応援と言うより観戦している状態だった。

「遅くなつたみたいだね？」

「もう合格確定ですよ」

動いているレッドリザードはあと三体。その内の一体の額に剣が突き刺さり下腹から伸びた切っ先が光る、剣が抜かれると程なく体重を支えた四本の腕があつさりと力を失う。

残った二体のレッドリザードが同時に飛び出す。一体はネステイに向かつて、もう一体は真っ直ぐ僕に向かつて長い身をくねらせ走る。

「え・・・？」

不意を突かれレッドリザードが目の前まで来ているのに、一步も動かずまた逃げ出そうとしているのかという考えが一瞬過ぎる。レッドリザードは既に狙いを定めて、口を開いて跳び掛かつてくる。

その裂け口に鈍く光る牙を見て初めて、襲われると理解するも、尻餅をつく様に地面に倒れるしか出来なかった。

レッドリザードの開かれた喉の奥から硬質な鋭い舌がグイッと飛び出す。食べられると思った。しかし、レッドリザードは舌を引っ込めて僕に覆いかぶさるように身を預けた後、ピクリとも動かなくなった。レッドリザードから視線を外すと、すぐ近くにはネステイが周囲を見渡しながらゆっくり近付いてきて、僕に手を差し伸べる。「大丈夫ですか？」

「ネスティ君てば、ズバツ抜きながら剣をそのままシュパツと真つ二つにして、最後の一体にザザツて飛び掛ったんです！凄かったんですよ〜」

マルガの解説を受けると。つまり、僕がレッドリザードの舌だと思っただのは、ネスティの持つ細身の剣だったらしい。僕はネスティの手を借り立ち上がる。

「でも何でリキットさんが襲われたんでしょ〜うか？」

「うん、火唐草は持っているはずだし・・・」

そう言いつつ、自分の身を、ポケットというポケットを漁る。しかし火唐草を入れていた場所はすっかり空になっていた。

「ごめん・・・無くしたみたいだ」

「ん〜もう、何やってるんですか」

マルガは口を窄めて、僕を咎めた。

「もう用は済みましたし、早く外へ出ましょう」

「ネスティ君は大人ね〜」

苦笑いを浮かべるネスティ。

「・・・すみません」

うな垂れる僕。

僕達は駐在軍の詰め所へ挨拶に寄っただけで、西ギルドへそのまま戻ってきた。僕のローブだけが一際、汚れによって目立っている。

「お帰り。・・・泥だらけじゃないか、どうしたんだリキット？」

「色々とありまして・・・」

「そうか、怪我が無ければいいが・・・結果は上々の様だな」

「そうなんですよ、聞いてください。ネスティ君凄いですよ〜」

あつちからくるレッドリザードをズバツバシュツと・・・」

身振り手振りを加えて、ネストに語りだすマルガ。そう簡単に止まりそうにない。

「じゃあ、ネスティ君こっちへ」

僕はネスティをカウンターの奥のテーブルへ座らせ、黄キューブ

で操作を始める。審査書に書き込まれた内容をそのまま入力する。と言っても今日の戦闘が優・良・可・不可の段階評価と備考くらいしか入力する所は残っていないので、あつと言う間に入力し終え、ネスティの対面に座る。

「本部での承認を受けCランクハンターに変わるまで、一日ほどかかります」

「ありがとうございます……これでやっとCランク、デュライと同じ」

最後にぼそりと呟いた独り言に、予想だにしなかった名前が挙がった。

「もしかして、君と同年くらいで赤髪の、デュライと友達なのかい？」

「……友達かどうかで言うと、多分違います。リキットさんはデュライとはどういう？」

「どういう関係という物でもないけど、ネスティ君が来る四日前だったかな？……にギルドに来て、その後色々あつてね」

「本当ですか！」

どちらかと言えば嬉しさが先立っている驚きを見せるネスティ。

今にも立ち上がらんばかりだ。

「本当だよ、嘘を付く理由が無いもの」

「生きてたんだ、良かった」

安堵して目を閉じ、椅子の背凭れに沈む。すぐに跳ねる様に前へ重心が移動し、質問が繰り返される。

「デュライはこの街にいます？どこへ行きました？……僕らの事何か言ってますでしたか？……もしかして何か伝言ないですか？……あつ、すみません」

まるで慌てふためいてるみたいなネスティ。

「ごめんね。行き先も知らないし、君達の事も伝言も何も聞いてないんだ……ただ、この街にはもう居ないと思う」

「そう……ですか。……でも、生きてるのは確かなんですね？」

「足も有ったし、幽霊じゃないと思うよ」

「そうだ！怪我はしてなかったんでしょうか？」

「怪我か・・・最初に来た時の服装は汚れていたけど、怪我をしている様子は無かったかな・・・そのままランククエストに出て行っただし」

ネスティは良かったと相槌を打って、その後の言葉の方が気になったのか、更に質問が飛んできた。

「そのランククエストというのは？」

ネスティに質問責めにされると流せず、正直に答えざるを得ない。排水路では命までとは言わないでも、少なくとも怪我をせずに済んだのはこの少年のお陰である。

薬素材を収集するクエストで、今は魔窟と化した儀式跡地に行く必要があると答えると、ネスティはそれを受けたいと言い出した。紳士的な彼に珍しく、僕を困らせる。友達とは違うという言葉と、その行動から察すると、デュライに対して強いライバル心があるのだろう。

デュライとクエストの話がしたいという事で食事に誘われたが、ミシエルが待っているので我が家でも良ければと言えば、それをあっさりと快諾される。彼にとってはデュライという存在は相当に大きいのだろう。

仕事を終えるまで、まだ幾ばくかの時間が残されている。ネスティ少年は、旅に同行している先日の筋肉大男、マセルというらしいに諸々の事情を伝える為、一旦宿へ戻った。

今日の仕事を終えると、丁度いいタイミングでネスティが戻って来た。ネストとマルガは先に帰っている。マルガだけはついて来ようとしていたけど、話す内容的にもマルガが居ると面倒くさそうだったので、断固として拒否させてもらった。

「すみません、お待たせしました」

「ちょうど今終わった所だよ・・・それより、渡しそびれていたん

「ただ、これ」

色彩鮮やかな、鳥が翼を広げた形をしたバッジを渡す。細かい装飾の他、この字が背景に見えるように彫りこまれている。

「ストレリチアという花を象ったCランクハンターに贈られる徽章だよ。試験合格おめでとう」

「ありがとうございます！・・・でもまだCランククエストを受けられないのでは？」

「そう、手続き上の理由でね。その間にソルバーは別の街へって事はよくある事だから、先に渡す事になってるんだよ」

「そうですか、でもデュライは付けてなかった様な・・・？」

「まあ、徽章は記念品だからね。付けていても、分かる人が見れば分かるって程度の物だからね。・・・彼の場合は、捨ててそうだけ」

ハンター系統の徽章は上位三ランクになった者に贈られるが、特別、価値もメリットも生まないので、記念品というのは確か。

なるほどと言って、白い制服の胸ポケットの上に徽章を付けるネステイ。

第七日 合格と失格？（後編）

ギルドの戸締りをしてパカパカを迎えに行き、大通りを西から東へ歩いて横断する。長く伸びた影も徐々に他の影に埋もれていく。大通りならではの魔光灯の明りで集客を狙う看板や文字。それらの明りで影が幾つも生み出されては消える。

ネスティの話はデュライとの出会いから始まったが、長い付き合いではないらしく、言えない部分もあったのか断片的な部分もあって、すぐに終わった。

話を要約すると、ある切っ掛けで出会って、ごたごたに巻き込まれつつマセルと知り合い、廃墟へ行きそこで離れ離れになったという事だった。本当に要約するとこれだけなのだから仕方が無い。もっとも、ネスティが一番多く語ったのは、デュライとマセルとの戦いや、デュライとモンスターとの戦いで一挙手一投足すら喋る勢いだったので、相槌で話を進ませるのに苦労した。マセルとモンスターの戦いにも触れたが、ハルバート一振りで豪快に叩き割るように倒したという説明だった。それは、ネスティ少年がデュライ少年に抱いている感情が、ライバル心と憧れの内在した物だという事を更に際立たせたただけだった。

僕とネスティはようやく噴水広場に差し掛かる。

東西に伸びる大通りは唯一、南北を縦断する大通りによって道が曲げられていた。両者の通りが交わる交差点には中央にとても大きな噴水があり、その人工池には神話を彫刻された石像が立ち並んでいた。その巨大な池があるために、どちらの道からも真っ直ぐに進む事ができない。代りに時計回りに回るよう矢印を刻んだ表示が街灯や石台についていて、その円形地帯を回らせる工夫をしていた。この成果によってかこの街では自然と、馬車などは道の左寄りを行っている事が多い。大通りより幅のとられたあまりにも大きい口――

タリーは、露店スペースや馬の休憩処として主に利用されていて噴水もあり、広場という方が似つかわしかった。街を上空から見れば、十字を描く大通りにの中心地が円形に大きく開けていて、ど真ん中に石像が浮かび上がっている事だろう。

「お金を下ろしに銀行に寄るね」

そう断ってロータリーの南側にあるエクセリア王国銀行リザリア中央支店へ向かう。パカパカの手綱を引いているとは言え、道の端を歩いているので時計回りにぐるぐると回る必要も無い。

金銀銅貨であるが故に、大陸全土に流通する事ができた共通の貨幣価値としてのオレンだけど、それを仕掛けたのがエクセリア王国銀行だという説もある。少なくとも、設立から数百年経った今でも銀行としての機能を維持している事からも信頼性は高い。しかし、ギルドのキューブの利便性を知っている僕にとつて、銀行は使い勝手が良いとまでは言えなかった。現にシステム上、銀行券なんて物を持って訪れ書類冊子で照会をされなくても、キューブのようにライセンスによる照会をした方が圧倒的に早く確実だと考えるからだ。もちろん、キューブのシステムを提供するのも、それを銀行が導入するかも、それぞれの経営陣の判断だろうし、そんな考え自体も夢幻なのかもしれない。ギルドが独占している技術を、他の事に置き換えて考えても仕方無い事なのだけだ。

とにかく、お金を下ろす為に銀行の中へ入った。

銀行内は広く、高い天井からは魔光灯の光を反射して輝くシャンデリアが吊られている。見る限り敷地の半分ほど使った待ち合い側には、対向する窓口に合わせて、ソファの色で分けられていて黒と赤に二分されている。赤が硬貨の預金の預け入れと払い戻し、黒が融資や借り入れなどの相談や両替といったその他の雑事に対応する様に、三人掛けのソファ五列が綺麗に並んでいた。

そんな訳で、当然赤いソファ側の番号札を取って、待ち合い席を見る。優に二百席を超えるだろう赤いソファ群には空きがあるものの、一脚に一人は座っていて三割ほど埋まっていた。その中に見覚

えのある人物が居たので、そちらへ向かう。

「やあレーデ、昨日振り」

「おお、リキット。今日はやんちゃでもしたのか？」

僕の服装を見て最初にそう言う辺りが、レーデっぼさ、良い所とでも言うのだろうか。一方のレーデは私服で、茶のカッターシャツと黒のスーツで大人っぽく感じる。

「認定試験の時に泥が付いちゃったただだよ」

「へえ、認定試験。・・・ちゃんと仕事してるんだな」

「してるよ！失敬な」

軽く笑いあつて、レーデが先に話題を変えた。

「ところで、そちらは？」

「その試験の受験者の、ネステイ君」

「ネステイと言います。よろしくお願いします」

「リキットの友達の、レーデだ。よろしく」

レーデが立つて握手を求め、ネステイがそれに応じる。

「ところで、レーデもお金を下ろしに？」

「ああ。昨日の冗談じゃないが、旅仲間も目的地も決まったし、明日は旅の準備をして・・・それで、発とうと思つてな」

「また急だね？」

本当に急な話だけど、それが怒りに変質する事は無く。今ならむしろ、頑張つてきて欲しいと素直に思う事ができる。

「思い立つたが吉日つてな。まあ、仲間を無為に待たせる訳にもいかないし、ここで使わない分は路銀も増える事だしな」

旅をして得たものがこうした判断の早さや、僕とは違う行動力にも影響しているのだろうと思うと、レーデが服装だけでなく内面も大人びて見える。

「旅と言つと、巡礼されているんですか？」

「いや、俺の場合ただの旅行趣味さ」

「素敵な趣味ですね。次は何処に行かれるんですか？」

ネステイの事を冒険者だと思つていて、旅人なんて珍しくない

いつか、彼自身もそうだろうと一瞬思ったけど、どうも違うようで興味津々に聞いている。

「南の方を目指すのさ」

「またサリツサへ行くの？」

レーデが学業を終えて、旅に出た時に聞いた目的地がサリツサだった。

「ん？・・・そうか、そうだった。・・・お前が顔を真っ赤にさせて、食べた事も無い本場カレーの辛さを必死に説明する姿が滅茶苦茶おかしくて・・・それで、最初の目的地をサリツサに決めただったっけ」

「その理由、初耳なんですけど？」

僕はわざと不貞腐れた声色にかえる。

「ははは、今でこそ言える真実ってやつだ。気にするな。・・・おっと、俺の番みたいだ」

いつの間にか、レーデの番号が呼ばれていたみたいだ。番号札を持って窓口へ向かうレーデ。

お金の貸し借りとしての商いならあるが、銀行機関というのはエクスピア王国銀行以外にオルフィード大陸には無い。そのためレーデに限らず、旅人は路銀を持ち歩く必要性があるのだ。国家間を跨いで銀行経営なんて、一般人である僕からしても難しか存在しない事くらい分かる。そんな訳で王国銀行の性質なんてものは比べようが無いけど、金融業の中でも銀行は独特な堅牢な空気を持っていて、言い換えることが出来るなら金の牢獄という感じだ。待ち合い側と職場側の間にそびえる、格子の壁に空けられた窓口越しでしか取引を出来ないというのもその理由の一つ。もちろん、その印象すらも信頼を勝ち得ている要因なのかも知れない。

しばらくして、レーデが戻ってくる。

「じゃあ、俺はこれで準備をしてくるぜ」

表情からも生き生きしているのが見て取れる。

「また会えると信じているから、さよならは言わないよ」

「次会う時までには、幹部職になつてろよ？」

ギルドの幹部職というのは、平の職員、管理職の上にある等級職で、各部門毎に一名から二名しかいない様な実質の経営陣の事。どれ程先の事は分からないけど、高いハードルである事は間違いない。僕からは、頑張るよとしか言えなかった。

番号札から待ち時間に余裕があるのは分かっていたので、銀行の外まで見送りに出る。

じゃあ、また。そう言つて、互いに手を振つて別れた。

「レーデ、君にワイトフラウの導きがあらん事を！」

神話の時代。神々の中に、ワイトフラウという女神がいて、迷いや旅人に道を示し救う女神として崇められていた。ワイトフラウの導きの道を進む者には成功や無事が約束されると言う逸話だ。旅人との別れの際にこう言つて送る。神話は宗教とは違つて、生き方や救いを説くものでも無ければ、教えを別にする者に対しても平等・・・というよりお伽話のような物だ。レーデは無宗教だと言つてたと思うけど。

「おう！お前こそ、アルプルドには気をつけるよ！」

同じく神話には、アルプルドという女神が出てくる。アルプルドは悪魔を誘惑したり、悪魔の居る地を荒らしたりする女神で、決して悪い存在ではない。しかしそれが転じて、悪い誘惑を断つ事や家内安全を願う時に、言う言葉が、アルプルドに気をつけて。となつた。

どちらの女神も噴水に飾られた石像として彫刻されている。この別れを彩るように、噴射される水の勢いがいつもより強くなった気がした。

「買い物にまで付き合わせちゃつてごめんね」

立ち寄つたのは、装飾品を扱う店だった。露店のアクセサリを幾つか見たけれど、これといった物が無かつたからだ。プレゼントするからには、単純な細工過ぎず豪奢感の無い物がいい。その上で、

思い出になるような印象的な物。ちょっと考えすぎだろうかと思うけど、ミシエルの頑張りに対するご褒美なので、僕が妥協するのはおかしいという考えの方が強い。選び出すとちょっと面白くなってきたというのが本音かも。

「僕は全然構いません。プレゼントはじっくり決めた方が良いと思いますし」

そう答えるネスティに買った食材の半分を持たせているのが、なんと気まずい。もちろん断ったのだけど、ご馳走になるし筋力も付くしと色々理由をつけて持った。彼は案外頑固なのかもしれないと思う。

店内の壁は白地に塗った壁に黒のラインで大きな菱形をいくつも描いていた。端に桃色の大きな花が青と白の花瓶に生けられていて飾り気の少ない印象を受ける。代りに、ガラスケースの被された陳列台の中には様々な彩りで輝く宝石や貴金属が存在を主張していた。「いらつしゃあいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く。腰の部分が引き締まった赤いデザインベストと黒のタイトスカートで、体のラインを強調した女性従業員がショーケースの奥に立っていた。以前に衣服店で見た顔だった。

「以前、衣料品店で働いてませんでしたっけ？」

「はい、働いてました。私に会いに来るなら、今度からこちらへ来て下さいね？」

スタイルも良く看板娘というのに申し分無いからこそ、そう言うのも有りなのかもしれない。

「どうしてこちらに？」

「つい、聞いてしまう。」

「こっちの方がお給金がいいからですとも！」

キツパリと答える。予想通りの回答がなぜか僕に安堵感を与える。さて、接客で付き添ってくれるのはありがたいのだけど、今回においてはどうしても自分で選んで決めたくて断った。

店内を一巡して気になった物が一つ、人差し指と親指で作った輪の大きさほどの銀のコイン型ペンダントだ。ペンダントの中には鳥が立体に彫られていて、足でハート型にカットされた赤い宝石を掴んでいた。中古らしく銀はひどく黒ずんでいて、見ようによってはガラスに見える。ただし、銀製品であるのと赤い宝石が鮮やかなルビーであるために、中古なのに異様に高額。銀行で下ろした額を足すとギリギリ足りるほど、明日が給料日でなかったら買えない。聞けば、つい先日値下げしたばかりだという。運命的な巡り合わせ、このペンダントもミシエルの下へ行きたいと言っているように感じた。

「ありがとうございますあ〜」

女性店員の好意で小さなリングを連続させたネックレスをおまけして貰った。

「ただいま!」

惨事になっている可能性を考え、ネステイを外に待たせている。

ミシエルはどうしていただろう。ぱつと見、今朝より綺麗になっているので掃除をしたようだけ。居間からミシエルが走ってくる。「リキットおかえりー!」元氣してるか?リキットの娼婦するぞ!」

「・・・はい????」

ミシエルの発想は僕の想像の遙か彼方を行っていた。しばらく唸って考える。

「もしかして、僕の居ない間に誰か来た?」

「うん。ゴザシヨウが来た!」

ゴザシヨウって誰。・・・ツ全くわかんない、ギブアップだ。誰かは来たのは確かなようだけ。

「じゃあ、パンサーと何か話した?」

「うん。ゴザシヨウの言ってる事分かんなかったから・・・パンサーに聞いたらダメ?」

悲しそうに顔を歪めるミシエル。

「そうじゃなくて、パンサーの事を見られなかったか心配してるんだよ」

「ゴザシヨウ帰ってから出したよ!」

「偉かったね、ミシエル」

そう言っって頭を撫で回す。懸命な主張過ぎて僕が罪悪感を感じる。

「パンサーと話をさせてくれる?」

「うん!」

この間の失敗を繰り返すつもりはないから、パンサーを持つつもりは毛頭無い。ミシエルの話から考えれば、パンサー曰く魔力が残っているはずだし。

何も無いミシエルの右手周辺が歪んで、ゆっくりとその形を成していく。

(パンサー、どういう事だい?)

パンサークローは具現化しなくてもミシエルの周囲で起こった事は周知しており、僕の言いたい事も分かっているはずだ。

(申し開きの余地も無い。お主を訪ねて来た不遜極まりない女が、ミシエルの事を性的奴隷と罵ったのだが・・・その意に程よい言葉を知らぬ故)

そんな都合のいい言葉、僕も知らない。

(誤魔化すとか、嘘を吐くとかあったでしょう?)

(僕の性質に合わぬ上、契約によってミシエルに対して嘘は吐けぬ) 契約を結ぶと魔力の供給を受ける代わりに、精霊側にも制約があるわけか。

(・・・というか何で娼婦?)

(立場が多少違えど、する事は同じであろう・・・娼婦の意には、男を慰めて元気にすると伝えた。お主の力で何とか誤魔化して貰えぬだろうか?)

(そりゃまあ、何とかするけどさ。・・・ところで、ゴザシヨウって何者なの?)

(ふむ。数度しか話さなかったが、語尾に、御座いましょう。と言
う不快な女だ)

御座いましょう・・・ゴザイマシヨウ・・・ゴザシヨウ・・・な
るほど。

しかし、ミシエルに毒突いたのは、家主の僕を含めて侮辱したも
同然だ。許すまじ、ゴザシヨウ!

(ところで、外に妙な気配があるのだが?)

(ああ忘れてしまう所だった・・・ネステイと言って、クランクハ
ンターになったばかりの少年で、とても良い子だよ)

(僕の感じるのとは異なると存ずるが・・・)

(他に何か居るって事?)

(敵意は感じぬ故、気に留める事も無かるう)

気になるって・・・。というか、気配や敵意まで分かるっていう
のは、パンサークローは結構便利なんじゃないかと僕は思う。

とりあえず、ミシエルに娼婦と言わすのを止めさせたい。

「ミシエル、パンサーしまつていいよ」

すーっとミシエルの右手から消えるパンサークロー。

「ミシエル、いいかい。娼婦って言うのは、お金を貰って身体を売
る人なんだ。・・・ミシエルは僕にお金を貰ってないし、身体を売
ってはいないだろう?」

人差し指を立ててゆっくり力説する。

「ん〜、クエストしてる!」

「そう!ミシエルは僕のソルバーだ。・・・それに娼婦とかってい
う言葉は、人を悲しくさせるんだ。・・・例えば、僕はミシエルの
事なんて嫌いだ!・・・ってい

「リキット、嫌い・・・?」

ミシエルは目を潤ませて口をへの字に曲げた。今にも泣き出しそ
うだ。

「違う、違うよ。僕はミシエルの事好きだよ」

時すでに遅く、ミシエルの目から涙がこぼれ落ちる。

「んっ・・・うっ・・・ほん・・・と？」

「うん本当。ミシエルが大好きだよ」

膝について抱き寄せ、背を撫ぜながら。ミシエルが落ち着くまで、ずっど。

・・・しばらくして、ミシエルが泣き止む。ローブの肩口は涙と鼻水を吸ってぐっしょりだ。

プレゼント用に包装していない物をポケットから取り出して、ミシエルに見せる。

「これはミシエルの事を好きな証、僕からのプレゼント」

ペンダントには既にネックレスを通してある。

「・・・何これ？」

「ミシエルに似合うと思って、選んだんだ・・・これをすればミシエルはきつともっと可愛くなるよ」

首に掛けてやると、ミシエルはそれを眺めたり、揉んだり、顔に当てたりした。

横道に逸れてしまったけど、ちゃんと納得してもらわないといけない事がある。

「・・・娼婦とかって言葉はさつきみたいに人を悲しくさせるから、絶対に使っちゃダメだよ？」

「うん、わかった。・・・じゃあ、ゴザシヨウは嫌なヤツ？」

「そうだね、デュライよりも嫌な奴だね」

「お待たせ、さあ中へ入って」

「お邪魔します」

手持ち無沙汰になって、パカパカを撫でていたらしいネスティを招き入れる。僕のローブの異常に気が付いて怪訝な顔をするも、何も聞かない。

パンサーの言っていた気配というのが気になって見回ったけど、何も居ない。仕方が無いので、玄關の戸を閉めようとすると、向かい隣の一軒家の端から青の束ねられた髪がひらりと舞い踊る。慌て

た手つきでそれを回収する手、その袖は僕のと同じ物。・・・十中八九、マルガだ。

「マルガー！もう仲間はずれにしないから出ておいでー！」

聞こえるように叫ぶと、少し躊躇した振りをしてマルガが出てくる。ミシエルの事もあって、マルガが着く前に、彼女を理由にしてネスティにデュライの話を禁止と伝える。お互いに元々それ程話す種も無かったため、デュライの件は一通り話し終えている。パンサーの事やネスティが不愉快になる様な点を除いて。

「えへへ、ばれちゃいました？・・・自信有ったんですけどお」
舌を出して笑うマルガ。

マルガは料理が不得手という事で、ネスティの話し相手になる。ミシエルは料理を手伝うのにこなれてきた感じがある。そんな訳で今日は本気で僕の腕を存分に振るって、我ながら素敵と思う料理の数々を作り上げた。

野菜や肉と溶いた米粉を混ぜ合わせた物を軽く薄焼きにして、その裏を焼く時に二枚重ねて間に卵を落として焼いた、お好み焼き。珍しく豚の小腸が入ったので、これを刻んでしつかり湯でて、彩り豊かな野菜類と一緒にピリ辛に炒め卵黄を乗せた、ピリ辛もつ野菜炒め。余った卵白と牛乳を合わせて蒸しあげて、その上にトマトとパセリをあしらった、白卵蒸し。自慢したくなるような見事な霜降り模様一枚肉を塩胡椒だけで焼き上げ、皿にワインを使った甘めのとろみのあるソースと、茹でたコーンにグロッコリーを添えた、ステーキ。余った野菜でサラダも作った。

品数多く振舞おうと思って買った食材たちも、一人増えれば適当な量になるものである。

辛口審査員のミシエルにも受けが良く、当然といえば当然の結果として、高評価を得た。これが僕の実力ですよ。料理の腕は、学生時代に僕の料理をけちよんけちよんに言われて以来、その人物を見返したくて、ずっと磨き続けてきた。今では料理にはかなりの自信

がある。

クエストの話題より、料理の話題の方が多かったのが非常に気持ち良かった。

マルガにアルコールをあまり飲ませない様に気を付けていたのだが、陽気に振舞っていた。もつとも、いつも陽気なのだが。

「私は決めましたあ。リキットさんを嫁に貰っちゃいます！」

「本日は話し相手どころかご馳走にまでなり、本当にありがとうございます御座いました。マルガさんの家と泊まってる宿は西側にあるんで、責任を持って送って行きますので。ではまた明日、お会いしましょう」
爽やかな笑顔で酔っ払いを引き連れていくネスティ。

「こちらこそ、楽しかったよ。また明日」

明日、例のクエストを受けにネスティがまたギルドを訪れる。どうも同行者の筋肉大男のマセルの用事がまだ掛かるらしく、短期的なクエストを受けて暇を潰すという事らしい。

別れを告げて、手を振ってそれぞれの帰路につく。

見えなくなったら、ミシエルに家に入ろうと促す。

（先程の気配がまだあるのだが）

そうパンサーの方から声を掛けてきたのには驚いた。ミシエルの右手には具現化したパンサークローが装着されていた。

（気配って、マルガじゃなくて？）

（人間ではない。魔物が精霊かそういった類のものだ・・・徐々に弱まっておる。このままでは消滅しかねない）

敵意は感じないらしいし、消滅っていうのは穏やかじゃない。仕方無く、パンサーに気配のする場所を教えてもらってそこを探す。ミシエルも一緒になって探してくれる。

（居ないじゃないか、パンサー）

（動いてはおらぬ、よく搜索せよ・・・まさか儂がお主にこんな嘘を吐いておるとでも？それに何の利点があるのか）

確かに。でも、何もいない。

（・・・すまぬ、失念しておった。精霊であるならば、お主には見えなんだ）

思い出したように非を認めるパンサーだったが、虫を探すように態勢を落としていた僕は、それを見つけた。

それは排水路で見つけた小さな青白い蛇だったが、昼間とは打って変わってピクリとも動かず横たわっていた。

（動かないんですけど。もしかして死んでる？）

（それは無い。精霊のようだが・・・どこか部屋へ持って行ってはくれぬか？）

動かない蛇を拾って、庭から居間へ戻る。

テーブルの上に蛇を置くと、椅子に座ったミシエルがパンサークローを小蛇に触れさせる。どれくらいそうしていただろうか。軽く片付けておいた食器や調理器具を全部洗い終わってしまった。僕も座ってそれを見てみると、小蛇がピクリと動き、何事も無かったように身を起こした。

（何をしたの？）

（同じ精霊同士、見殺しにするのは目覚めが悪い故、魔力を分け与えたまでの事。しかし根本的な解決にはならぬ・・・リキット、お主はこの精霊と契約するか否かを決めねばならん）

パンサーの言うには、小蛇精霊はその小さな姿に相応する脆弱さながら、僕に助けられた恩義だけで中央広場からずっと追って来てマナの枯渇によって瀕死になったらしい。追って来たのも、僕と契約したがっているという事だそうだ。

（契約については、僕は全然構わないんだけど。色々分からない事だらけで聞きたい事だらけだ。先にそつちを聞きたいんだけど？）

（良かるう。儂に答えられる事なら何でも聞くがよい）

僕が気になったこととその回答を整理する。

第一に僕が小蛇精霊を見れる事については、正確には分からないという。推測なら相性がとても良いとか、何か因果関係があるとか、

ただ分からない以上考えるだけ無駄だそう。

第二に契約といのは、精霊に生存できる以上の魔力を与える代わりに使役できるとい、ミシエルとパンサーの関係で分かっていた事と同じ回答で肩透かしを食らった。新たに分かった事といえば、使役と言っても強制的なものではなく共生関係の様なもので、契約はどちらからでも解除できるという事。精霊の成長によっては、必要な魔力も増減するという事。

第三に小蛇精霊とは、パンサーと僕の様に通じていない訳ではなく、小蛇精霊が人語を覚えていないだけという事らしい。これは、契約が成立すれば、互いに伝えたい事が分かるという。

重複した質問を何度かしたけど、まとめるとこんな感じだろう。他にパンサーが補足的に説明してくれた事も少しある。例えば、前に僕の持つ魔力は少ないと言っていたけど、小蛇精霊の必要とする魔力は今の僕でも十分補えるという事。そして、魔力を与える生活を続ければ自然と、僕の持つ魔力の量は基本的には増えるらしいという事。

話を経た僕の感想は、契約というのは一緒に暮らするような話だった事だ。そう考えると家族が増えるという感覚で、僕とミシエルとパンサーと小蛇の一家・・・妙な取り合わせだけど、とても楽しそうだった。そんな訳で、契約に対して乗り気になる僕。

(それで、契約って具体的にどうすればいいの。武器に宿すの?)
(精霊としての性質が不明な以上、道具に宿すかは後で考えるべきだ。道具に宿すと難点が生じる・・・例えば、離れると魔力供給が出来なくなり、そのまま契約が解除される事もある)

迂闊に道具に宿して、どこかに忘れただけで終わっちゃうのは嫌だな。

(そやつには名が無い、まずは名を付ける事だ。次に、誓いを立て、お主の胸・・・心の臓に押し込むがよい)

名前・・・名前か。ミシエルの時といい、こう立て続けに名付け親になるとはね。改めて、名付けると言われても何も思い浮かばな

いものだ。ミシエルは恥ずかしながら、僕の初恋の人の名前だ。蛇の、しかも精霊の名前なんて何にすればいいか分かる訳無い。ここは縁起のいい名前を。

「よし、お前の名前は・・・ラッキーだ！」

青白い蛇は真つ赤な舌をチロチロと出す。続けて契約をしようと掬うように両手を出す。小蛇はそれから勢いよく逃げるのだった。

(その名は嫌だとの事、真剣に名を考えるべきだ)

「う・・・ごめんなさい」

確かに、今のは酷かった。反省。

(名が決まるまで、そやつを肌身離さず側に置く事だ。契約者として与えるよりは、消費する魔力は数倍は多かるうが、今のお主なら何とか成ろう。・・・僕は戻る)

そう言い残して消えるパンサークロー。・・・ん、ちよつと待った。今変なこと言わなかったか。契約者はそれ以外の者より消費する魔力が数倍も多い・・・逆を言えば、契約者じゃない方が魔力を使うって事だ。以前に味わったあの気持ち悪さも酷い疲労も、それが原因なんじゃないのか。仕方が無かったとは言え、何とか背筋にひたすら寒気を感じる。

その後も精霊の名前を色々考えては言ってみたが、逃げられるばかりで合格点を得ることが出来なかった。

ラッキー、ハッピー、ナイス、グッデイ、ソフトブルー、スネー君。・・・精霊の感覚なんて分からないけど、これで良い筈もないよね。

今日はミシエルがやたらと引っ付いてきたので、それ以上考えることは出来なかった。風呂も一緒に入ったし、何処に行くにも付いて来た。当然そのまま一緒にベッドで寝る事になった。

第八日 給料日の真実く先く

いつものようにパンを買いに出ようとしたら、玄関扉の隙間に手紙が差し込んであった。

封のされたその手紙にはこうあった。

「我が友リキット・インデルミッツへ

聴聞委員の連中がすぐそこまで来ている

俺は今後お前の身に起こるだろう事を分かった上でリザリアを發つこれは俺の我俣だ 許して欲しいとは言わない一生俺を恨んでくれて構わない

最後にお前という男を見込んで頼みがある ミシエルとあの子の精霊を守って欲しい

レーデ・ファジア」

相変わらずミシエルの事を心配してくれている。何度も念を押さねなくてもミシエルの事はちゃんとみているつもりだ。あとは尋問を受けるという意味であったとしても、大袈裟な書き方だと思っ程度だった。仮に、占いとかで僕の身に何かが起こると言われても、言い知れない不安感しか得るものは無い訳だし。ともかく、手紙の内容からレーデがこの街にはもう居ないという事だけを知る。軽くではあったけど別れは既に告げてあったからこそ、その手紙は酷く後味が悪いものとなった。だからと言って今からどうすることも出来ないのです、仕方なくその手紙をローブの中にしまっ。

「今日も仲良しさんだねえ？」

ミシエルの手を引いて、パン屋につくなりオバサンに言われる。

「うん。リキットはミシエルのこと大好き！」

そう言ったけど。昨日の今日と言うこともあって、気恥ずかしい。まあ、ミシエルが嬉しそうにしているだけで十分だ。

今日もまたミシエルに選ばせると、僕に何が食べたいかと聞いて

くるのだ。僕がミシエルに聞くのを真似ているだけとも取れるけど、僕に気を使ってくれていると考えると、何だか心にじーんとくるものがある。勿論、僕の食べたいのはクロワッサンだけだね。

一日振りにミシエルを連れて西ギルドにやってきた。頭の上には青白い小さな蛇の精霊を乗せている。勿論それを不振がつて凝視する人も、振り返る人も居ない。精霊は普通には見えない存在だからだ。

当然ネストもマルガも全く見えていない様子。挨拶を交わすと昨夜のマルガの奇行を責め立てる。ネストはやれやれと首を振って、仕方が無いと言い切ってしまう。マルガも昨日と同じように悪びれる事も無く、お喋りを始める。まだ知り合って日は浅いけど、いつも通りと思えるだけの居心地の良さがそこにはあった。

「みんな、今日は給料日だ。・・・マルガ、リキットほれ。中をちやんと確認してサインしろよ?」

そう言うネストに、蠟で封のされた封筒を渡される。

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます!実は懐がすーすーしてた所だったんです。事実だ。昼までに貰えなかったら昼ご飯抜きになっていた所だった。中には小さな金貨が二枚と受取確認書という書き出し書類が入っていて、早速サインして書類をネストに渡す。ネストに雇われている訳ではないけど、西ギルドの責任者はネストなのでそういう形になる。

「リキットさんて、貯蓄してないんですか?」

「してたけど、色々入用だったからね。・・・マルガは貯蓄してるの?」

「してて欲しいですか?」

人差し指を口に付けて答えるマルガ。

「意外とちゃっかりしてそうだから、してるかと思っただけど・・・」

「今は色々調べたり、後学のために本をいっぱい買ってるので、リキットさんと同じお財布空っぽですよ。私達、気が合いますね！」
貯蓄の有り無しは、別に気が合うとかではないと思う。

「ネストさんは豪快に使ってそう・・・」

「俺は貯金がどれくらいあるか知らんよ。・・・そういっつのは全部嫁に任せてあるから」

「え。ネストさん結婚してるんですか！」

「言っただけじゃあなかったっけ？」

「初耳ですよ」

「ふっふっふ、こっぴどく見えてネストさんの奥さん・・・」

「おい、マルガ！」

なんて他愛ない話をしていっていると、あつと言つ間に昼時になるのだつた。ミシエルに何が食べたいかと聞けば、美味しいものと答えたので、今日は自分へのご褒美のつもりで昼食を取る事に決めた。

程よくお腹も空いて、何を食べようかと考えながら、給料も貰つたことで上機嫌に銀行へ向かう。金貨を持ち歩くのはばつが悪い事になると思うので、両替と預金をしに行くところだ。

しばらく歩くと、高級食材の魚のマークを掲げた店看板を見つける。そういえば、リザリアに来て以来、魚料理を食べていなかったなんて事を思い出したりして、今日は豪華に魚を食べることにした。銀行で用事を済ませて舞い戻ってきた魚料理専門店は、高級食材を扱うに相応しく全個室だった。室内は明るく綺麗で調度品や絵画が飾られていて、落ち着いた色彩を使ったゆつたりと長居できる空間を演出していた。まるで、高級宿泊施設の一室をそのまま運んで来たみたいだ。

メニューを開けば、魚貝類や甲殻類の名前を織り込んだ料理名がずらりと並んでいた。しかし、値段は書かれていない。魚料理は基本的に時価でしか売られない。それもこれも海に生息する魔甲烏賊の所為だ。

遙か昔、神話が生まれた時代からずっとオルフィード大陸を囲む海には、魔甲烏賊という魔物が大量に生息している。魔甲烏賊は海へ出る船や人を襲い食べる習性があつて、海へ出ることを許さない。海外には、他の大陸や島があるなどと記された古典などはもはや伝説だ。そんな魔甲烏賊も何故か湖川には姿を現さない。その巨体の所為か、水質が合わないのかは定かではないが、そのお陰で川魚や海際で釣れる魚を食べることが出来る。その漁獲量たるや家畜の生産量に比べれば、雀の涙なのだ。

僕は川海老の団子揚げ、赤鯛の炙り焼き、貝とキノコのホワイトソースパスタを注文する。

「コチヨコチヨ〜！」

手を叩いてミシエルは僕の頭にいる蛇の精霊を呼ぶ。パンサーと契約しているからかミシエルには蛇の精霊が見える。舌をペロペロと出す行動を見て、こちょこちょしているみたいという事で付けたらしい。ただ、小蛇はその名前も気に入ってないらしく、基本的に呼ばれても無視する。

そういえば、今日はこれと言って何かをした訳でもないのに、すでに疲労感があつた。これも精霊に魔力を供給している影響だろうか。そろそろ真剣に名前を考えた方がいいかもしれない。

呼ばれても無視するものの、ミシエルと遊ぶのは楽しいらしく、結局料理が運ばれてくるまでじゃれ合っている。青白くちっちゃい体に真ん丸の目が印象的な蛇。こいつには何だか可愛らしい名前が言いたいと思っている。

「チツコメ・・・じゃ、名前じゃないし」

と言うと、不思議と小蛇精霊がこちらに寄ってくる。どうやら良い所を突いているようだ。

「チコメコ・・・チコメコはどうだ？」

分かんないだろうけど、コチヨコチヨの感じを少し被せてみると、足も無いのにぴょんぴょんと跳ね上がり嬉しそうにその場でくるくると回りだす。

「よしチコメコで決まりだ」

チコメコの頭を人差し指で撫でると、その指を伝ってスルスルと頭の上に戻ってくる。

「ん、契約はまた後でね？」

正直言つて、契約にはまだ躊躇いがある。パンサーとの話で僕にもチコメコにも利点があるのは分かったけど、本当にそこまでする必要があるのかと思つてしまい。どうしても踏み切れない。いや、契約をすることで得られる力・・・チコメコの力をどうしていいのかわからないというのと、それで力を得た僕が変わってしまうのが怖いというのが本心かもしれない。

誰かに習つたつけ。力と言うものはちゃんとした覚悟を持つて受け入れなければならぬと。父さん、いや、兄さんだったかな。だけど本当に今の僕にその覚悟が出来ているのかと言つたら疑問だ。メリットだけを追い求めたら何か大切な物を失つてしまつてもいいし。ともかく今はもう少し様子を見て、自分自身の気持ちをしつかりと確かめた方がいいと思う。

薄い青と茶のエプロンドレスを着た女性が料理を運んできた。

ほどよく揚げられた団子は、赤と緑と白の三色が透けて見える。

口を含めばぷりぷりと海老の身が踊りだし、加え色に応じて辛味、野菜の甘み、ふっくら感を味わえる川海老の団子揚げ。

網の焼き目のついた赤鯛の炙り焼きは、塩だけの味付けでじつくりと魚本来の味を堪能できる。淡泊な味わいだけど、塩味で鯛の脂・・・旨みが口いっぱい広がる。食欲をそそる、赤というのがまた艶やかだ。

貝とキノコのホワイトソースパスタは本当に旨い。貝からでた出汁が全体に広がり、ホワイトソースがそれを包み込む優しい味だ。無駄な飾り気や味の無い、洗練し調和されたシンプルであるが故の深みを感じる。

ミシエルも今までに無いほど、と言うのが残念だけど、目をキラ

ツキラさせて頬張っていた。僕の選択は大正解だったようだ。ただ一つを除いて。

「ええ！4900oren!!」

はつきり言おう。お金足りない。

以前、食べた時は確か四人でこれくらいの値段じゃなかったか。

ここ一年でまた価格が倍増している。漁獲制限や水辺のモンスターが無くなったたりでもしたら、あつと言う間に幻の食材になるんじゃないだろうか。

「すみません、銀行でお金下ろしてくるのでちょっと待っていてください」

そう店員に言い4000orenしか手持ちの無かった僕は、ミシエルと手持ちのお金を残して、また銀行に向かうのだった。こういう時、ギルド職員のローブを着ていると信用されやすいので便利だ。もちろん、こんなこと初めてだけど。むしろ、ミシエルを説得する方が骨が折れた。

箱型の中が見えない車両を牽引する馬車がゆっくりとこちらに近付いて来る。すれ違うことが出来る程には距離があり、馬車も歩くほどこか速度を出していないので、さほど気にせず進む。馬車は僕の目前まで来ると静に停車する。

不審に思うが銀行へ急いでいる僕は、真横を通り過ぎようとする。勢いよく扉が開く。出てきたのは体躯のしっかりした男で、止まった馬車に乱暴に引張られ、押し入れられる。そのまま滑る様に馬車の床に転がって、引張った男に馬乗りになれ、目隠しをされた。状況を理解する暇も無く、太い布のような物を口にきつく巻かれる。

「んー！んー!!」

叫ぼうとしても声が出ない。体を羽交い絞めにされたまま、どうしようもない不安と恐怖で心臓の鼓動が早まり、呼吸がうまく出来ず息が苦しい。馬車が走る音と外の喧騒だけが通り過ぎていくのが

聞こえるだけで、男は一言も喋らなかった。誘拐されるのか、これから殺されてしまうのか、最悪な状況に陥った事だけは確かだった。

第八日 給料日の真実〜中〜

「んー」

きつく太い布を噛まされているため、声が消されてしまう。こうなつた理由を知りたい。

手足すら縛られ、もはや身動き一つするのも困難になつた。その代わり、男の羽交い絞めから開放され、馬車の座席に座らされている。男は相変わらず一言も発することは無かつたが、喧騒から離れ静かになつていく。しばらくすると、馬車がゆっくりと止まるのがわかつた。くの字に曲がつて男に担がれる。

足音が徐々に乾いた音に変わり、はつきりとした響きから狭まつた空間を感じる。どうやら屋内へ連れて行かれていているらしい。

馬車の座席の時と同じように座らされると、口に噛まされた布と目隠しを外される。

暗い室内には何も飾り気が無く、無造作に床に置かれたカンテラの火だけが室内を照らしていた。僕をさらつた男と、唯一ある扉の近くに誰かが居た。男は黒と灰の横縞模様のシャツと、灰色のズボンを履いているが、一番特徴的なのは頭だ。髪の毛が一本も無く、前頭部がぼこりと腫れ上がっている。

「何の、御用ですか？」

精一杯の強がりで発した一言だ。心臓は既に荒れ狂っている。

扉の近くにいる人影がこちらに近付いてくる。カンテラの火が映し出す人物は、僕と同じギルドの制服であるローブを纏っていたが、ラインの色や装飾が違っていた。ローブの上から腰にベルトを巻いており、胸と尻の膨らみが強調されている。妙齡と言うには憚れるけど、年増というには肢体に帯びる弾力感に遮られる。成熟した女性というのがしっくりとくる。伸ばせば長そうな薄い紫の髪を、頂点後ろでぐるりと巻いている。巻かれた髪の膨らみに、高級感のある髪留めと髪装飾を挿している。側頭部からも伸びる薄い紫の

髪は波打っていた。

「あら、てつきりご存知かと思っていましたけれど。・・・リザリア東ギルドのリキットさん、で御座いましょう?」

明らかに僕の事を知っている。きつとこの人がミシエルの言っていたゴザシヨウだろう。

「申し遅れました。私はギルド聴聞委員のエクシス。これは、私の雑用奴隷のケツペンですわ」

奴隷と言い切ってしまう辺りが、僕に確証を与える。

奴隷制度は、百年以上も前の荒れていた時代にあつたものだ。奴隷制度が原因で有史以来の最大の戦争が起こつたのは、今ではただの歴史でしかない。従つて、実質はどうか知らないけど、奴隷は存在しないと云うのが世の理だ。

「貴方が昨日、僕の家に来た人か?」

「ええ、色々と聞きたい事が御座います」

その答えを聞けば、僕はエクシスを睨み付けてしまう。もちろん、ミシエルの侮辱した事への怒りからだ。

「・・・ご自分の立場と云うものを理解して頂けてないのですね?・・・ケツペン!」

いつの間にか視界から消えていたケツペンが、エクシスに黒く長い棒を持つてくる。エクシスがそれを空で軽く振ると、振るった力の分棒の先端までがしなって湾曲を繰り返す。乗馬鞭に近いと思えば、自分が何をされるか連想できてしまう。

「痛い目に遭いたく御座いませんでしょうか?・・・東ギルドで何を調べていたか。話したくなりましたかしら?」

「・・・何の事ですか」
「ビシッ!」

エクシスが棒で床をはたくと、軽快に破裂したような音が室内に響く。

「では、レーデという男を何処に隠したのか・・・正直に話しては頂けません?」

「わかりました、正直に言います。・・・一体何の事を言っているのか、さっぱりわかりません」

ヒュンッ！

エクシスの振るったしなつた棒の先端が、僕の縛られ前に出した腕を掠める。掠っただけのため音こそ出なかった。一瞬痺れた様に感じた後、ひりひりと痛みが僕を襲う。はっきり言って痛いけど、痛みには負けたくは無かった。

ピシッ！

返す棒が僕の右肩を強く撫せて行く。当たった時の痛みと、少し経って現れるじわじわとした痛み。歯を食いしばるのに躊躇う必要があるだろうか。それでも僕は睨む目をやめない、むしろ、歯を食いしばるほど睨むのが強くなっていくようだ。

「恍惚なのは、貴方のためにならない。そうで御座いましょう？・・・ケツペン、四つん這いに」

後ろに回ったケツペンに椅子を持ち上げられ、前へ倒れこむ。床と顔面直撃を避けるため、縛られた腕で庇う。その体勢からケツペンに腰を持ち上げられれば、肘を着いた四つん這いになる。

ケツペンに探らせて出てきたレーデの手紙を読んで、僕とレーデが親密な間柄だと確信したエクシスは執拗に棒を振るい続けた。

背を、尻を、横腹を何度も何度も往復する、しなる事を忘れない棒の発する鈍い打ち音。どれほどの痛みにも耐えたのだろう、どれだけの時間が経ったのだろう。僕の呻き声よりも、エクシスの息遣いの方が大きくなっていった。

エクシスが問い掛けた言葉は、ソルバーの情報漏洩に対する詰問などではなかった。キューブで何を調べていたのか、相棒のレーデはどこかというものだった。レーデはキューブで何かを調べていた。それで、僕にも聴聞委員が接触してくるのを分かっていたという事だ。レーデが何をしていたか、何をしようとしているのか知りたいというのは、僕も同じだ。だけど、聴聞委員には協力する気にはな

れない。僕を巻き込むと分かった上で、レーデが事情を話さなかったのには必ず理由があるはずだ。何より、打たれ叩かれようが、友達を売るような事は出来ない。とにかく、ここをなんとかやり過ぎして、僕も独自に調べたい。

凶暴にのたまう棒が体中を焼く。じりじりと焼かれるように痛むいい加減、腕が痺れてきた。手首が縛られているため手を広げてもなかなか踏ん張りが利かない。それでも姿勢を崩さなかったのは、知らなかったという理由で僕だけが逃げたくなかった。勿論、そうする事に意味なんて無いだろう、ただの意地だ。ここで倒れ伏したら僕だけが仲間外れに、関われなくなってしまうと思ったからだ。

一際、力強い大きな軌道を描いて、しなった棒が背中を打ち抜けていく。乾いた音が響く。

「おいエクシス、調査員が目を覚ましたぞ」

そこにはエクシスと同じ聴聞委員のローブを着た中年の男が扉を開いていた。

「・・・あら、何か分かりました？へイブマン」

息遣いを整えて振り返るエクシス。

「厄介な事になったかも知れん」

へイブマンと呼ばれた男は、腰ベルトから短剣と思われる剣差しを下げていた。濃い茶の髪は短くさっぱりとした印象を与えるが、右目の下から頬にかけて切り傷があり、まるで軍人が転向してきたようだ。

へイブマンがエクシスを部屋の外へ誘導して、部屋には僕とケツペンだけが残る。僕の後ろ側に控えるケツペンは僕の視界に入らない。

途端に、我先にと押し出る背の痛み、手の痺れ。芯に残るしなった棒の感触と、鈍く響いた肉打つ音、その余韻が噴出す様に体と心を駆け巡る。痛い。堪らず、手を伸ばし顔面を地面につける。

それでも、まだ終わっていない。少しでも回復を図るため、呼吸

を整える。縛られた手を伸ばし、耳を地に着けるのが一番楽な姿勢でそれが出来た。

ふと、自分の耳に室外へ出て行った二人の声が聞こえてきた。床に耳をつけているにしては、イヤにはつきりと聞き取れる。本来、耳に届くはずの無い声だ。鼓膜でも破れたかと心配になるけど、今はそんな事はどうでもいい。僕もレーデの事を知りたい、情報が欲しい。

「どうやら薬を含まされていたらしい。命に別状は無いから、恐らく時間稼ぎだろう」

「それで厄介事とは何ですか？」

「奴らが調べていたのは・・・魔動力炉だ」

「まさか。・・・ギルドのシステムを魔動力炉から絶とうって言うんですの？」

「そこまでは分かん。・・・ただ、そうなったら依頼人やソルバーは言うに及ばず、大陸全土で混乱が起きるのは必至。至る所で不測の事態が現れる」

「ソルバーは貧困、罪人は実質野放しになる、悪循環。与える経済へのダメージも計り知れないですわね。混沌とした時代に逆戻り、という事で御座いましょう？・・・けれど、魔力抽出所の警備は万全なはずですよ」

「それがそうとも言い切れん。・・・この街の近くに強力な麻酔の材料になる植物が生息する魔窟がある。そいつは焚くだけで十分な効果を発揮する。奴ら結構な量を揃えていたらしい。つまり、侵入自体は容易」

「通信で知らせれば良いだけでは御座いませんか？」

「もうやったさ。魔力抽出所だけ通信が途絶している。応援も頼んだが、間に合うかどうか。・・・エクス、お前の方は何か分かったか？」

「何も知らなさそうという事が・・・わかりましたわ」

「おい、インデルミッツだと・・・ったく、こんな時に・・・」

「お知り合いですの？」

「多分な。弟がギルドに入ったと聞いたことがある。・・・お前はマセル・ルイラフに知らせて準備を済まさせておけ」

会話を聞いていたから、部屋に戻ってくるタイミングが分かった。姿勢を元に戻す。

エクシスがケツペンを呼んですぐに出て行く。ハイブマンがこちらへ近付いてくる。扉が閉まる寸前、小さな青白い蛇がスルスルと入ってくる、チコモコだ。

ずっと一緒に居たはずのチコモコが、いつの間にか僕から離れていたらしい。驚きが先に立ったんだけど、僕が彼らの会話を聞くことが出来たのが精霊チコモコの力だとしたら、僕はチコモコに感謝する。

「申し訳ない。どうやら君は今回の事には関係が無かったらしい・・・我々も切羽詰っているのだよ。許してくれ」

手足の縄を短剣で丁寧に切りながらハイブマンが謝る。

「リキット・インデルミッツ君だね？私は聴聞委員のハイブマン・ロスコーという。君の兄上にはいつも世話になっているよ」

ハイブマンが手を差し伸べる。いつもこの手だ。僕じゃなく、インデルミッツの名に差し出される手。この手を出す人の家名を見る瞳には、僕がどれほどこの手に瞳に苦しめられたか、孤独に陥れられたかが全く映らないだろう。見えるのは、利権や家督への繋がり、体裁だけだ。

インデルミッツ家は代々エクセリア王国の王族への教鞭を取っている。教育事業の分野においても絶大な権威がある。王家に直接繋がるその影響力故に、一家の落ちこぼれである僕にでさえ、色んな人物が近付いて来る。

いつからそうと気付いただろうか、忘れてしまうほど昔から、僕の周りには友達と自信を持って呼べる友達が居なかった。僕の周囲

に人が絶えることはなかったが、一人ぼっちだった。真に心を許せる人が居なかった。母さんは物心がつく前に亡くなった。父さんは僕と積極的に関わろうとはしなかったし、僕もいつも厳しい顔をしている父さんが怖くて近寄らなかった。唯一、兄さんだけが僕の味方でいてくれたけど、兄さんが過保護だというのは僕にも理解できた。それでも兄さんに甘えて、誰も信じられない様な生き方をしていたのは事実だったんだ。それをレーデが変えてくれた。レーデがそれとは別の生き方を教えてくれたじゃないか。あれから5年、信じられる友も、嫌な奴だつて増えた。だけどそれは、僕をリキットとして見てくれるから。僕がそう変わったからじゃないのか。

レーデが何をしようとしているのかはわからない。それでも僕に出来ることがあるはず、レーデを助ける事が何かあるはず。決意を胸に僕はハイブマンの手を借りて立つ。そしてレーデの手紙を受け取る。

「レーデが何をしたんですか？」

「何をしたというより、これからするというのが正しいかな。．．．
ともかく、病院に送ろう」

当然の事だけど、僕にわざわざ事情を話す気は無さそうだ。だけど、チコメコのお陰でそれを知れた。

動く痛い、服がするだけでひりひりするけど

「大丈夫。僕は一人で大丈夫です。西ギルドへ戻ります」

正確には、ミシエルの待つてる魚料理専門店へだ。

「そうか。では今は急いでいるので、また後日お詫びに伺うと約束しよう」

僕の傷が浅いと勘違いしたか、手間を取られないと考えたか。あくまで僕に気を使っているように装っているけど、内心嬉々としているのが見え透いている。でも僕にとっても好都合、一刻も早く魔力抽出所に急ぎたい。

ハイブマンは本当に急いで行ってしまった。功労者のチコメコを頭に乗せて、結果的に置き去りにしてしまったミシエルの下へと、

痛みを堪えて走るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7196w/>

OLFEED ~ギルド職員の仕事~

2011年11月5日03時10分発行